宮城県文化財調査報告書第86集

宮城県営圃場整備等関連
遺跡詳細分布調査報告書

（昭和 56 年度）

昭和 57 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

「文化の時代」、「地方（域）の時代」という言葉が私達の耳馴れたものとなってから久しくなります。そして、東北新幹線の開通の日が決定され、いよいよ東北の幕開けの時がやってきました。経済基盤の確立をはかる一方で潤いのあるふるさと造りが推進され、地域に根ざした文化活動の振興を図ることは重要なことであると考えられます。

文化財は人々の素朴で豊かな心と心をつなぐ媒体として永年大事に受け継がれてきました。しかし、近年の開発の急激なテンポに追いつけず保存の処置も不十分なままに消滅してしまう埋蔵文化財もありました。

地域の開発と埋蔵文化財の保護・保存の調整は関係各機関と綿密な連絡のうえに実施しているところがあり、年を追ってその効果があらわれ、各方面から理解が得られるようになってきました。

本報告書は、県営圃場整備事業等に当たり、遺跡の範囲・性格を把握するなどの文化財保護上の協義資料を得るために実施した色麻古墳群、宮城農学寮跡遺跡及び御堂平遺跡に係る詳細分布調査の結果をとりまとめたものであります。

この報告書が研究者及び関係者は勿論のこと広く一般の方々に活用され、文化財に対する温かい理解が一層深かめられるよう願ってやみません。

最後に、この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた多くの方々に厚く御礼を申しあげます。

昭和 57 年 3 月

宮城県教育委員会　教育長　北　村　　潮

目　　次

序
はじめに……1
Ⅰ．色麻古墳群……3
Ⅱ．農学寮跡遺跡……31
Ⅲ．御堂平遺跡……81

例　　言

１．本書は県営圃場整備事業等に関連する３遺跡の調査報告書である。
２．調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町村教育委員会の協力をいただいた。
３．本書における土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原：1967)を使用し、土性については国際土壌学会の粒形区分を参照した。
４．本書に使用した地図は国土地理院発行1／2万5千地図の「仙台西南部」、1／5万地形図の「中新田」「仙台」「川崎」である。
５．本書の執筆編集は文化財保護課が行った。各遺跡の執筆担当者は次のとおりである。

色麻古墳群　　古　川　一　明
農学寮跡遺跡　　狩　野　正　昭・真　山　　悟
御堂平遺跡　　斎　藤　吉　弘

は　じ　め　に

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業等に係る３遺跡（色麻古墳群、宮城農学寮跡地遺跡、御堂平遺跡）の詳細分布調査を昭和56年度国庫補助事業として実施した。

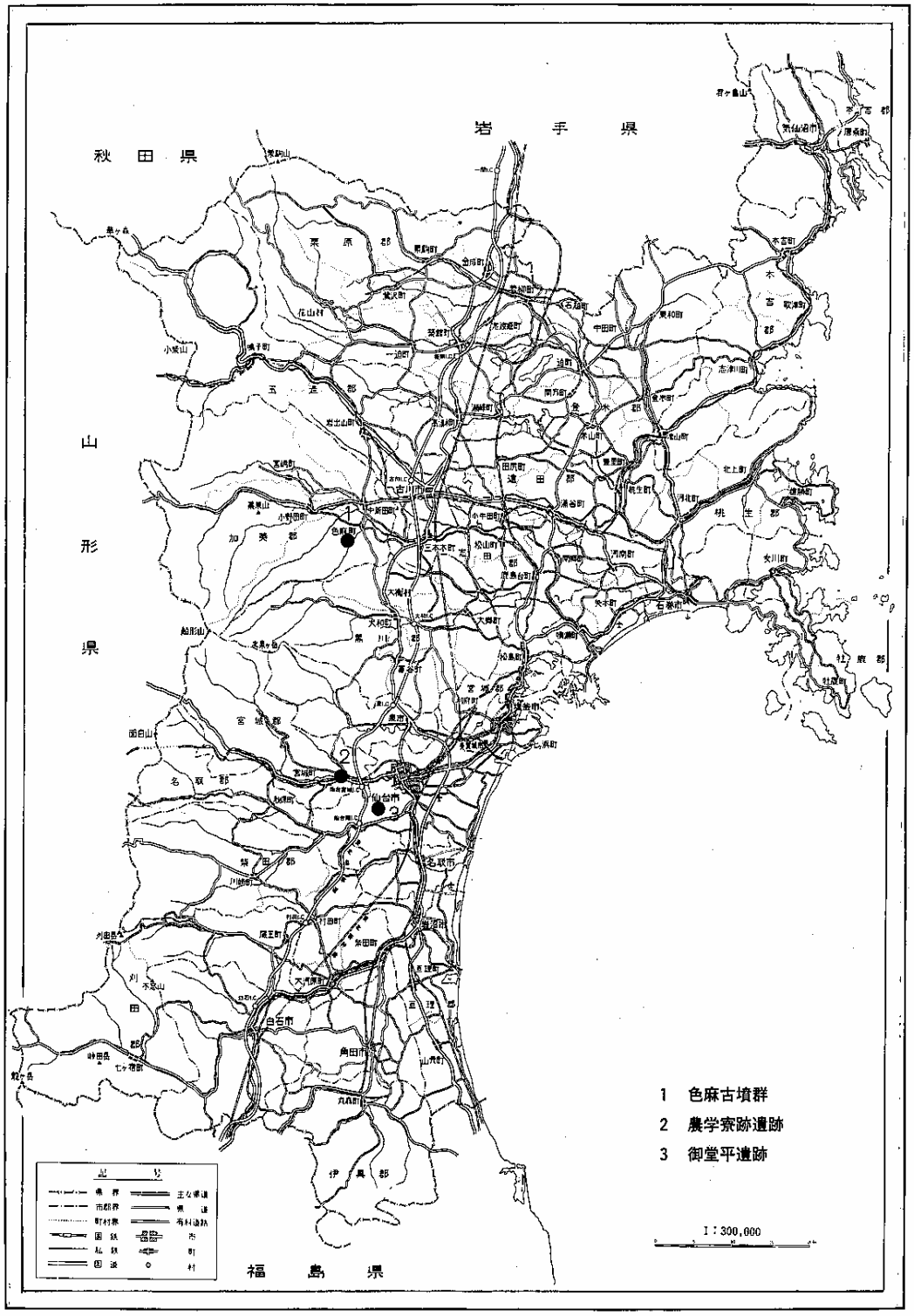
３遺跡はいずれも圃場整備事業、学校建設事業等の区域内に含まれるが、これまでの表面観察などの調査ではその性格等がかならずしも明確ではなかった。そこで上記事業を実施するに当たり遺跡保存のための協議資料を得ることを目的に遺跡の範囲、遺構の分布、遺跡の性格等を調査したものである。

色麻古墳群（上郷支群）は加美郡色麻町四釜地区の花川流域にある古墳時代後期から終末期にかけての群集墳であり、同時代の遺物包含層の広がりもみられる。圃場整備面積906ha の中に含まれる102基の古墳と19箇所の遺物包含地のうち昭和55年まで１基の古墳と１箇所の遺物包含地の調査を実施し、包含地は関係者間で協議し盛土工法により保存を図った。今年度は20基の古墳と考えられる箇所を調査したが、７基は古墳であることが確認された。

宮城農学寮跡地遺跡は昭和55年８月に遺物が採取されて判明した遺跡がある。仙台市の西方宮城町下愛子の広瀬川の河岸段丘上の縄文、平安時代の遺物包含地である。県警察施設及び県立高等学校建設予定地とされたため、遺跡の範囲と性格を明らかにし、文化財保護上の協議資料を得る目的で調査した。その結果、警察施設建設予定地は深耕による削平が著しく遺構の発見はなく、遺物は攪乱層から石器が得られただけであった。県立高等学校建設予定地は宮城農学寮（宮城農業実践大学）の施設(校舎・畜舎・その他の構造物)で削平されていたが農地(草地)部分約5,000㎡に縄文時代中・後期の比較的まとまって出土する地区のあることが判った。この部分は予定地62,000㎡のうち校舎等構造物建設部分ではないので校庭部分とすることで協議が成立、盛土で保存することになった。

御堂平遺跡は仙台市鈎取字御堂平にあり、名取川の支流笊川上流左岸の丘陵と小規模な河岸段丘上の縄文時代と平安時代の遺跡である。県立高等学校予定地となったので遺跡の範囲・遺構の分布状況を把握し、文化財保護上の協議資料を得ることを目的に調査を実施した。調査の結果、段丘部分では土壙と縄文時代の遺物を含む層が、丘陵部分では平安時代の竪穴住居跡と礎石をもつ建物跡等が発見された。

なお、遺跡の保存については関係者間で協議のうえ、段丘部分は盛土工法により保存し、丘陵部分については記録保存することになった。



遺跡位置図

Ⅰ 色麻（しかま）古墳群

調査要項

遺跡所在地：加美郡色麻町四釜地区

調査期間：昭和56年9月7日～17日、11月9日～28日

調査対象地点：20地点

発掘地点：18地点

遺跡記号：ＧＴ

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：阿部　恵・真山　悟

澁谷　正三・古川　一明

調査協力：宮城県農政部・古川土地改良事務所

色麻町教育委員会・色麻土地改良区

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 5
Ⅱ　調査に至るまでの経過 …… 6
Ⅲ　調査の方法 …… 9
Ⅳ　調査の成果　1）No.28 地点（上郷 94 号墳） …… 11
2）No.104 地点（上郷93 号墳） …… 18
3）No.93 地点（上郷71 号墳） …… 18
4）No.24 地点（上郷98 号墳） …… 21
5）No.35 地点（上郷96 号墳） …… 21
6）No.29 地点（上郷91 号墳） …… 21
7）No.105 地点（上郷107 号墳） …… 22
8）No.18 地点（近世墓） …… 22
Ⅴ考　察　1）出土土器の年代と性格 …… 23
2）石室の構造と年代 …… 25
Ⅵ　まとめ …… 26

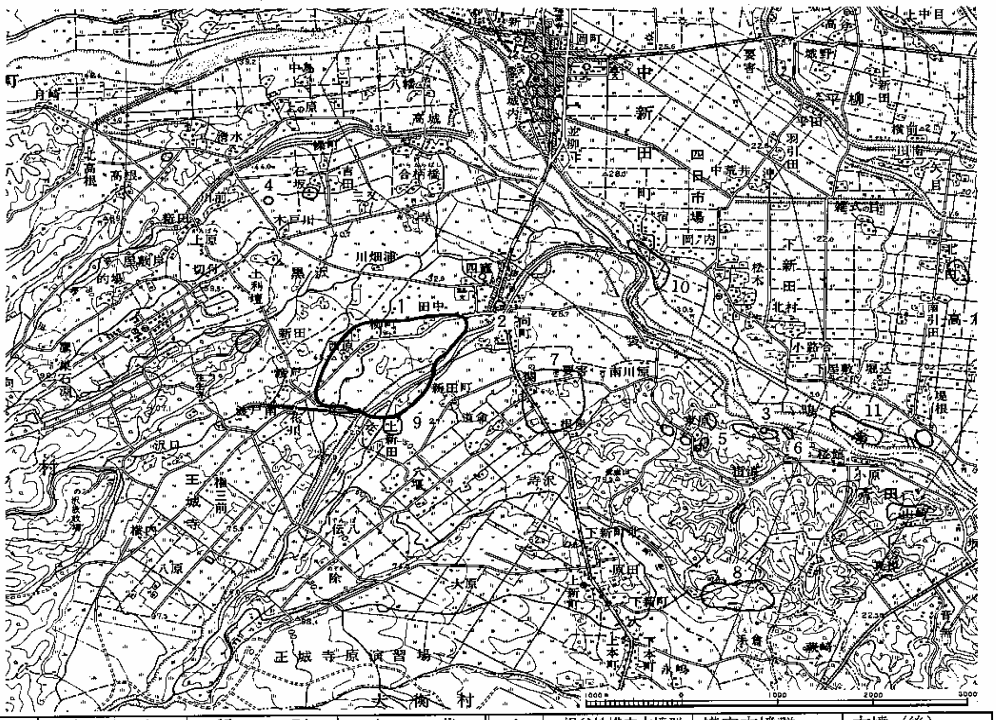
Ⅰ　遺跡の位置と環境

色麻古墳群は、加美郡色麻町四釜、一の関地内に所在する。遺跡は、四釜の町並みの南西部に位置し、東西1.5㎞、南北1㎞の広い範囲に及んでいる。

色麻町周辺の地形をみると、町の西南には奥羽山脈から派生した標高100m～200mの加美丘陵が横たわっている。加美丘陵は、町の北、東限を画して東流する鳴瀬川や、その支流の小河川によって開析され、樹枝状に展開し、各河川の中下流域には扇状地性の低地が形成されている。

四釜地区は、鳴瀬川の支流である花川の流域に形成された、いわゆる王城寺扇状地の扇端部に当たっている。この扇状地は、標高25～90mで、南西から北東に緩やかに傾斜しており、本古墳群は、扇央部を流れる花川に沿って両岸に分布している。古墳群域は、大部分が水田として利用されており、開田工事などにより破壊された古墳が多い。

さて、本古墳群のある色麻町周辺には、旧石器時代以降、各時代の遺跡が多数存在している。ここでは、本古墳群の形成された時期を中心に、町内における古墳時代から奈良時代にかけて



番号	遺跡名	種別	時代	6	根谷地横穴古墳群	横穴古墳群	古墳（後）
1	**色麻古墳群**	群集墳	古墳（後）	7	一の関遺跡	城柵跡（？）	奈良
2	御山古墳	円墳or前方後円墳	古墳（中）	8	日の出山窯跡群	窯跡	奈良
3	念南寺古墳	前方後円墳	古墳（中）	9	上新田遺跡	集落跡	平安
4	蝦夷塚古墳群	群集墳	古墳（後）	10	元宿遺跡	包含地	古墳・奈良・平安
5	東原塚古墳群	群集墳	古墳（後）	11	堤根西遺跡	包含地	古墳・奈良・平安

第１図　遺跡の位置　（国土地理院発行地形図1/25万「中新田」を縮少）

の遺跡を概観する。

まず、古墳時代中期の遺跡として、御山古墳、念南寺古墳がある。いずれも発掘調査は行われていないが、断面が台形のタガを持つ埴輪が出土している。次に、古墳時代後期から終末期の遺跡としては、色麻古墳群をはじめとして、蝦夷塚古墳群、東原古墳群、根谷地横穴古墳群などがある。高塚の古墳群は、いずれも径15m前後の小円墳によって構成されており、前方後円墳、埴輪などは確認されていない。

奈良時代の遺跡としては、本古墳群の東南約２㎞に、一の関遺跡がある。一の関遺跡は、昭和51年に発掘調査が行われ、建物基壇跡、掘立柱建物跡、土塁状遺構などが確認された。出土遺物から８世紀を中心とした古代の寺院跡ないし城柵、官衙跡である可能性が強いとされている。また、町の南の通称日の出山地区には、須恵器、瓦の窯跡群がある。過去の調査では、８世紀中葉前後の須恵器窯、多賀城創建前後の瓦窯が確認されている。

Ⅱ　調査に至るまでの経過

色麻古墳群に関しては、過去に、いくつかの調査が実施されている。主なものを記すと、

１．昭和25年　東北大学考古学研究室

色麻古墳群分布調査、分布図作成

花川左岸を上郷地区、右岸を高野地区とし、上郷地区に149基、高野地区に91基を確認。

古墳番号を付す。

２．昭和26年　東北大学考古学研究室

上郷105、109、135号墳　　発掘調査

３．昭和44年　志間泰治

高野44号墳　発掘調査

昭和46年度に着工した圃場整備事業は、昭和54年度以降、本古墳群の分布する上郷地区に及ぶこととなり以下の調査が行われた。

４．昭和53年　宮城県教育委員会

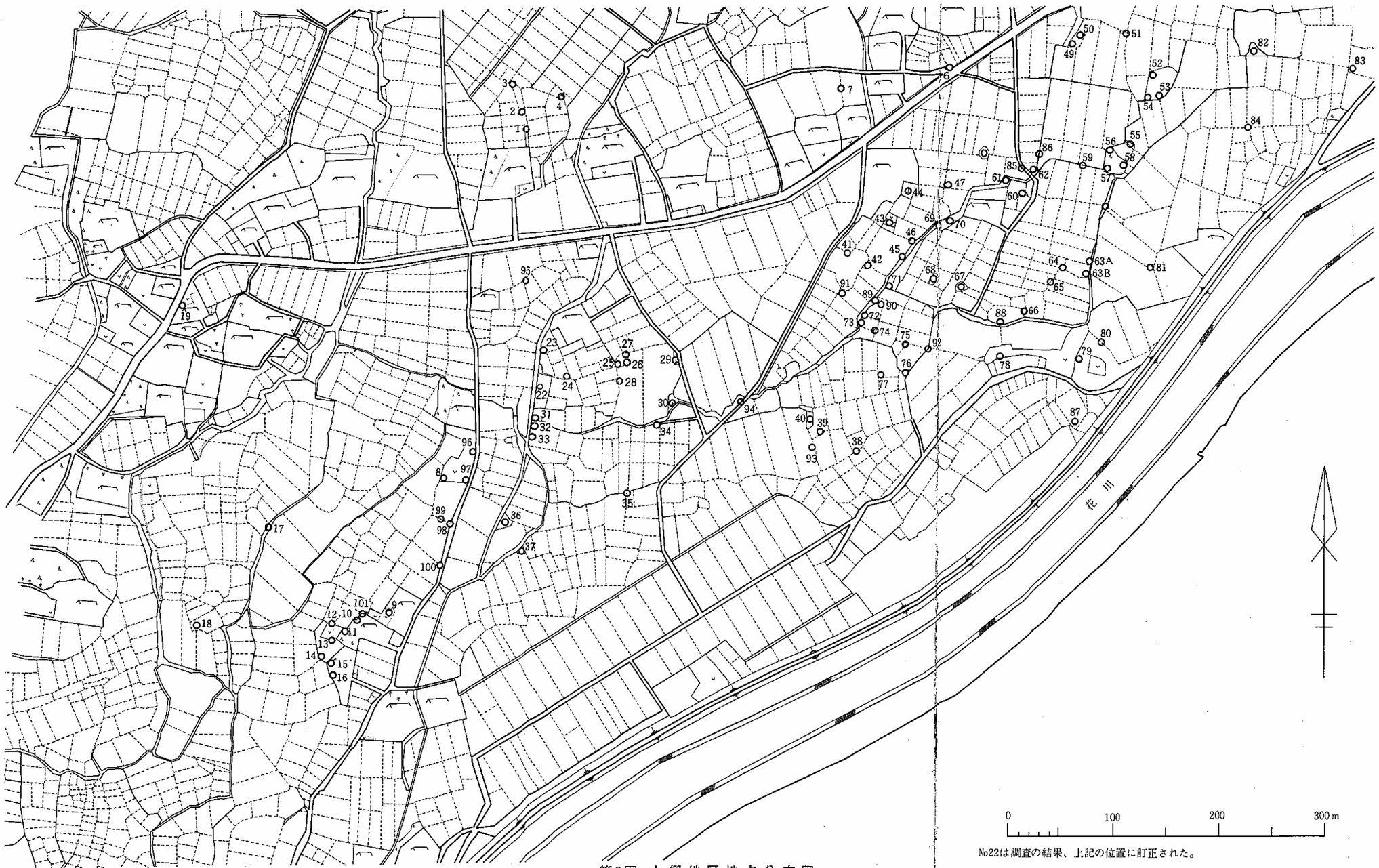
上郷地区分布調査、地点№ を付す。

「古墳状の高まり、石積み、石組み」は103地点確認（第２図）

５．昭和54年　宮城県教育委員会

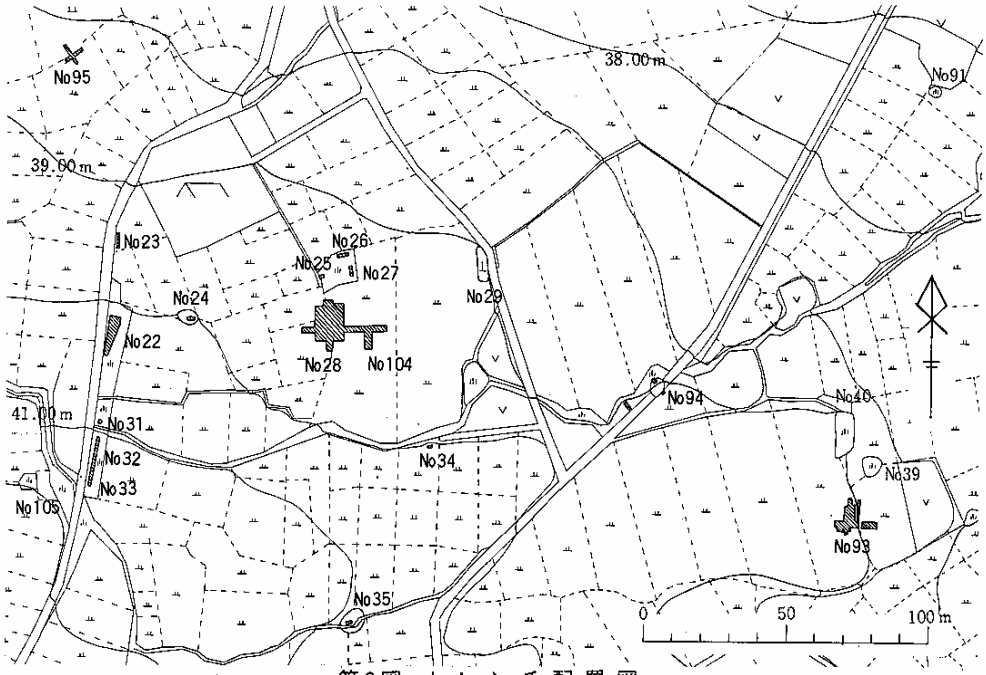
上郷43号墳対応地点№７　確認調査　未確認。

今回の調査は、色麻地区県営圃場整備事業に伴う詳細分布調査の一環として行われたものでその目的は、昭和53年度の分布調査によって「古墳状の高まり、石積み、石組み」として登録された地点について、古墳か否かを確認するためのものである。



No22は調査の結果、上記の位置に訂正された。

第2図 上郷地区地点分布図



第３図　トレンチ配置図

Ⅲ　調査の方法

今回の調査の対象となったのは、昭和53年分布調査に基づく *No.*（以下 *No.* のみを記す）によれば、*No.*17、18、22～29、31～35、93～95の計18地点と、今回新たに古墳、古墳跡として確認された *No.*28 東方の石室（昭和53年の継続番号をとり *No.*104 地点とする）と、大塚古墳跡（同 *No.*105）の２地点を合わせた計20地点である。各地点は広範囲に散在していたため、トレンチを地点の状況に応じて任意に設定し、トレンチ及び遺構の位置は計画農道の中心線を基準として求めた。トレンチの掘り下げは、古墳であることが確認された段階で止めた。なお、*No.*29、*No.*105 については現況、及び地元関係者からの聞き取りにより、古墳、古墳跡であることが確認されたため、トレンチの設定は行わなかった。(第３図)

調査は９月７日～17日 (第一次)、11月９日～28日（第二次）の二期間に行われた。第一次では *No.*22～28、*No.*31～35、の計14地点を確認調査の対象とし、*No.*24、28、35 の３地点で石室の一部が確認された。調査後、トレンチはすべて埋め戻した。第二次では *No.*17、18、93～95を確認調査の対象とし、これと並行して第一次調査で側壁が確認された *No.*28 について、精査を行った。

その結果、*No.*93 で石室が確認され、新たに *No.*104 の石室も確認された。*No.*28 では、石室およびその周辺に６本の溝が確認され、石室内から刀破片が、石室外から多くの土器破片、鉄滓、

羽口等が出土した。調査後トレンチはすべて埋め戻した。

各トレンチの配図は$^{1}/_{40}$あるいは$^{1}/_{100}$で平板測量を行い、土層の状況については$^{1}/_{20}$の断面図を作成した。石室の検出された*No.*28、104については遣り方測量を行い$^{1}/_{20}$の平面図と、状況に応じて側面図、断面図も作成した。また、*No.*93については略測図を作成した。

Ⅳ 調査の成果

今回の調査対象となった20地点の現況は、いずれも水田中の高まり、もしくは畦畔の一部となっている。

調査の結果、20地点中、7地点（*No.*24、28、29、35、93、104、105）は古墳、古墳跡、1地点（*No.*18）は近世の墳墓、他の12地点（*No.*17、22、23、25～27、31～34、94、95）は耕作の際に寄せ集められた石積み、畦畔であることが確認された。(第3図)

なお、確認された7基の古墳は、昭和25年の分布調査において確認されていたものであり、*No.*24が上郷98号墳に、*No.*28が上郷94号墳に、*No.*29が上郷91号墳に、*No.*35が上郷96号墳に、*No.*93が上郷71号墳に、*No.*104が上郷93号墳に、*No.*105が上郷107号墳に対応する。現在までの諸研究では、昭和25年の番号を古墳の名称として採用しており、本報告でも混乱を避けるため、地点番号に昭和25年の古墳番号を付することにする。また、遺構の検出されなかった地点の調査結果は、一覧表に示すにとどめる。

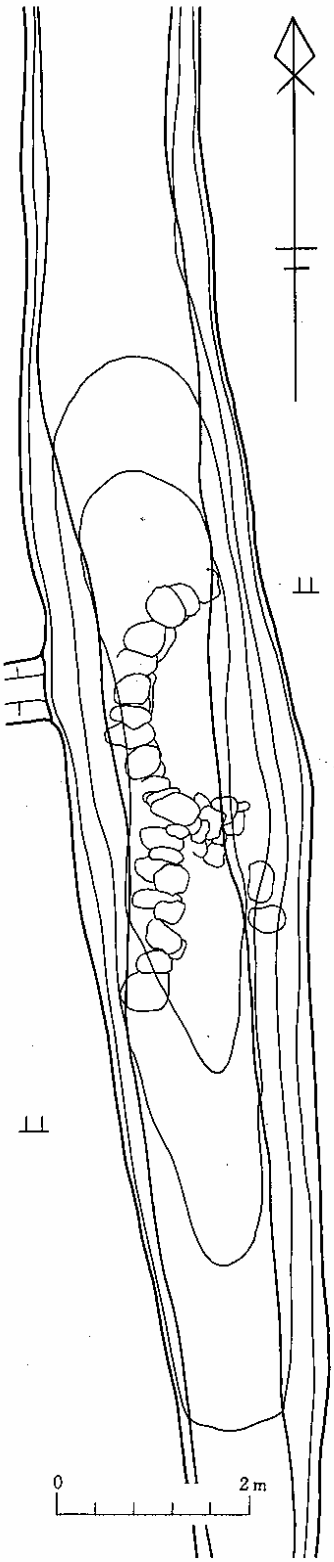
調査地点一覧表

古墳

地点No.	古墳番号	確認された部分	遺物
No. 24	上郷 98号	側壁の一部	
No. 28	上郷 94号	石室の西半分	土師器 刀 須恵器 刀子
No. 29	上郷 91号		
No. 35	上郷 96号	側壁の一部	
No. 93	上郷 71号	石室の上部	
No.104	上郷 93号	石室の上部	
No.105	上郷107号		

その他

地点No.	遺構	遺物
No.17	なし	なし
No.18	墓	和鏡
No.22	なし	須恵器，土師器
No.23	なし	須恵器
No.25	なし	なし
No.26	なし	須恵器（表採）
No.31	なし	なし
No.32	なし	なし
No.33	なし	なし
No.34	なし	須恵器（表採）
No.94	なし	須恵器（表採）
No.95	なし	須恵器（表採）



第４図　上郷94号墳現況図

１）No.28地点（上郷94号墳）

古墳

〔現況〕南北に走る畦畔の下に石室の一部が残存していた。畦畔は石室の残存する部分が盛り上がり、東西 2.4×南北 13.0mの長楕円形の土まんじゅう状の外観を呈している。周囲の水田面からの高さ0.8mである。その東西の裾は、水田耕作のため切削され、急峻な斜面になっている。(第４図)

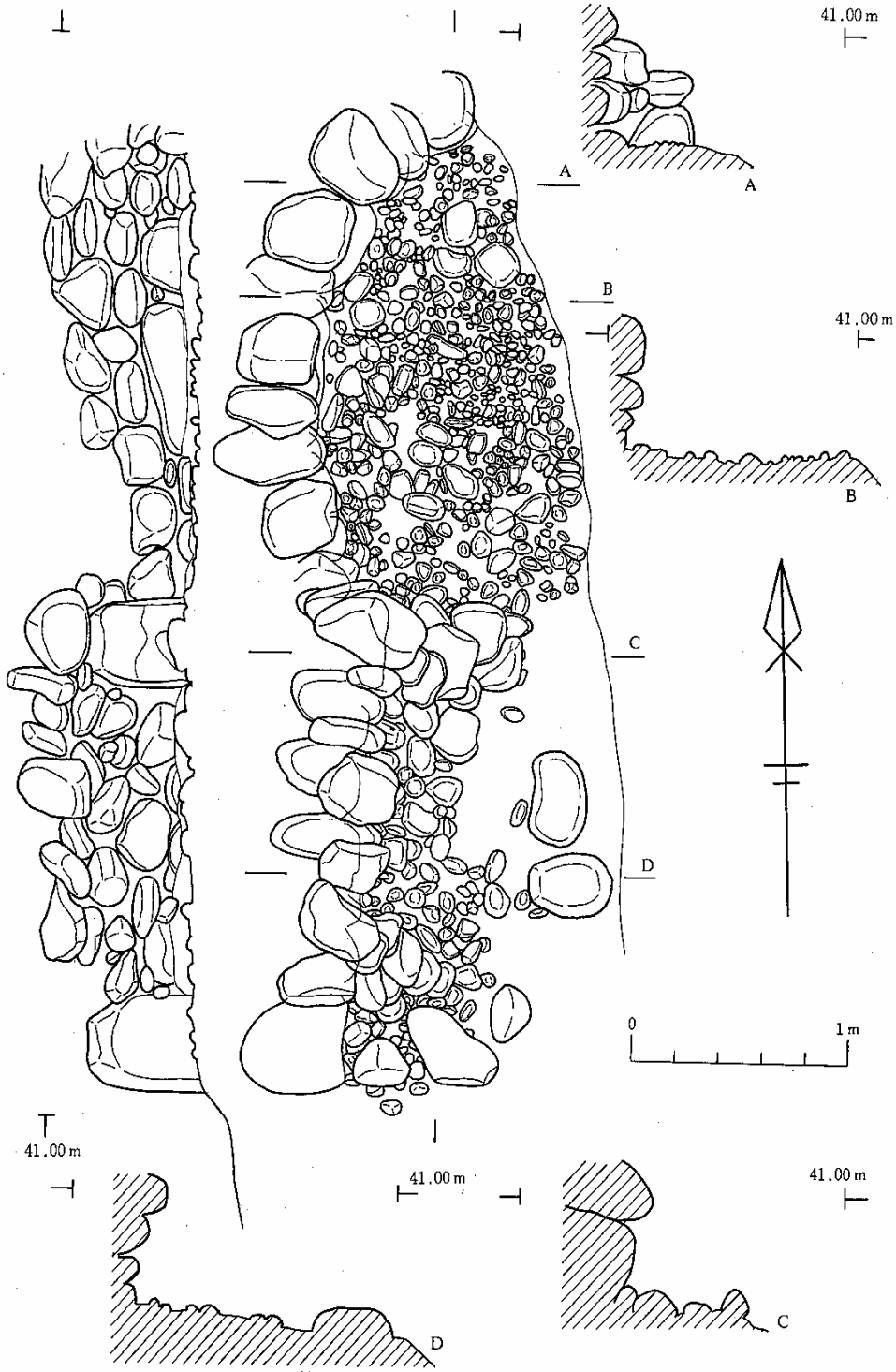
石室は、西半分が畦畔の中心部に残存し、その西側には石室裏込め、封土の一部が遺存している。石室の床面も東端部を除いて残存している。しかし畦畔外の部分は水田となり削平されてしまっていて、石室奥壁から東半分が失われている。畦畔の上部も削られていて天井石、封土は失われている。周湟は確認されなかった。

〔構築〕古墳は、地山黒褐色シルト層上面に築造されている。石室は、地山上に褐色シルトを盛り、その上に床面が構築されている。詳細は石室を断ち割っていないので不明である。

〔封土〕石室の外周の東西3.2×南北12.8mの範囲に、暗褐色サンド質シルト層が認められる。封土の一部であると考えられる。また、羨門の東南部に黒褐色サンド質シルト層が分布している。墳丘崩壊土の一部であると考えられる。この層から土師器坏、埦が出土している（第８図１～７)。

〔石室〕石室残存長4.3m、玄室残存長2.0m、羨道長2.3m、石室の巾は不明、側壁の残存高0.7mである。玄室奥半部にのみ強い胴張りがあり、玄門部では袖部が形成されている。開口方向はＳ－8.5°－Ｗである。

側壁は、径30～50㎝前後の枕状の河原石を乱石積みにし、羨道部には持ち送りがみられる。玄門部、羨門部には、それぞれ高さ60㎝前後の、門柱状の石が据えられている。床面は、円礫が敷きつめられている。玄室部には

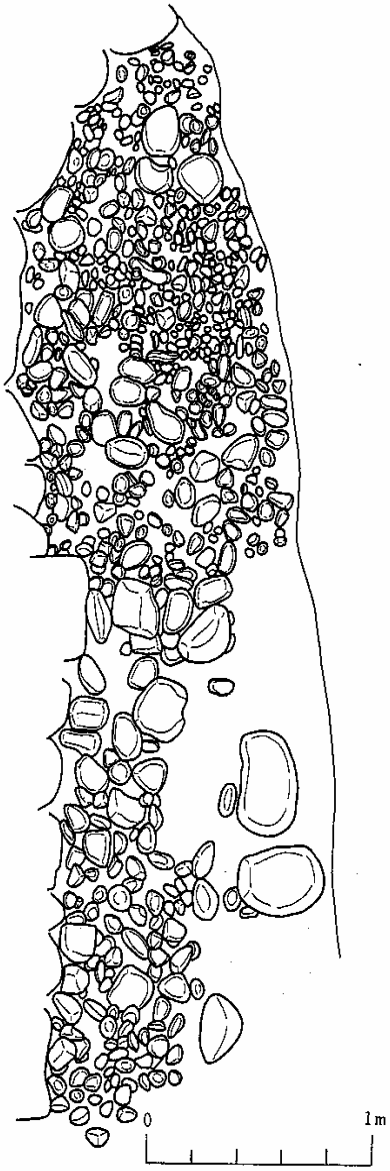


第５図　上郷94号墳石室実測図

径５㎝前後の小さめの礫が使用され、羨道部には径10～20㎝の大きめの礫が使用されている。玄門部に径 20～30㎝ の偏平な河原石が三段積みあげられており閉塞石の一部と考えられる。この最下段には、４個の石が横一列に並んでいる。梱石的な性格の施設であろう。(第５、６図、図版１)

石室内の堆積土は黒褐色シルトである。上部は攪乱を受けているが、床面上に厚さ 20㎝ほどが残存している。この層から刀、刀子が出土している。(第７図－14－16)

石室の外周には拳大の河原石が積まれている。その範囲は東西2.2×南北10.0mであり、石室裏込めであることが確認された。



第６図　上郷94号墳石室平面図

周辺の遺構

石室周辺から計５条の溝状遺構が検出されている。いずれも第２層上面で確認されている。切り合い関係から、溝１が最も古く、次に溝２、溝３、次に溝４、溝５の順に新しくなる。最も古い溝１が上郷94号墳の墳丘崩壊土を掘り込んでいることから、これらの溝は、上郷94号墳築造後の遺構であり、古墳に伴うものではない(第７図)。

溝１：断面が逆台形、幅0.8～1.0m、深さ 0.7mである。石室前方を東西に横切り、東西で南側に直角に折れ曲がっている。堆積土は三層認められる。出土遺物はない。

溝2、３：いずれも断面が浅い皿形で、最大幅２m、深さ 0.4mである。石室寄りの壁はなだらかに立ちあがり、反対側の壁は急に立ちあがる。石室をはさんで東西に対面する二つの三日月形の溝である。堆積土は溝２が三層、溝３が一層認められる。出土遺物は、溝３より土師器須恵器が出土している (第８図８～13)。

溝4、５：いずれも断面がU字形で、幅0.6～0.8m、深さ 0.2～0.4mである。石室の残存する畦畔の東西に平行して南北に走る。堆積土は一層認められる。出土遺物はない。

出土遺物（第８図、図版３）

〔石室内堆積土出土遺物〕

刀（第８図－14、15）いずれも刀身部破片で、平棟、平造りである。身幅は14が2.3㎝、15が1.9㎝、棟幅は14が0.35㎝、15が0.30㎝である。

刀子（第８図－16）切先から刀身部にかけての破片で、平棟、平造り、フクラ枯れの切先である。身幅1.1㎝、棟幅0.25㎝である。

〔墳丘崩壊土出土遺物〕

土師器

坏（第８図－１～６）外面の中位に段または稜を形成し、対応する内面にも屈曲が認められる。段から上は内弯気味に外傾し、端部は丸くおさまる。段から下は丸底となる。器面調整は、内面にヘラミガキ、黒色処理、外面の段から上に横ナデ、段から下にヘラケズリが施される。６個体とも口径が16.0～18.0㎝、器高が3.9～4.3㎝の範囲内にあり、大きさにばらつきがない。外面中位の段が横ナデによってつぶれ、稜になっているものもあるが、器形、器面調整も共通した特徴を示している。

埦（第８図－７）口縁から体部にかけての破片である。体部に段を形成し、口縁は丸みをもって立ちあがり、端部で内傾する。器面調整は、外面の段から上に横ナデ後、ヘラミガキ、段から下にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。内外面とも黒色処理されている。

〔溝３堆積土出土遺物〕

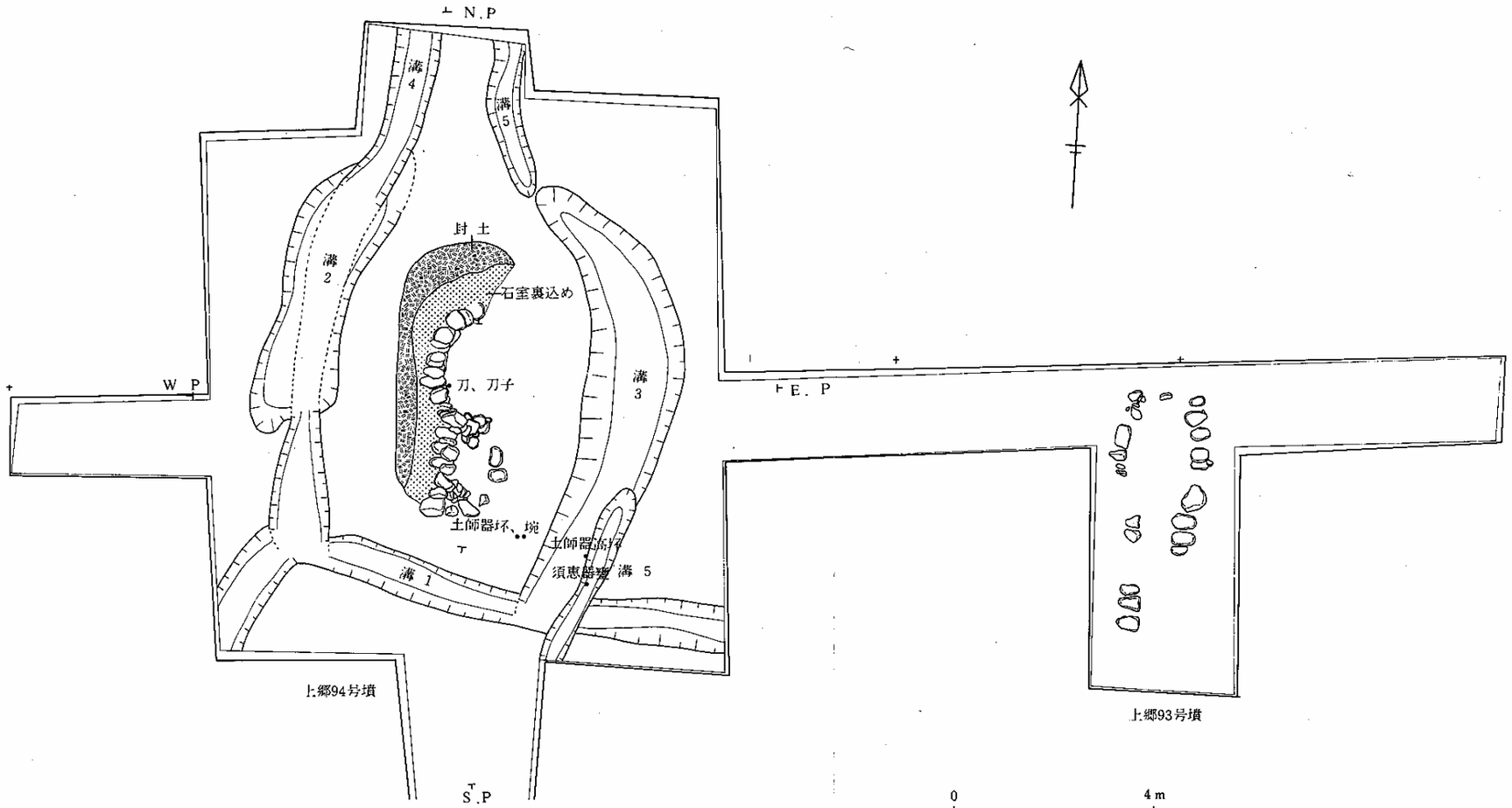
土師器

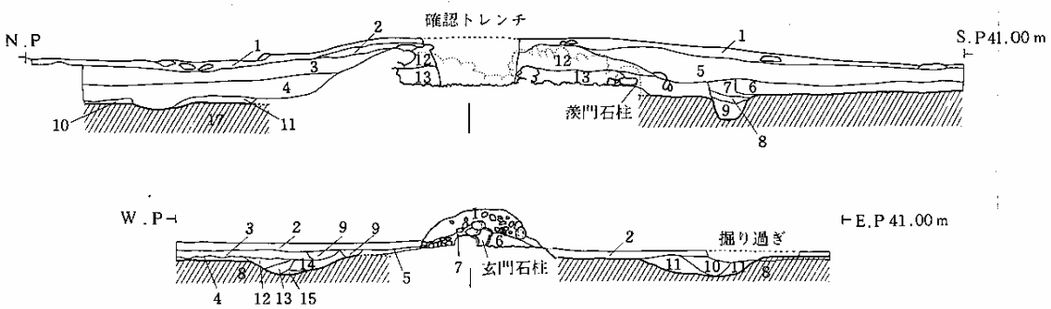
坏（第８図－８）外面の中位に段を形成し、対応する内面にも屈曲が認められる。段から上は内弯気味に外傾し、端部は丸くおさまる。段から下は丸底となる。器面調整は、内面にヘラミガキ、黒色処理、外面の段から上に横ナデ、段から下にヘラケズリが施される。

高坏（第８図－９、10）９は、坏部の外面上位に稜を形成し、対応する内面にも屈曲が認められる。稜から上は外反し、端部は丸くおさまる。脚部は、中空、ラッパ状に滑らかに裾が広がり、端部は丸くおさまる。器面調整は、坏部内面にヘラミガキ、黒色処理、外面の稜から上に横ナデ、稜から下にヘラケズリ、脚部内外面に横ナデが施される。また、外面の坏部下半から脚部上半にかけてハケ目痕がみられる。10 は、脚部のみの破片であるが、特徴は９と共通する。

須恵器

坏（第８図－11、12）いずれも底部破片である。体部下半は、内弯気味に外傾して立ちあがる。底部は、やや揚げ底になる。器面調整は、外面の底部から体部下端にかけて反時計回りの回転ヘラケズリが、内面はロクロナデが施されている。





0　4 m

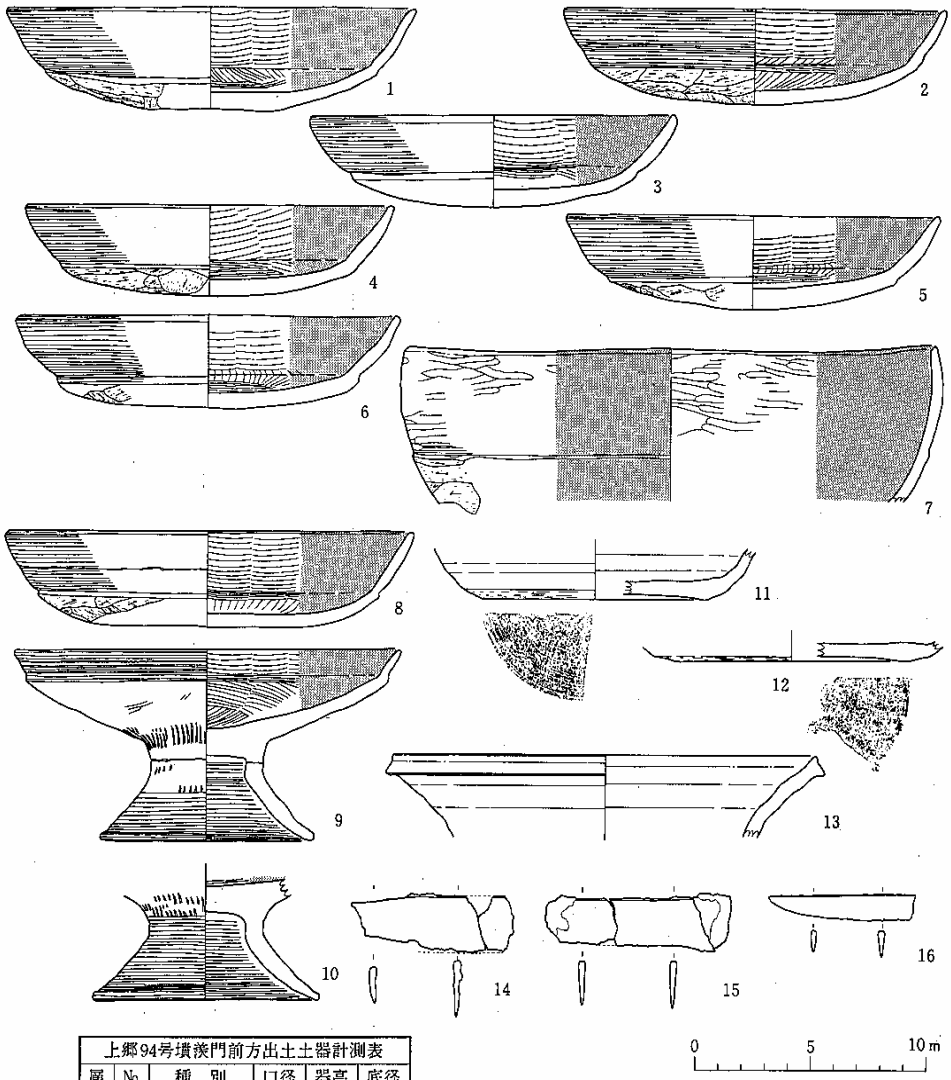
WE土層断面

層No.	土色	土性	備考
1			寄せ石
2	褐灰色(10YR4/1)	クレイ	水田土壌
3	褐灰色(10YR5/1)	クレイ	水田土壌
4	暗褐色(10YR3/4)	クレイ	
5	褐色(10YR4/4)	シルト	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	石室内堆積土
7	黒褐色(10YR3/2)	サンド質シルト	封土or石室裏込
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質クレイ	旧表土
9	黒褐色(10YR3/2)	クレイ	溝4埋土
10	黒褐色(10YR3/2)	クレイ	溝堆土
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
12	暗褐色(10YR3/4)	クレイ	
13	暗褐色(10YR3/3)	シルト	溝堆土
14	褐色(10YR4/4)	シルト	
15	黒色(10YR2/1)	シルト	

NS土層断面

層No.	土色	土性	備考
1			寄せ石
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
5			寄せ石
6	暗褐色(10YR3/4)	クレイ	旧水田土壌
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	溝堆土
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
12			寄せ石
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	石室内堆積土
14	黒褐色(10YR3/2)	サンド質シルト	墳丘崩落土
15	暗褐色(10YR3/3)	サンド質シルト	封土or石室裏込
16	褐色(10YR4/4)	シルト	
17	黒褐色(10YR3/2)	シルト質クレイ	旧表土

第7図　上郷93・94号墳



上郷94号墳羨門前方出土土器計測表					
層	No.	種　別	口径	器高	底径
墳丘崩壊土層	1	土師器坏	17.7	4.3	
	2	同	16.6	4.0	
	3	同	16.0	3.9	
	4	同	16.0	3.8	
	5	同	16.2	3.9	
	6	同	16.5	3.9	
	7	土師器埦	27.1		
溝3埋土	8	土師器坏	17.7	4.0	
	9	土師器高坏	16.2	8.0	9.3
	10	同			9.7
	11	須恵器坏			9.5
	12	同			9.9
	13	須恵器甕	18.1		

上郷94号墳玄室内堆積土出土品計測表				
No.	種　別	身　巾	棟　巾	残存長
14	刀	2.3	0.35	6.8
15	刀	1.9	0.3	7.9
16	刀　子	1.1	0.25	6.3

第8図　上郷94号墳出土遺物

甕（第８図－13）口縁から体部下半にかけてのものである。接合不可能なので、口縁部のみを図化した。頚部は、体部から「く」の字状に折れ、外反する。口縁部は、下端が外方につまみ出され、幅の狭い口縁帯を形成している。体部は、肩の張りが弱く、倒卵形である。器面調整は、口縁部内外面に回転ナデ、体部は外面に平行タタキ目（幅４㎜）、内面に不定方向のナデが施されている。

２）No.104 地点（上郷93号墳）

〔現況〕*No.*28 地点の東方約15mの水田下約10㎝に石室が埋没していた。水田に地形的な変化は全くみられず、石室の存在は外観からは予測できなかった。(第７図)

古墳の上部構造は、耕作により完全に破壊されてしまっていたが、奥壁、羨道部東側を除く石室のプランを確認することができた。掘り下げを行っていないので床面は確認していない。周湟は確認されていない。出土遺物はない。

〔確認面〕残存する石室の上面は、表土（耕作土）下の黒褐色シルト層上面で確認された。水田面下約10㎝である。

〔石室〕確認面での石室全長4.8m、玄室長2.3m、羨道長2.5m、玄室最大幅1.3m、羨道幅0.6m。玄室部に胴張りがあり、弧の半径は2.5m前後である。玄門部に袖部の形成は認められない。

開口方向はＳ－2.0°－Wである。

側壁には径 30～50㎝ 前後の河原石が使用され、玄門部、羨門部に特殊な石の配置は認められない。(第９図、図版１)

石室内には黒褐色シルト層が認められたがこの土層の性格については明らかでない。

石室の外周には拳大から人頭大の河原石が認められる。石室裏込めの一部であると思われる。

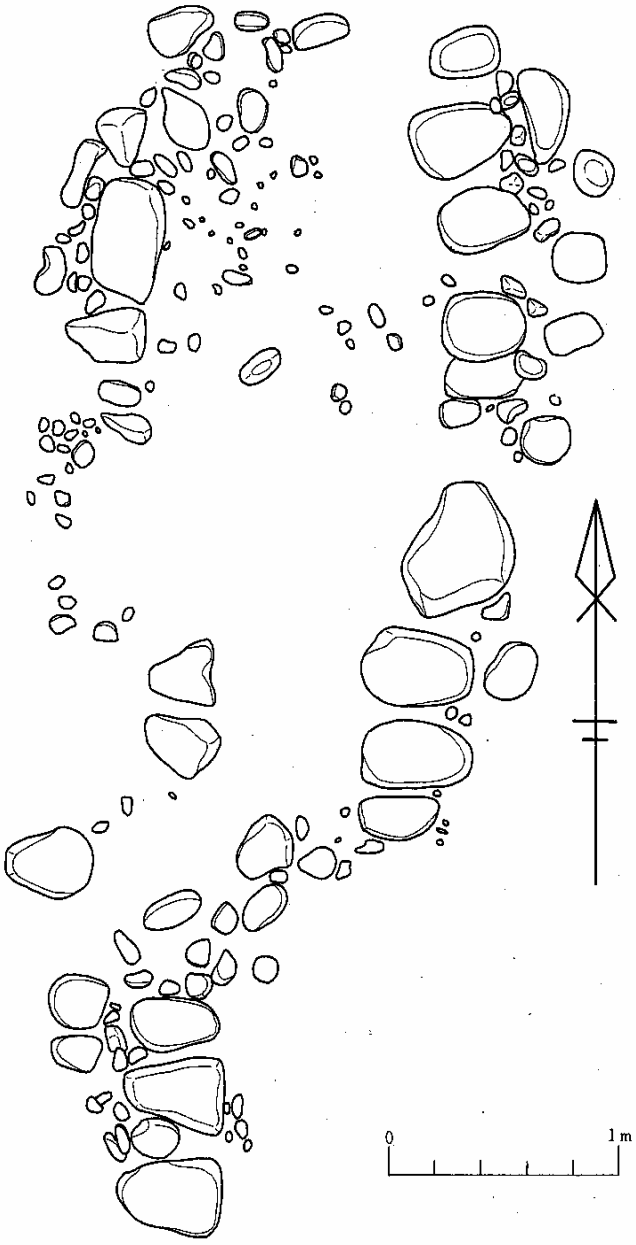
３）No.93 地点（上郷71号墳）

〔現況〕*No.*93 地点は南北に走る畦畔の一部であり、石室はその西側約２mの水田下約40㎝に埋没していた。畦畔と石室との関連はなく、水田に地形的な変化は認められなかった。古墳の上部構造は破壊されていたが石室全体のプランは良好に確認できた。掘り下げを行っていないので床面は確認していない。周溝は確認されていない。出土遺物はない。

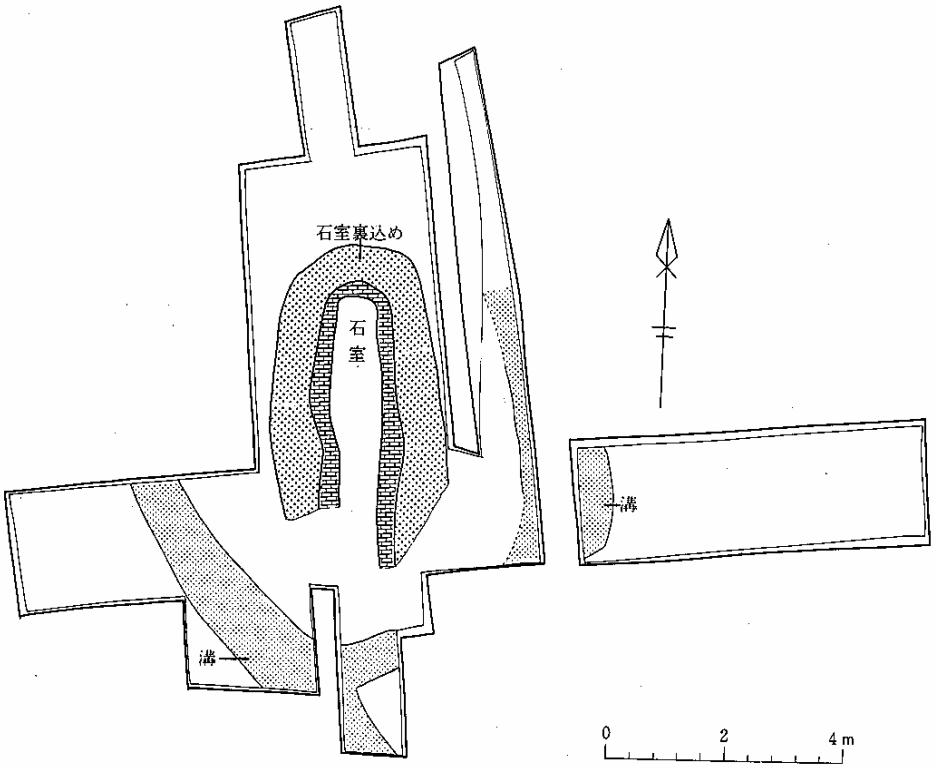
〔確認面〕残存する石室の上面は、表土（耕作土）下の黒褐色シルト層上面で確認された。水田面下約40㎝である。

〔石室〕確認面での石室全長4.7m、玄室長2.5m、羨道長2.2m、玄室奥壁部幅0.6m、玄室中央部幅0.9m、玄門部幅0.7m、羨道部幅0.6m。玄室部に胴張りを持ち、玄門部に明確な袖部の形成はない。開口方向は、Ｓ－1.5°－Ｅである。

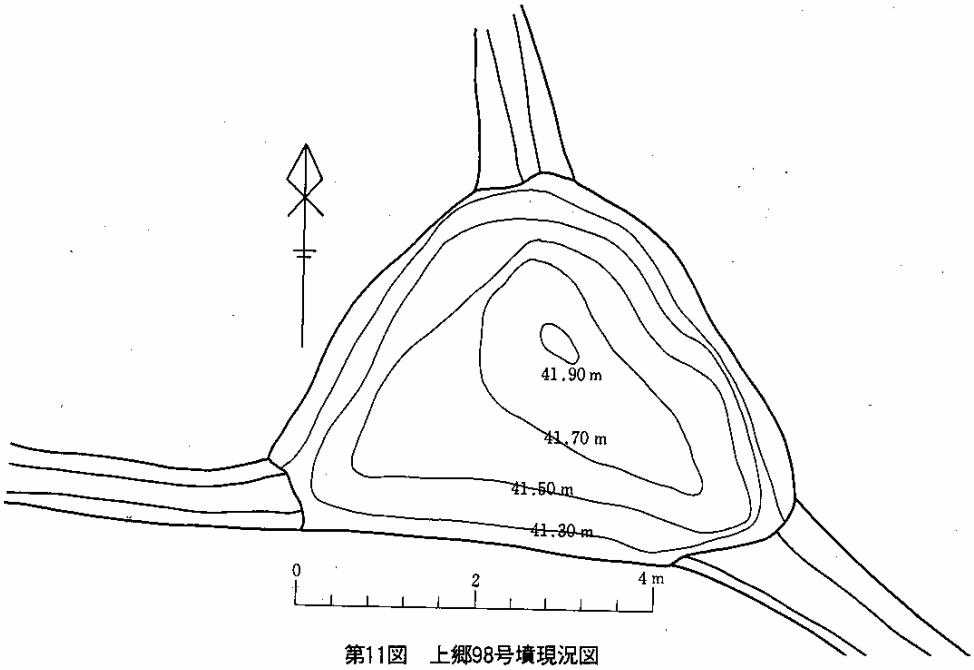
側壁には径30～50㎝の河原石が使用され、奥壁部には50×60㎝の奥壁用石が確認されている。玄門部、羨門部に特殊な石の配置は認められない。(第10図、図版１)



第９図　上郷93号墳石室平面図



第10図　上郷71号墳



第11図　上郷98号墳現況図

石室内には径 20～30㎝ の河原石が多量につまっている。これらの河原石は不規則に、間げきなくつまっていることから、水田耕作の際に投入された礫群と考えられる。

石室の外周には拳大の河原石が積まれている。その範囲は東西 1.5×南北 5.1mであり、石室の裏込めと考えられる。

4）No.24 地点（上郷98 号墳）

〔現況〕一辺約５mの三角形の高まりで、周囲の水田面からの高さ約 0.7mである。裾の部分は切削されて急峻な斜面となっている。高まりの上部には寄せ集められた礫が積まれている。石室の側壁の一部を確認した段階で掘り下げを止めているので、石室、封土、周湟などの残存状況は確認されていない。出土遺物はない。(第11図)

〔確認面〕石室の側壁は、寄せ石の礫層下で確認された。地表下約30㎝ である。

〔石室〕確認された側壁は、南北に１mの範囲である。東西の両側壁の一部と考えられるが、石室のどの部分であるかは不明。両側壁の確認面での間隔はほぼ１mである。石室全体の規模、形態は不明である。

側壁には 30×50㎝ 前後の枕状の河原石が使用されている。石室内には、黒褐色シルト層が堆積し、その中には側壁の石材と同形の石が多数突き立った状態で混入している。これは、側壁の上部が石室内に崩れ落ちたものと理解される。(図版２)

側壁の外側には拳大の河原石が積まれている。石室裏込めの一部と考えられる。

5）No.35 地点（上郷96 号墳）

〔現況〕径４mの半円形の土まんじゅうである。周囲の水田面からの高さ 0.5mである。南側を東西に水路が流れ、その対岸も断続して土地が盛り上がっている。南側の裾部は水路によって侵食され崖となっており、崖面には径 30～50㎝ の河原石がみられる。石室の側壁の一部を確認した段階で掘り下げを止めているので、石室、封土、周湟などの残存状況は確認されていない。出土遺物はない。

〔確認面〕残存する石室は、寄せ石の礫層下で確認された。地表下約30㎝ である。

〔石室〕確認された側壁は南北に１mの範囲である。西側の側壁の一部と考えられるが、石室のどの部分であるかは不明。石室の規模、形態についても不明である。

側壁には径 30×50㎝ の枕状の河原石が使用されている。側壁の東側（石室内部）に黒褐色シルト層が認められたが、この土層の性格は明らかでない。側壁の西側（石室外部）には挙大の河原石が認められる。石室裏込めの一部であると考えられる。(図版２)

6）No.29 地点（上郷91 号墳）

〔現況〕東西７m、南北15mの楕円形の高まりで、周囲の水田面からの高さ 0.6mである。西半分は墓地、東半分は南北に走る農道の道路敷になっている。地形から明らかに古墳であると考

えられる。(図版２)

7）No.105 地点（上郷107号墳）

〔現況〕平面形が五角形の平坦な荒地があり、その面積は６×６m程度である。周囲は畑地であるが、地表に起伏は認められない。聞き取りの結果、石室は、この五角形の荒地の部分にあったという。破壊されたのは昭和初年ごろで、正確な年は不明である。破壊後、石室の用材の大きなものは残され、その他の用石は持ち去られ、墳丘は平にならされたという。周湟の有無は不明。出土遺物の有無も不明である。なお、本古墳は「大塚」と呼ばれていたという。以下、聞き取りの内容を記述する。

〔封土〕墳丘は径30m前後の小山のようであった。

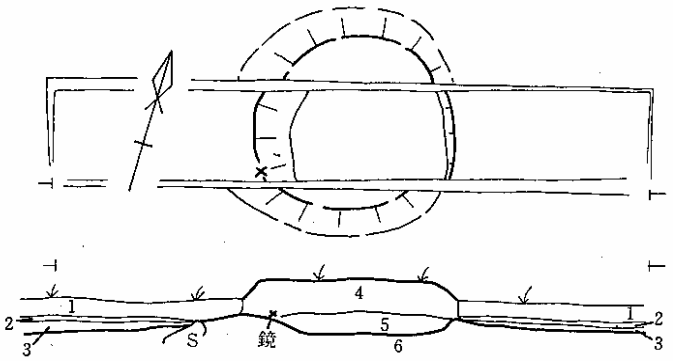
〔石室〕規模は、石室内で大人５～６人が車座になれた。石室は南に開口していた。石室用石の一部は移動できず、元位置に遺存している。

8）No.18 地点（近世墓）

〔現況〕水田中に、径1.9mの円形の高まりが島状に存在している。周囲の水田面からの高さ0.2mである。裾の部分は切削されている。上部は、径1.6mの円形の平坦面となっている。

〔層序〕第１層（耕作土）褐灰色シルト層、第２層黒褐色シルト層、第３層褐色砂礫層の三層が認められる。盛り土の構築面は、第２層上面である。

〔盛り土〕盛り土の下部には、径70㎝、深さ10㎝のすり鉢状の土壙が確認されている。掘り込み面は第２層上面で、土壙の壁、底部は第３層である。土壙内部には黒褐色シルト層が存在しその上に黒色シルトが盛られている。(第12図)



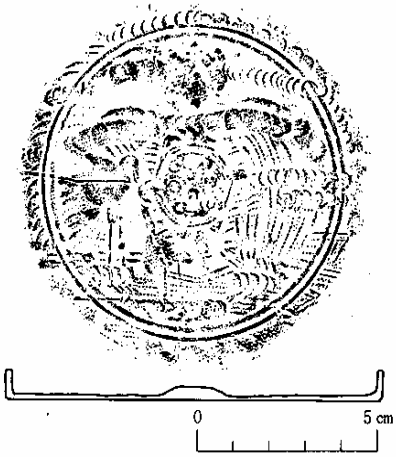
層No.	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色(10ＹＲ5/1)	クレイ	水田土壌
2	黄褐色(10ＹＲ5/6)	クレイ	水田床土
3	黒褐色(10ＹＲ3/1)	シルト	旧表土（？）
4	黒　色(10ＹＲ3/1)	シルト	礫を多く含む
5	黒褐色(10ＹＲ3/2)	シルト	鏡出土
6	褐　色(10ＹＲ5/6)	砂礫層	

第12図　No18地点　平・断面図

〔出土遺物〕土壙内の黒褐色シルト層中から和鏡が出土している。

和鏡「松枝双鶴鏡」である。径10.2㎝鏡面の厚さ0.05㎝、縁の高さ0.8㎝、縁の厚さ0.2㎝である。鏡背の文様は中心に亀をかたどった鈕があり、二重の隆線を圏界として、内区には鈕の亀の口と、口ばしを合わせる二羽の鶴、松の木、桐花の紋が配され、外区には松が配されている。縁は高い角縁である。亀の下には「天下一」の銘がある。文様は踏み返しにより表出が鈍くなっている。

（第13図、図版３－17）



第13図　№18地点出土和鏡

Ⅴ　考　　察

精査を行った、上郷94号墳について考察を加える。

１）出土土器の年代と性格

石室の羨門南東の墳丘崩壊土、及び溝３堆積土から、土師器、須恵器が出土している。これの土器の特徴を検討し、その所属時期を考えたい。

墳丘崩壊土出土の土器（第８図－１～７）

土師器坏６点、埦１点が出土している。

土師器

坏：器形、器面調整の特徴は６点ともに、ほぼ一様であり、口径、器高もほぼ一定である。

○外面下位に段または稜を形成し、対応する内面にも屈曲がみとめられる。

○口縁部は内弯気味に外傾し、底部は丸底である。

○内面はヘラミガキ、黒色処理、外面の段、稜から上は横ナデ、下はヘラケズリが施される。

埦：埦としては大形で、特殊な例である。

○外面中位に段を形成する。

○口縁部は丸みを持って立ちあがり、最大径は口縁部にある。

○内外面とも黒色処理が施され、内面はヘラミガキ、外面の段から上が横ナデ後ヘラミガキ、段から下はヘラケズリが施される。

さて、これらの土器の所属時期を、特徴の比較が可能な坏について検討すると、まず類例として、高清水町観音沢遺跡の坏II_2類があげられる(加藤、阿部：1980)。観音沢遺跡の土師器坏は、外面の稜、段、沈線の有無によっていくつかの変化がみられるが、それらの変化は、間接

的な共伴関係によって、一定の年代内での変化として理解されている。その年代として８世紀前半という年代が想定されており、本地点出土の土師器坏も同様の位置付けがなされる。埦については、特殊な例であり、類例をひくことはできない。しかしその出土状況が、前述の坏類の中に混在していること。器形、器面調整が坏類に類似していることなどから、前述の坏類に伴う遺物として理解される。このように、墳丘崩壊土出土の土器の年代としては８世紀前半という年代が与えられよう。

溝３堆積土出土の土器（第８図－８～13）

土師器坏１点、高坏２点、須恵器坏２点、甕１点が出土している。

土師器

坏：器形、器面調整の特徴、口径、器高は、墳丘崩壊土出土の坏類のそれと共通する。

高坏：１点は脚部のみで、坏部が欠損しているが、器形、器面調整の特徴は両者共通である。

〇坏部の外面上位に稜を形成し、対応する内面にも屈曲がみとめられる。

〇脚部は中空で、ラッパ状に裾が開く。

〇坏部の内面は、ヘラミガキ・黒色処理、外面の稜から上は横ナデ、稜から下はヘラケズリ、脚部の内外面は横ナデが施される。

須恵器

坏：２点とも底部破片で、口縁部の特徴は不明であるが、底部の特徴は、両者共通である。

〇底部から体部下端にかけて、反時計回りの回転ヘラケズリが施される。

〇底部はあげ底気味である。

甕：口縁部から胴部下半にかけて残存するが、図化できたのは口縁部のみである。

〇狭い口縁帯を持つ。

〇頚部は無文である。

〇体部内面は不定方向のナデ、外面は巾４㎜の平行タタキ目が施される。

これらの土器のうち、まず、土師器坏は、器形、器面調整、口径、器高の共通性から、墳丘崩壊土出土の坏類と同様、８世紀前半の年代が与えられる。次に高坏については、坏部の特徴が、前述の坏の特徴に共通する点が多いことから、前述の坏に近い年代であることが推定される。須恵器坏、甕については、その特徴を検討すると、色麻町日の出山窯跡A地点出土の坏、甕に共通する特徴が認められる。(岡田、工藤、桑原、佐々木、進藤：1970) 日の出山窯跡A地点は、８世紀前半から中葉にかけて操業していたと推定されている。本地点出土の須恵器にもこれに近い年代が与えられる可能性がある。

次に、これらの土器の性格について、出土層位、出土位置の観点から考察を加える。まず、墳丘崩壊土出土の土器群は、94号墳の構築面直上の墳丘崩壊土層から出土している。位置的に

は、石室の羨門部の南東に当たる地点に集中している。これらの状況から、この土器群は、94号墳に深いかかわりを持つ土器群であると考えられる。県内の横穴古墳では、羨道部・前庭部に土器群が発見される場合が多く、それらのなかには古墳の葬送にかかわる儀礼に使用された土器群もあるらしい。本地点出土の土器群も、このような性格のものと考えてよさそうである。更に、溝３堆積土出土の土器群についてみると、位置的には墳丘崩壊土出土の土器群の東に隣接した地点に集中している。所属年代も、墳丘崩壊土出土の土器との間に大きな隔りは認められない。調査区内でまとまった土器群は、墳丘崩壊土出土の土器群と深くかかわっている可能性が強いと考えられる。

以上のように、94 号墳石室の羨門部南東の墳丘崩壊土、及び溝３堆積土から出土した土器、特に前者は、94号墳の葬送の儀礼にかかわる遺物である可能性が強く、年代的には８世紀前半から、中葉に位置付けられると考えられる。これらの土器が、初期埋葬時のものか、その後の追送時のものかは不明であるが、終末期古墳の年代を推定する重要な資料であると考えられる。更に、高塚古墳の葬送儀礼を考えるうえでも貴重な資料であろう。

２）石室の構造と年代

上郷94号墳の石室の特徴を整理すると次のようになる。(第６図)

①玄室奥部に強い胴張りを持ち、その孤の半径は1.3m前後となる。

②玄門部に明確な袖が形成される。

③玄門部、羨門部に門柱状の石が据えられる。

宮城県内の横穴式石室墳について、氏家和典氏は、横穴式石室を「巨石使用の石室」、「胴張り型横穴式石室」、「竪穴系横穴式石室」、「末期変形石室」の四系統に分類し、それぞれの系統内での編年を試みている。そして「胴張り型横穴式石室」の編年は、昭和25年、44年に調査された本古墳群中の四基の古墳をも含めて試案が示されている。これを要約すると以下のようになる。

上郷135号、高野44号：玄門柱無し、袖部無し、胴張りの弧は玄室長を半径とする。

上郷 109 号、上郷 105 号：玄門柱有り、袖部形伐、胴張りの弧は玄室最大巾を半径とする。

前者は後者に先行する石室の形態で、上郷135号墳は７世紀中葉に、上郷105号墳は７世紀末に、上郷109号墳はその間に位置付けられる。

氏家和典氏の、この編年観に従えば、上郷94号墳の石室形態は、後者の上郷105号、109号墳に共通する特徴を有し、特に上郷105号墳とは強い類似が指摘できる。上郷105号墳の石室には７世紀末という年代が与えられており、上郷94号墳の石室についても、これに近い年代が与えられよう。

さて、これらのことから、上郷94号墳の築造の年代としては７世紀末前後の年代が想定できる。一方、前述の葬送儀礼にかかわると考えられる土器群については、８世紀前半代という年

代が与えられている。両者の年代の差は、小さくみて四半世紀、大きくみて半世紀となるが、追葬、及び墓前祭などの要素を考えれば、上郷94号墳が存続した年代として、広く７世紀末から８世紀前半代を考えることができよう。

Ⅵ　ま　と　め

今回確認された古墳は７基である。No28（上郷94号墳）については精査を行い、No93（上郷71号墳）、No 104（上郷93号墳）については、石室の規模、構造の概略を確認した。しかし、その他の四基No24（上郷98号墳）、No35（上郷96号墳）、No29（上郷91号墳）、No 105（上郷107号墳）については、古墳であることを確認しただけで、規模、構造の確認は行わなかった。各古墳に関する認識の差は大きいが、ここでは、今回の調査成果を概括しておく。

１）墳丘と外部施設

封土についてみると、94号墳の石室外周に僅かに残存が確認されたものの、いずれの古墳も本来の墳丘の形態・規模・構造を確認することはできなかった。また、周湟、前庭についても一切確認されなかった。ただ、石室裏込めは、発掘調査で確認された５基全てに認められ、しかも拳大の河原石を使用する点で共通していた。

２）内部主体

71号、93号、94号墳の３基は、胴張りを持つ横穴式石室、98号、96号、107号も、胴張りの有無は不明であるが、いずれも横穴式石室である可能性が強い。

これらのうち、石室の概略的な計測値が得られた71号、93号、94号墳について、石室規模を比較すると、石室全長はいずれも４～５m前後になることが推定される。過去に発掘された上郷105、109、135号墳、高野44号墳についてみると、105号、109号墳が約６m、135号墳、高野44号墳が約５m前後となる。玄室部長でみると、これら７基のものは、2.5m～３mの範囲におさまり、石室規模に大きな格差はないものと思われる。

石室の形態、構造については、上郷94号墳が上郷105、109号墳と類似していることが確認された。71、93号墳については断定できないが、確認面での観察では両者とも胴張りの弧が大きく、玄門部に明確な袖が認められず、玄門部に祷殊な石を配置した痕跡はみられなかった。これらの特徴は上郷135、高野44号墳に類似するものと思われる。

石室の用材は、いずれも径30～50㎝の河原石を主に使用しており、巨石を使用したり、割石、切石等を使用するものは確認されなかった。

なお、聞き取りによる成果から、上郷107号墳はかなり大規模な石室を有していたことが推定される。前述のように、ほぼ均質な石室規模の古墳が多い中に、このような古墳が存在していたとすれば、色麻古墳群の群構造を考える上で、新たな問題が提起される可能性は強い。

最後に今回の調査の結果、水田下に潜在する石室が二例確認された。これらは、現況が平坦な水田となっていても、石室の下部構造が遺存している例が、他にも存在する可能性を示唆している。このような古墳についての対応として、地籍図、昭和25年作成の分布図から、古墳分布を復元する作業が必要となった。

〈引用・参考文献〉

穴沢咏光（1972）：「東北南部における胴張りプランの横穴式石室とその問題」『福島考古』13号　福島考古学会

伊東信雄（1952）：「宮城県加美郡上郷古墳」『日本考古学年報』８　日本考古学協会

氏家和典（1977）：「仙台平野における横穴式石室古墳について」『研究紀要Ⅳ』　宮城県多賀城跡調査研究所

柴田俊彰（1975）：「胴張り型横穴式石室の形態について－福島県の後期古墳の横穴石室の様相－」『福島考古』16号　福島考古学会

阿部・加藤（1980）：「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書(４)　宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

岡田茂弘他（1970）：「日の出山窯跡群」　宮城県文化財調査報告書第22集　宮城県教育委員会

阿部　恵（1979）：「色麻古墳群」『遺跡詳細分布調査報告書（昭和53年度)』　宮城県文化財調査報告書第58集

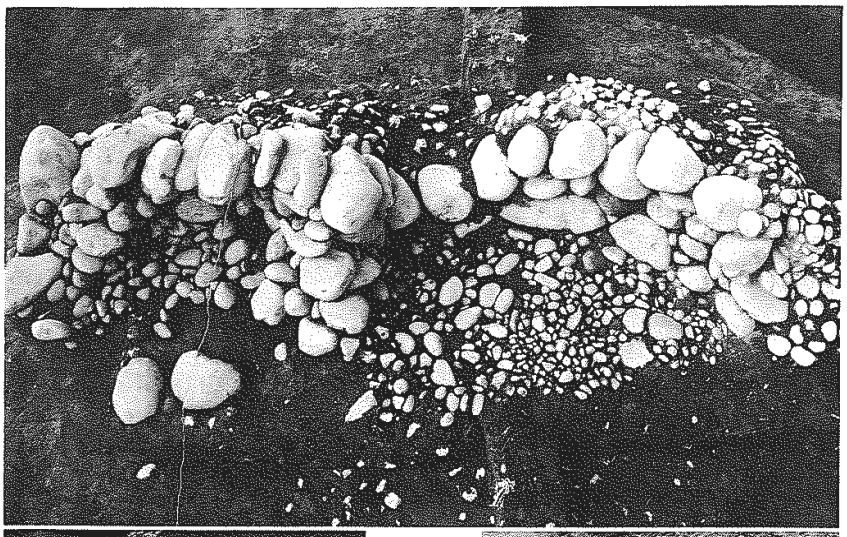
佐々木氏楨（1970）：「塚原古墳群」古川市文化財調査報告書第１集　古川市教育委員会

（1972）：「日光山古墳群」古川市文化財調査報告書第２集　古川市教育委員会

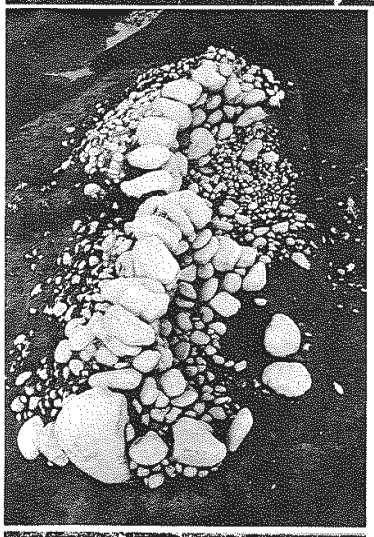
梅沢重昭他（1981）：「東平井古墳群」群馬県昭和55年度遺跡詳細分布調査実績報告書　群馬県教育委員会

横川好富他（1977）：「塚本山吉墳群」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会

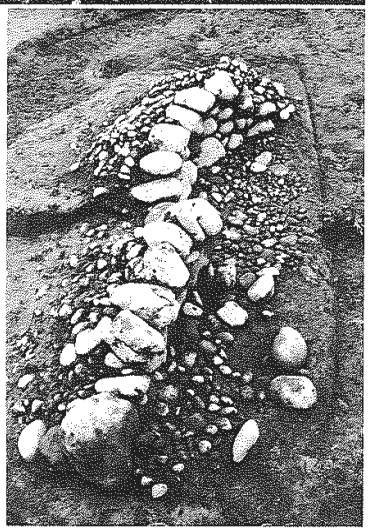
横川好富他（1981）：「桜山古墳群」埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第22集



上郷94号墳
石室（東から）



左 同 石室
閉塞石除去前
（南から）



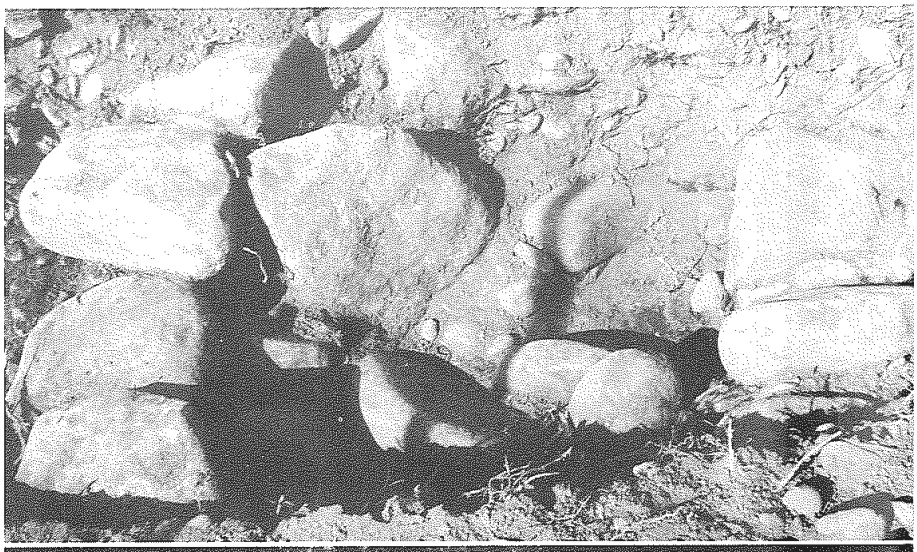
右 同 石室
閉塞石除去後
（南から）

左上郷93号墳
石室（南から）

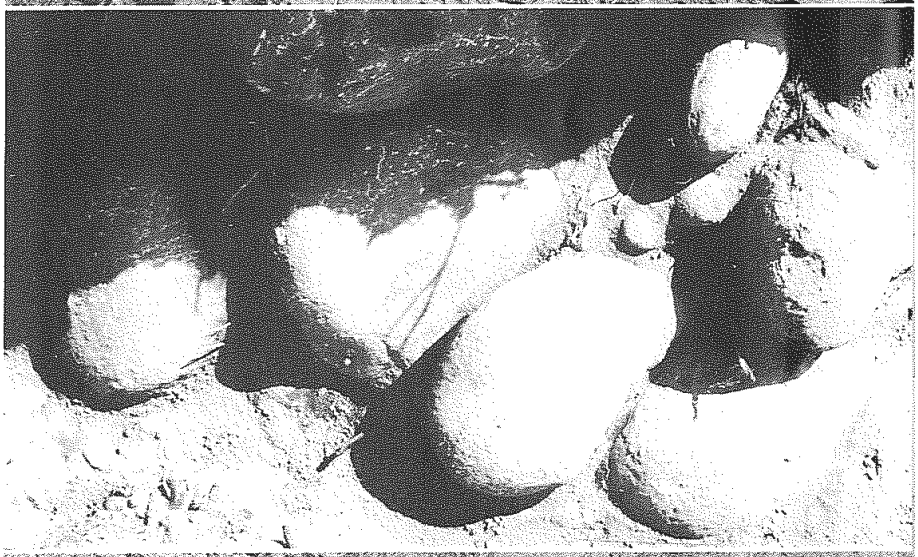
右上郷71号墳
石室（南から）

図版1

上郷98号墳石室
（南から）

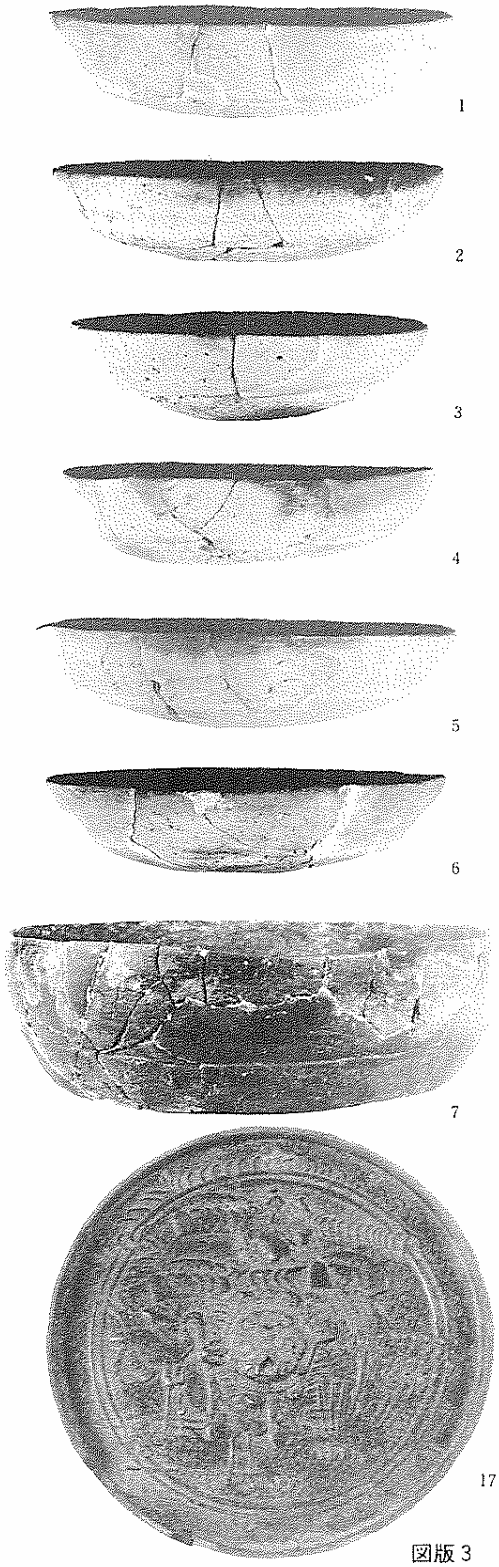


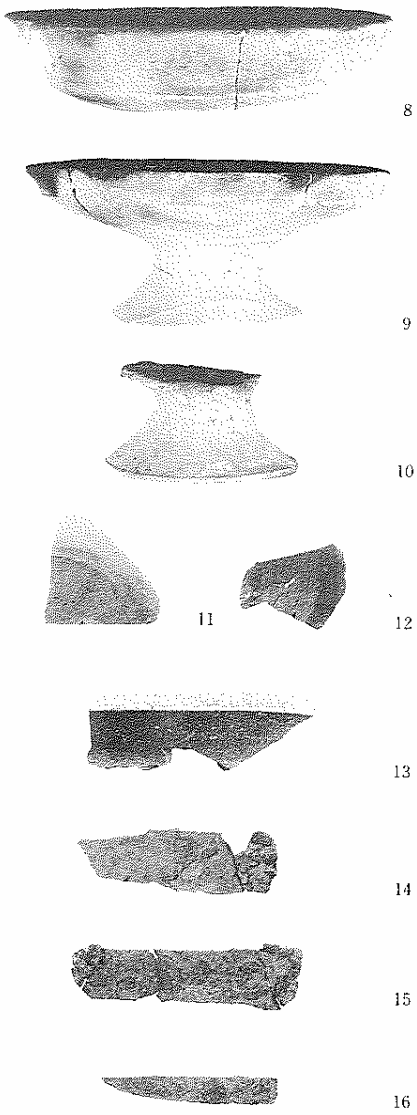
上郷96号墳石室
（西から）



上郷91号墳現況
（南から）

図版 2





1	第8図1	S＝¼	10	第8図10	S＝¼
2	〃 2	〃	11	〃 11	〃
3	〃 3	〃	12	〃 12	〃
4	〃 4	〃	13	〃 13	〃
5	〃 5	〃	14	〃 14	〃
6	〃 6	〃	15	〃 15	〃
7	〃 7	〃	16	〃 16	〃
8	〃 8	〃	17	第13図	S＝⅓
9	〃 9	〃			

図版3　出土遺物

Ⅱ　農学寮跡遺跡

調査要項

遺跡所在地：宮城郡宮城町下愛子字森下ほか

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平澤英二郎・狩野　正昭
阿部　　恵・真山　　悟

調査期間：第一次調査　　昭和56年6月18日～6月24日
第二次調査　　昭和56年7月1日～7月24日

調査対象面積：約78,000㎡

実発掘面積：　13,365㎡

遺跡記号：GQ

協力機関：宮城町教育委員会

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 33
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 39
Ⅲ　調査の成果 …… 40
　1　基本層位 …… 41
　2　埋設土器遺構 …… 41
　3　堆積層出土の遺物 …… 44
　　縄文土器 …… 44
　　円盤状土製品 …… 59
　　石器 …… 60
Ⅳ　考察 …… 66
Ⅴ　まとめ …… 71

Ⅰ　位置と環境

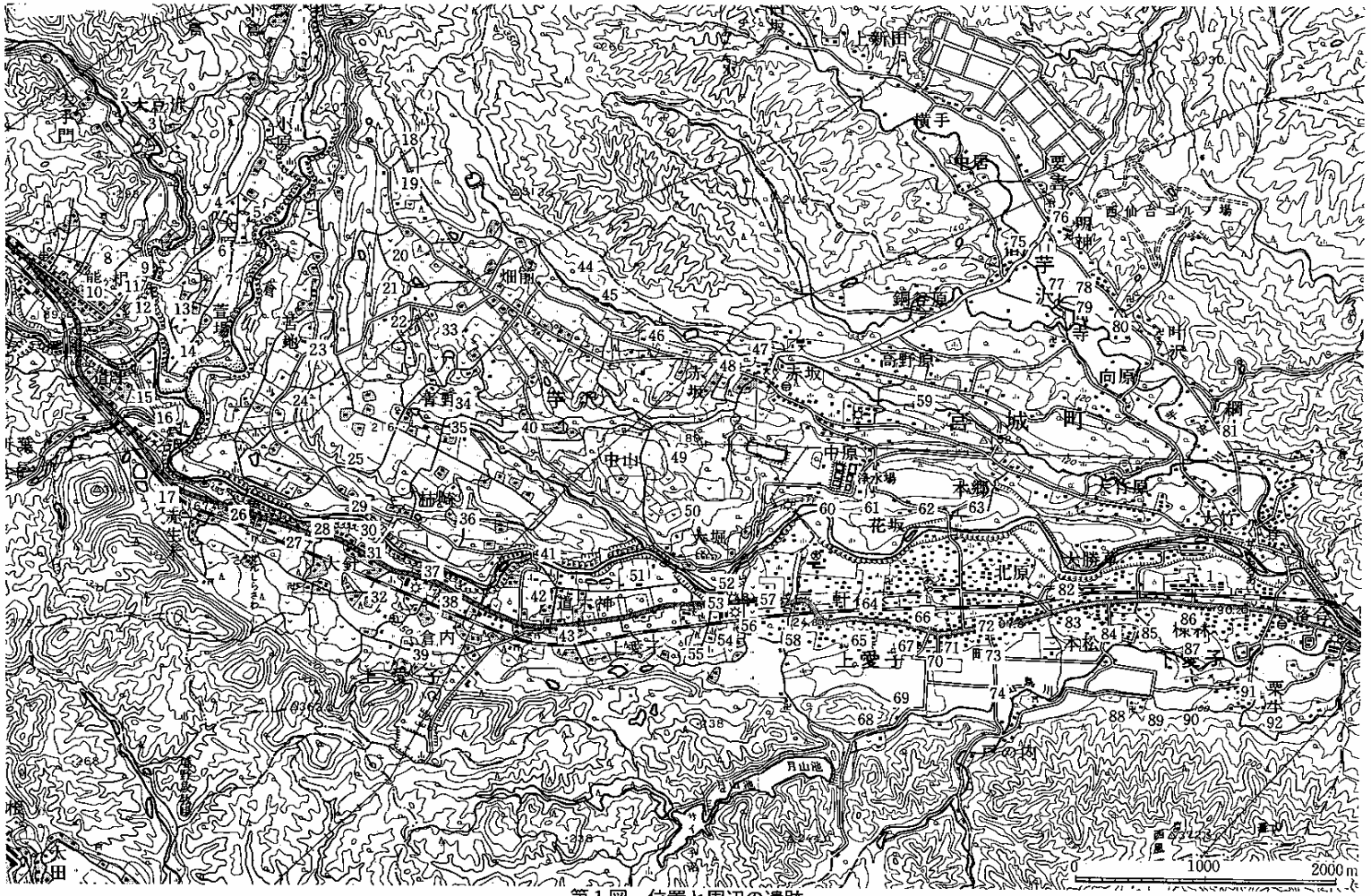
１．位置と自然環境

農学寮跡遺跡は宮城郡宮城町下愛子字森下、原に位置する。農学寮跡は国鉄仙山線、陸前落合駅を中心に鉄道に沿って、東西約1.5㎞に及ぶ広大な敷地を有する。宮城町はほぼ県の中央部仙台市の北西にある。

宮城町の地形を概観すると、西部には東北日本を縦走する奥羽山地の山並が連なり、それなより派生する七北田丘陵が本町の北部を、青葉丘陵が南部をそれぞれなだらかに東進する。両者は全体として 200m前後の定高性の丘陵である。前者は樹枝状に小起伏丘陵を分岐し、その１つが、本町東部と境を接する折立地区に張り出し、その丘陵端部には残丘陵の権現森(313.7m) が聳える。後者の丘陵では権現森と対峙して西風蕃山（372.5m）があり、そこより張り出す舌状の丘陵により折立地区で狭隘部が形成され、盆地状を呈する。この盆地は通称愛子盆地といわれる。このように、宮城町は山地と丘陵によって殆どが占められるが、平野部は愛子盆地を含めてもわずかである。一方、関山峠を水源とする広瀬川は先述した丘陵を開析しながら東流し、熊ヶ根や白沢付近では深い峡谷を窄ちながら奔流する。愛子盆地内では数段の河岸段丘を形成し、更に北より大倉川、芋沢川、南より山鳥川等の幾多の小河川を吸収して名取川と合流し、太平洋に注いでいる。

本遺跡は愛子盆地の東部、広瀬川と芋沢川との合流点付近に位置する。広瀬川は仙台市街に４段の河岸段丘を形成する（田山：1933）が、折立地区付近の段丘の形成は貧弱である。上流の愛子盆地内では更に段丘が広く発達し、４～６段から形成されるとする諸説があるが、大内氏は大きく５段から成るとしながらも更に細分している（1973：第２図参照)。遺跡周辺では広瀬川右岸の最下位段丘面に住宅団地があり、それよりおよそ 10m程高い段丘面に遺跡は立地している。この段丘面は大内氏の主張する第Ⅳb 面に相当する。

遺跡内の微地形は概ね平坦地であるが、芋沢川との合流点付近より南に入る沢があり、その東端が警察用地である。該地は東西にのびる尾根を境いに南北にそれぞれ傾斜し、採草地として利用された。標高は高い所で約 87mである。学校用地は数条の沢が東西に走るが、中央の大きな沢により南北に区画される。南側は北側より２～３m程高い段丘状を呈する。農学寮当時の校舎・宿舎等の主要構築物があり、基礎工事等による自然地形の改変が著しい地区である。標高は約 95mである。北側地区の中央は実習用の水田、畑地、採草地として利用されていた。水田部の標高は約 93m、畑地の標高は高い所で約 94mである。先述の最下位段面と遺跡の所在する段丘崖には、太平洋戦争前後に採炭された数個の坑口があり、遺跡の一部には、その陥没面も認められる。



第１図　位置と周辺の遺跡

2．周辺の遺跡

宮城町内では 132 の遺跡が確認されている（宮城県教委：1981)。その大半は本町東部に位置する愛子盆地内の河岸段丘とその周辺の丘陵や台地に集中している。

町内最古の遺跡は畑前B遺跡で、縄文時代早期の土器が発見されている。前期には大手門A、蒲沢山遺跡等が知られ、これら早前期の遺跡は赤坂川流域に立地している。中期になると遺跡数の増加が認められ、上清水、青野木C、F等の遺跡があり、これらは大倉川流域に比較的多く分布している。後期では野川、青野木E遺跡等があり、多くは中期の遺跡と重複している。晩期では矢込・下野等の遺跡が各地に分散し、その立地上の特徴は明確ではない。その他にも、未調査であるため、時期の特定はできないものの、多くの遺跡が支流の赤坂、大倉川を含め、

第1表　周　辺　の　遺　跡

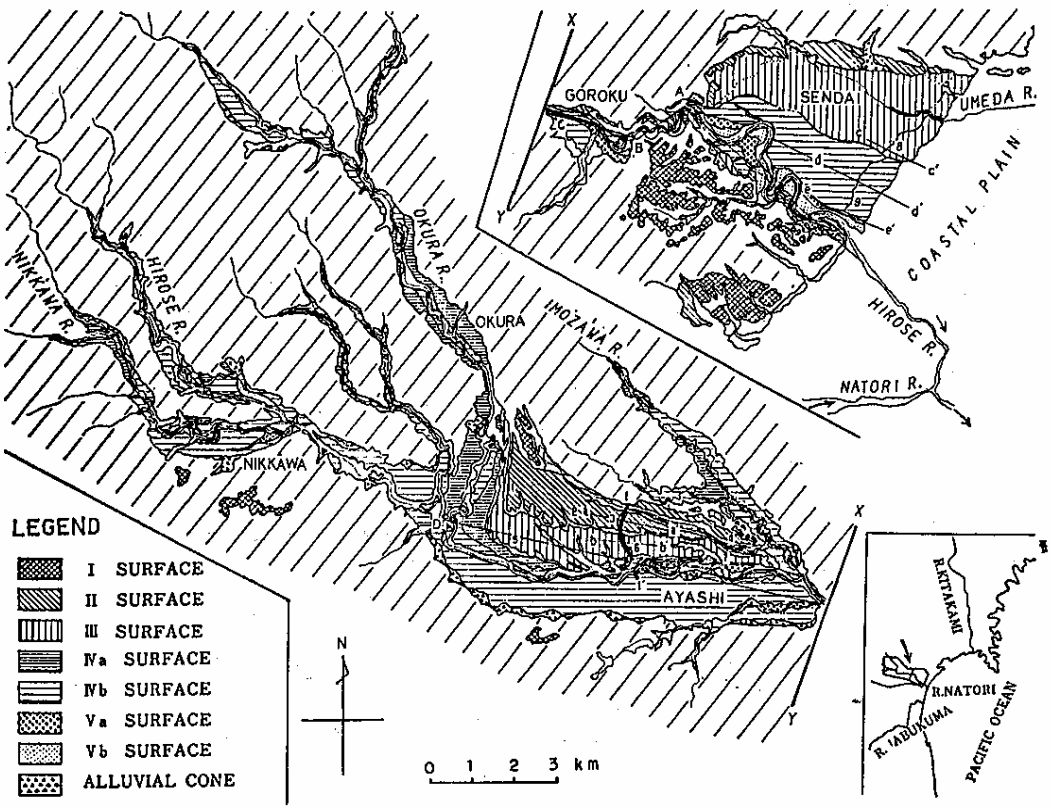
No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	農学寮跡遺跡	段丘	縄文（中・後）平安	47	蒲沢山遺跡	段丘	縄文（前）
2	大手門B〃	〃	〃（中）	48	赤坂〃	台地	縄文
3	〃A〃	台地	〃（前）	49	滿穂〃	〃	〃
4	大貫〃	〃	縄文	50	下野〃	〃	〃（晩）
5	東沢目〃	段丘	〃	51	松原〃	〃	縄文
6	大原〃	台地	〃	52	北原街道〃	段丘	〃（前）
7	大原新田〃	〃	〃	53	車A〃	台地	奈良・平安
8	町A〃	〃	奈良・平安	54	〃B〃	〃	縄文・奈良・平安
9	野川〃	〃	縄文（中・後）	55	平治〃	〃	奈良・平安
10	町B〃	〃	縄文	56	雷神A〃	〃	〃
11	興禪寺五輪塔	〃	天正（墓碑）	57	〃B〃	〃	〃
12	熊ヶ根城跡	〃	中世	58	堰内〃	〃	縄文
13	萱場遺跡	〃	縄文	59	高野原〃	〃	〃
14	大原館跡	〃	中世・近世	60	中原〃	段丘	〃
15	道半南遺跡	〃	縄文・奈良・平安	61	花坂〃	〃	〃
16	白沢〃	〃	奈良・平安	62	本郷館跡	台地	近世
17	稽〃	〃	縄文	63	〃遺跡	段丘	縄文
18	畑前C〃	丘陵	縄文・平安	64	蛇台原B〃	台地	〃
19	青野木G〃	〃	縄文（中）	65	〃A〃	〃	奈良・平安
20	〃F〃	〃	縄文	66	樋田〃	〃	縄文・奈良・平安
21	〃E〃	〃	〃（中・後）	67	複〃	〃	奈良・平安
22	〃H〃	〃	〃（中）	68	御殿館跡	丘陵	中世
23	田尻〃	台地	〃（中・後・晩）	69	諏訪神社遺跡	丘陵端	近世
24	上清水〃	段丘	〃（中）	70	上町A〃	台地	奈良・平安
25	二尺木〃	〃	縄文・奈良・平安	71	〃B〃	〃	〃
26	大道A〃	台地	縄文	72	補陀寺跡	〃	近世
27	田中〃	〃	奈良・平安	73	観音A〃	〃	奈良・平安
28	大道B〃	〃	〃	74	南館跡	〃	中世
29	上十三枚田A〃	〃	〃	75	寺下〃	〃	中世・近世
30	〃B〃	〃	〃	76	宇那弥神社跡	丘陵斜面	近世
31	下大木門〃	〃	〃	77	原館跡	段丘	中世・近世
32	瑞応寺跡	〃	近世	78	芋沢の正安の碑	〃	中世
33	青野木D〃	丘陵	縄文	79	〃嘉元〃	〃	〃
34	〃B〃	台地	〃	80	馬場城跡	台地	中世・近世
35	〃C〃	〃	〃（中）	81	西館遺跡	〃	〃
36	柿崎〃	段丘	縄文	82	想海塚跡	〃	中世
37	上北〃	台地	奈良・平安	83	二本松A遺跡	〃	縄文・奈良・平安
38	中遠野原〃	〃	〃	84	楔林C〃〃	〃	〃
39	大清水〃	〃	〃	85	〃B〃	〃	奈良・平安
40	青野木A〃	〃	縄文	86	〃A〃	〃	縄文
41	柿崎橋〃	段丘	〃	87	五輪塔〃	〃	〃
42	松原A〃	台地	〃	88	弥勒寺の元亨の碑	〃	中世
43	下遠野原〃	〃	奈良・平安	89	館〃	丘陵端	奈良・平安
44	畑前A〃	〃	縄文	90	窪〃	〃麓	〃
45	〃D〃	丘陵	〃（前・中）	91	巣生〃	台地	〃
46	〃B〃	台地	〃（早・前）	92	西館跡	丘陵	中世・近世

広瀬川左岸の段丘等に分布している。本遺跡近くでは棟林A、五輪塔遺跡があり、調査された遺跡には、昭和47年の権現森遺跡（阿部恵：1981）がある。町内の上述のような遺跡のあり方は、縄文時代の生業である狩猟、採集等に利便を提供する山地や丘陵の占める割合の高い本町の地形上の特徴によるものと想定される。

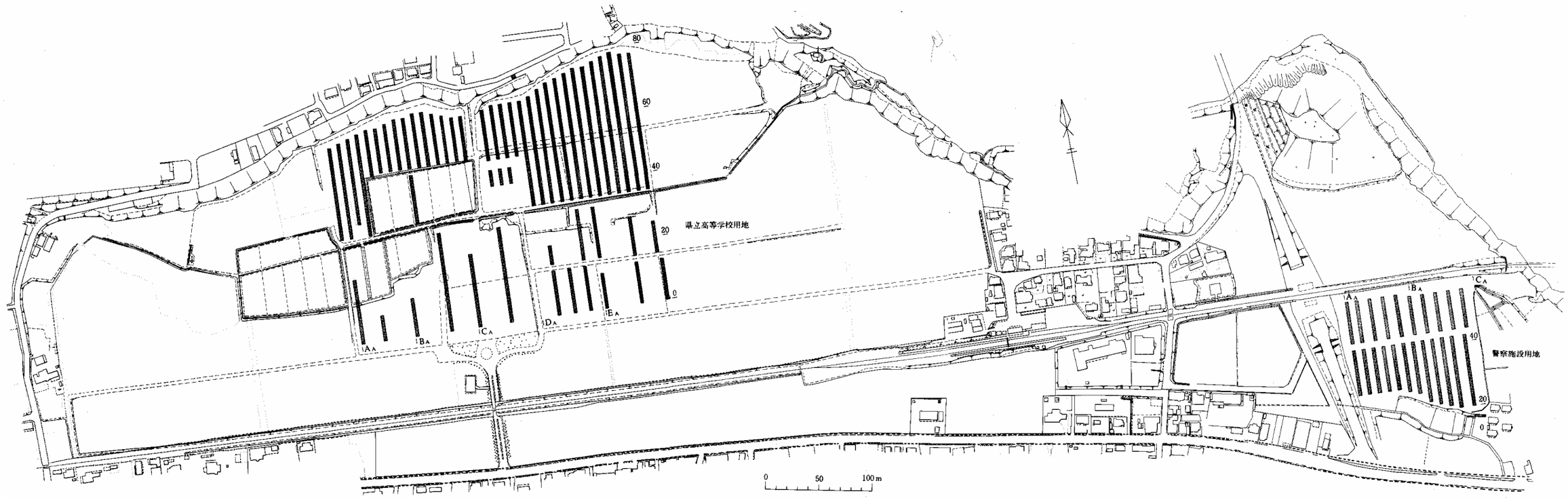
弥生、古墳時代の遺跡は現在のところ確認されてはいない。

奈良、平安時代の遺跡は、本遺跡近くの栗生、窪、館、棟林B遺跡等を含め数多く存在する。この時期の遺跡は広瀬川右岸の比較的低位の段丘面に濃密な分布を示す傾向がうかがわれる。

中世～近世にかけての遺跡の分布をみると館跡が比較的多く認められ、その他に数は少ないが、板碑・塚などがある。館跡は広瀬川流域の段丘面や丘陵頂部に、本郷館・馬場館・大原館・御殿館が、また芋沢川流域の小丘陵上に原館・寺下館などの通称「芋沢七館といわれる館」がある。中世の宮城町は宮城郡の中に含まれ、室町中期からしだいに国分氏の影響を受けるようになった（佐々木：1957）。



第２図　愛子盆地の地形分類図（大内：1973）



第３図　遺跡の現状・グリッド配図

Ⅱ　調査の方法と経過

農学寮跡遺跡の調査は、二次に亘って実施された。第一次調査は警察用地（約1.3万㎡)、第二次調査は学校用地（約6.2万㎡）を各々対象として行なわれたものである。

第一次調査

６月18日から開始した。発掘面積は約2,970㎡である。はじめに、地形測量時の縦横断面図作成のための測量杭を基準として、一辺３m単位のグリッドで調査区全体を区画した。グリッド名は東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で示した（第３図)。対象地の地形は南北方向に緩やかに傾斜しているため発掘に際しては傾斜に沿って南北に長しトレンチ（幅３m×長さ42～66m）を６～９mおきに設定し、遺構の確認を行った。調査の結果、遺構は発見されず遺物は石匙１点が出土したのみである。調査が終了したのは６月24日である。

第二次調査

７月１日から開始した。発掘面積は約10,395㎡である。調査は第一次調査と同様な方法で対象区全体を区画し、各々グリッド名を付した（第３図)。発掘に際しては地形、現況に応じて幅３m×長さ15～130mの南北に長いトレンチを設定した。

調査の結果、調査区の北東部において縄文時代の竪穴住居跡１軒、埋設土器遺構７基、土壙２基および奈良～平安時代の住居跡１軒が発見され、縄文土器、石器等の遺物が出土した。この北東部はグランド予定地として盛土されるため、調査はＤＦ、ＤＬ、ＤＯ、ＤＲの各トレンチの精査と埋設土器遺構３基の精査にとどめ他は埋め戻し、遺跡の保存をはかることにした。

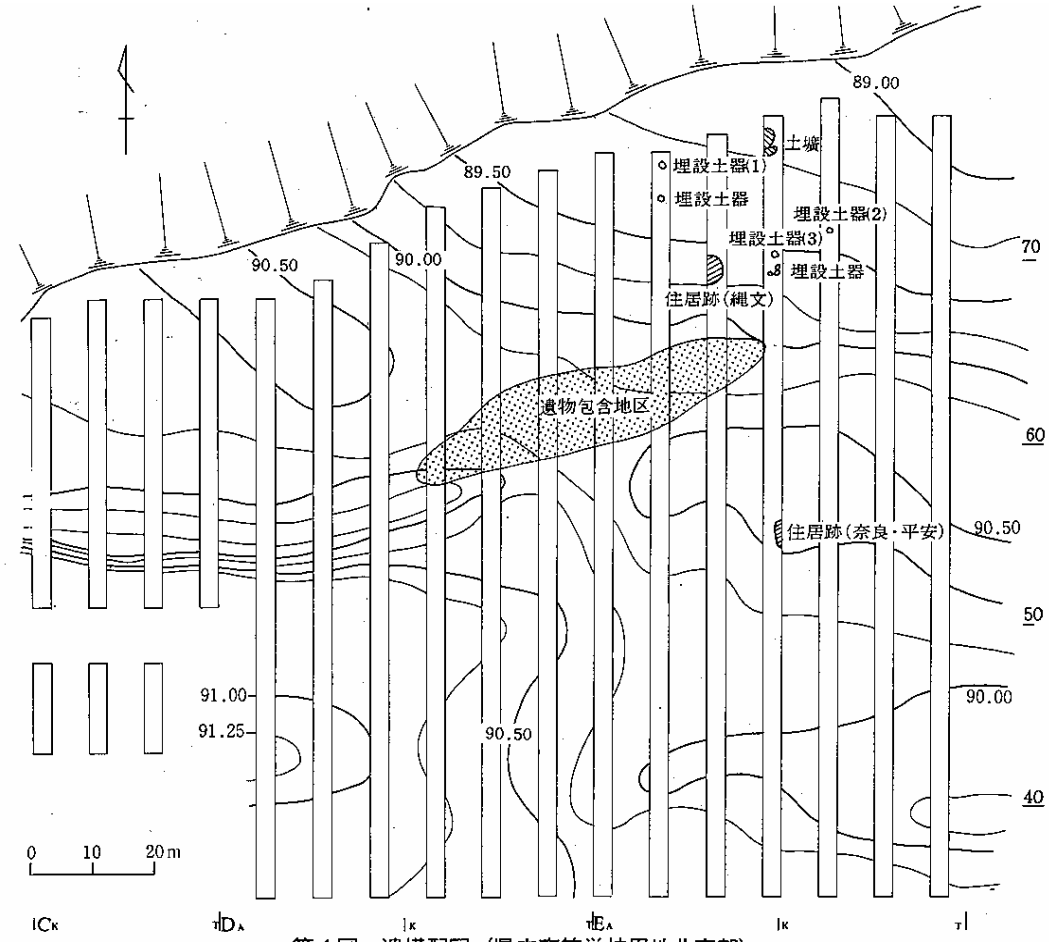
精査した埋設土器遺構については1/10の平面図、断面図作成および写真撮影を行い、他の遺構については1/300のグリッド配図にその位置、概形を記した。また、ＤＲのトレンチについては1/20の土層断面図を作成した。最後に遺構部分のトレンチの埋め戻しを行い、調査の一切を終了したのは７月24日である。

Ⅲ　調査の成果

本遺跡では県立高等学校用地北東部において縄文時代の遺構、遺物等が発見されている。他の地域では警察学校用地において剥片石器１点が発見されたのみである。

県立高等学校用地北東部はそのほぼ中央に鞍部状のわずかな高まりがあり、それを中心として北東および南西に開く沢状の地形がある。調査の結果、この地形を境に北側の部分において縄文時代の竪穴住居跡１軒、土壙２基、埋設土器遺構７基が発見され、鞍部においては縄文時代の遺物を含む層が確認された。また沢状地形の部分では鞍部から流れ込んだと思われる遺物が若干出土している。一方沢状地形の南側の部分においては奈良～平安時代の竪穴住居跡１軒が発見されたのみで、縄文時代の遺構は発見されなかった（第４図)。

調査ではこのうち第１～３埋設土器遺構を精査し、ＤＦ、ＤＬ、ＤＯ、ＤＲトレンチにかかる遺物を含む層を掘り上げた。



第４図　遺構配図（県立高等学校用地北東部）

１．基本層位（第５図）

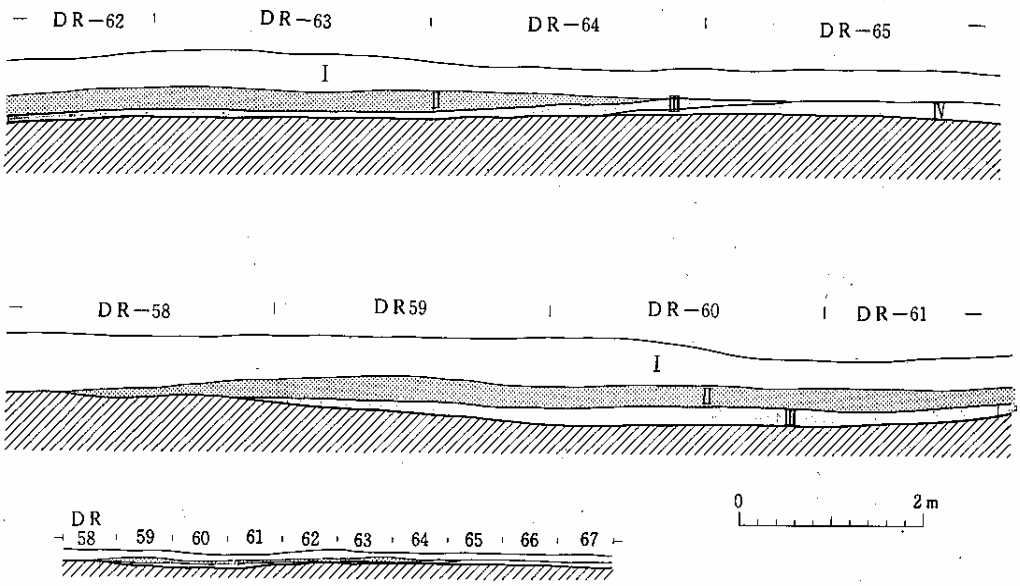
県立高校用地北東部における堆積土は基本的に４枚の層からなっている。

第Ⅰ層は厚さ30～60㎝の黒褐色シルトからなる層で、その大部分は耕作等により攪乱されている。層中からは縄文土器・石器等が出土している。

第Ⅱ層は厚さ20～30㎝の黒褐色シルト層で、色調は第Ⅰ層よりやや黒味を帯びている。この層は北東地区を東西にのびる沢状地形（第４図）の部分に堆積する。層中からは縄文土器・石器等が出土している。

第Ⅲ層は厚さ15～20㎝の暗褐色シルト層で、第Ⅱ層と同じく沢状地形の部分に堆積する。層中からは縄文土器が出土している。

第Ⅳ層は厚さ15～20㎝の黒褐色シルト層で、北東地区の北部を中心に分布している。遺物は含まない層で、埋設土器遺構はこの層で確認されている。

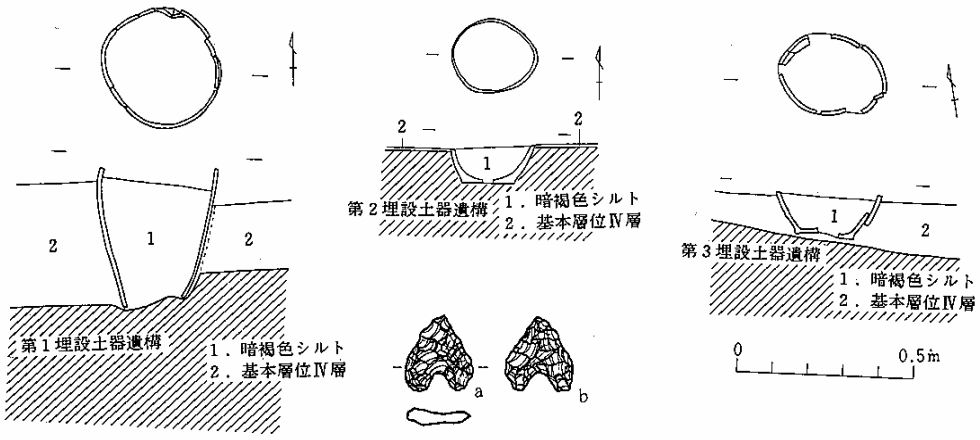


第５図　基 本 層 位

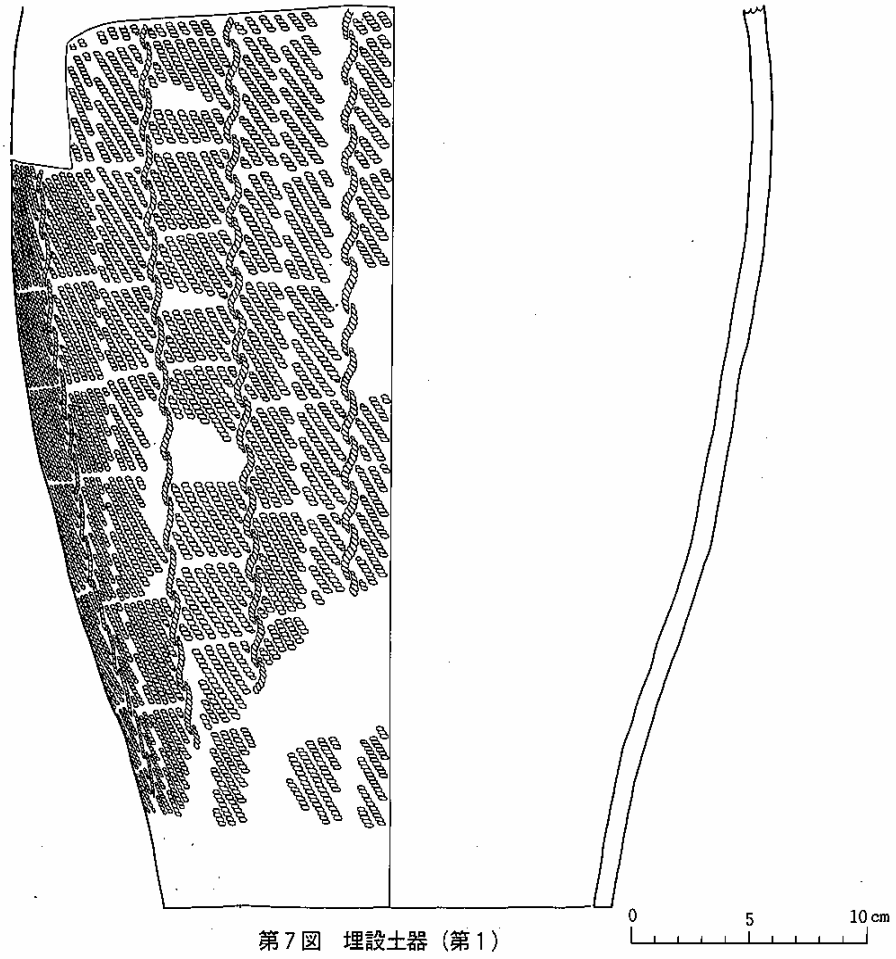
２．埋設土器遺構

(1)　第１埋設土器遺構（第６図１）

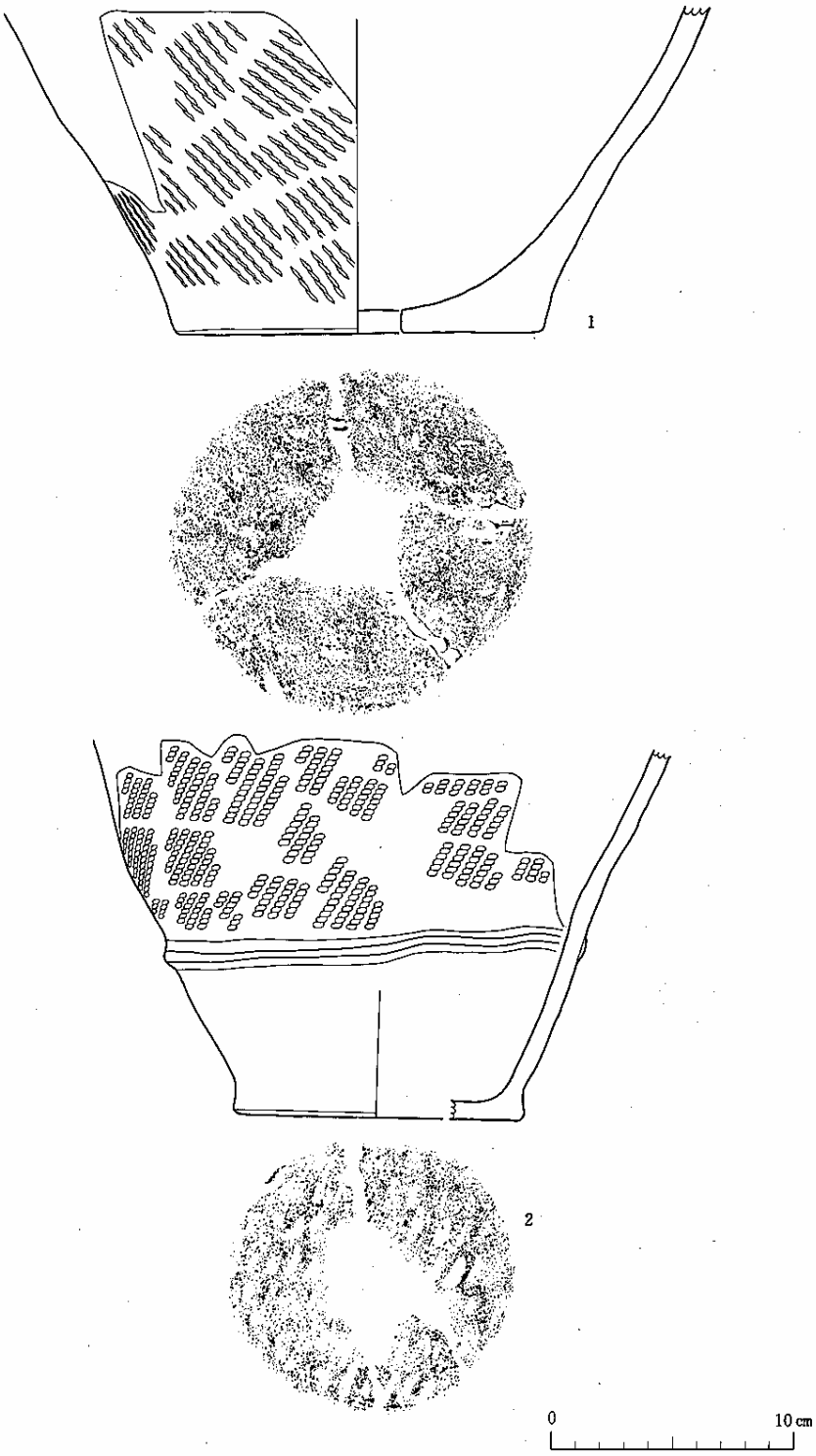
ＥＤ－75区の第Ⅳ層で確認された。深鉢形土器が正位に埋設されているものである。掘り方は確認できなかった。しかし断面の観察によれば、第Ⅳ層中では確認できないが、地山では一部が土器の外面に沿うように凹んでおり、あるいは掘り方とも考えられる。土器内の堆積土は暗褐色シルトで、層中からは石鏃が１点出土している。



第６図　埋設土器遺構



第７図　埋設土器（第１）



第８図　埋設土器（上：第２、下：第３）

埋設土器（第７図）

文様が施されない深鉢形土器である。口縁部は欠損している。器形は体部が外傾し口縁部付近でやや内弯ぎみになるものである。体部下端から底部にかけては人為的に取り去られている。

石鏃（第６図４）

基部が抉られた凹基の石鏃である。ａ面中央にわずかに一次剥離面を残している。両面の二次加工に比較的粗く、尖端部は若干厚手である。

(2)　第２埋設土器遺構（第６図２）

ＥＭ－71 区の第Ⅳ層で確認された。深鉢形と思われる土器の体部下半が正位に埋設されているものである。掘り方は確認できなかった。土器内の堆積土は暗褐色シルトで、層中からの出土遺物はない。

埋設土器（第８図1）

体部中央から上が欠損しているものである。底部から体部にかけて外傾しており、底部には焼成後になされた穿孔がみられる。器面には撚糸文（Ｒ）が施されている。

(3)　第３埋設土器遺構（第６図３）

ＥＪ－70 区の第４層で確認された。深鉢形土器が正位に埋設されているものである。掘り方は確認できなかった。土器内の堆積土は暗褐色シルトで、層中からの出土遺物はない。

埋設土器（第８図２）

深鉢形土器で体部中央から上が欠損している。底部から体部にかけて外傾するもので、体部下位に横位の隆線が巡っている。隆線から上には縄文（ＲＬ）が施されている。

３．堆積層出土の遺物

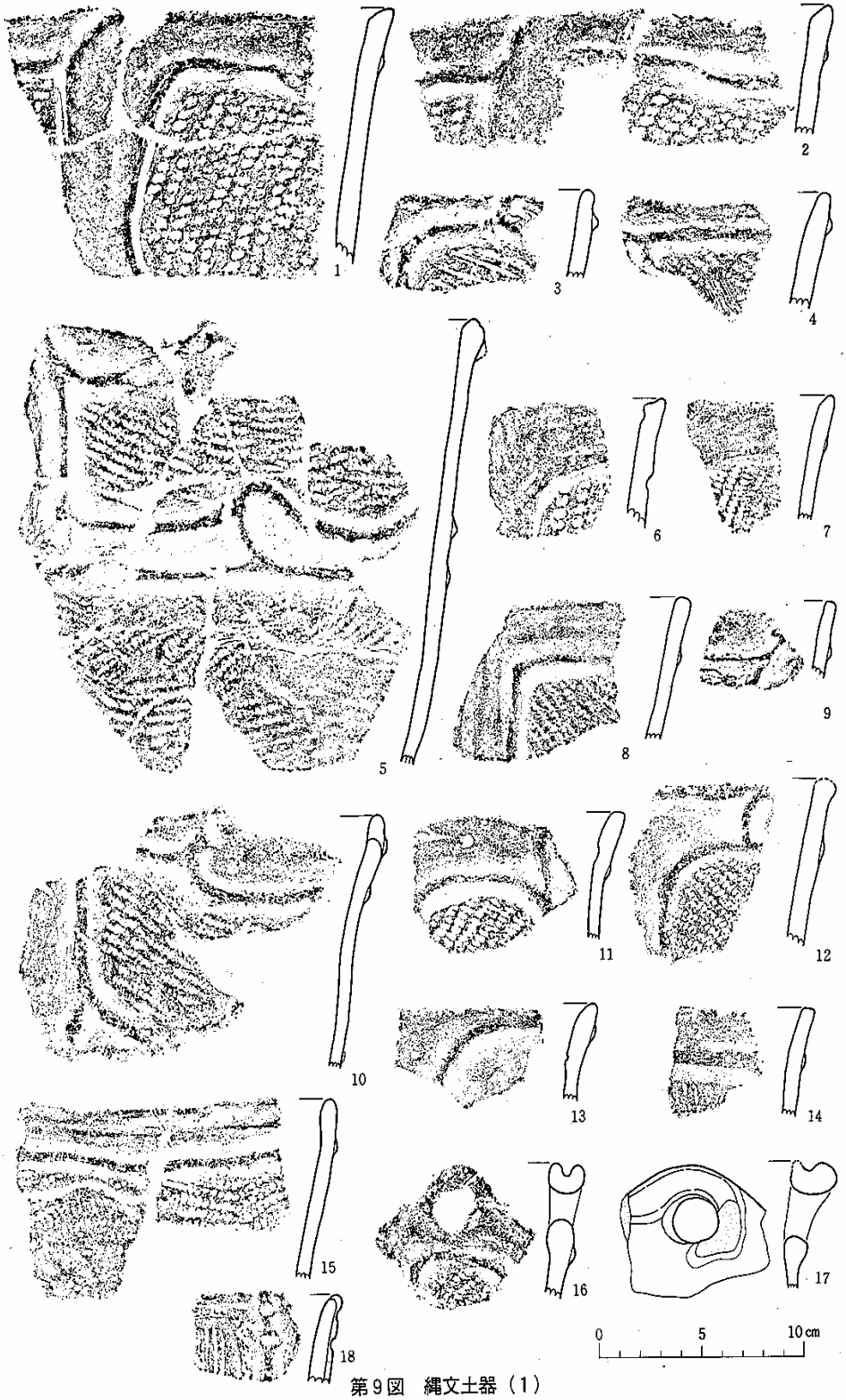
(1)　縄文土器

本遺跡においてはⅠ・Ⅱ・Ⅲの各層から縄文土器が出土している。これらはそのほとんどが破片であり、全体の器形が判明するものはきわめて少い。

〈鉢形土器〉

口縁部資料

土器は、その特徴からいずれも鉢形土器と考えられるものであるが、破片のため全体の器形文様等については不明な点が多い。これらは文様が施されているものとそうでないものとがある。まず、文様の施されているものについてみると、その形態から大きく次の６種類に分けることができる。すなわちＡ－体部から口縁部にかけておおむね外傾するもの、Ｂ－頸部で「く」



第9図　縄文土器（1）

の字状に屈曲し口縁部が外傾するもの、Ｃ－体部に強いふくらみをもち口縁部が外反するもの、Ｄ－体部上位に肩部を有し口縁部が外反するもの、Ｅ－口縁部が内弯するもの、Ｆ－体部は外傾し口縁部が「｢」状に屈曲するものである。

A. 体部から口縁部にかけておおむね外傾するもの（第９・10図）

これらは口縁部がそのまま外反するものと外反するものとがある。また外傾するものは隆線もしくは沈線によって方形に区画される文様が描かれるものと、斜行もしくは下降する沈線文によって文様が描かれるものとに分けることができる。

イ．口縁部が外傾し、方形に区画される文様が描かれるもの

第９図１～13は口縁部がいずれも外傾するもので、端部が平縁のもの（１～３、６～９、12・13）と波状を呈するもの（４・５・10・11）がある。両者とも口縁部には無文帯を有し、体部には２本の隆線間に形成される無文帯によって方形に区画される文様が横方向に展開している。区画内にはＬＲもしくはＲＬの縄文が充塡されており、量的にはＬＲの縄文が多い。

第９図15は口縁部が外傾するものである。文様は沈線によって方形に区画され横方向に展開する文様が描かれるが、同時にそれを遮断する隆線を有するものである。区画内にはＬＲの縄文が施されており、また隆線の上端には２個の刻み目が施されている。

ロ．口縁部が外傾し、斜行もしくは下降する沈線等によって文様が描かれるもの

これらは口縁部に無文帯をもつものともたないものに分けることができる。前者はさらに文様帯を遮断するような隆線をもつものともたないものがみられる。

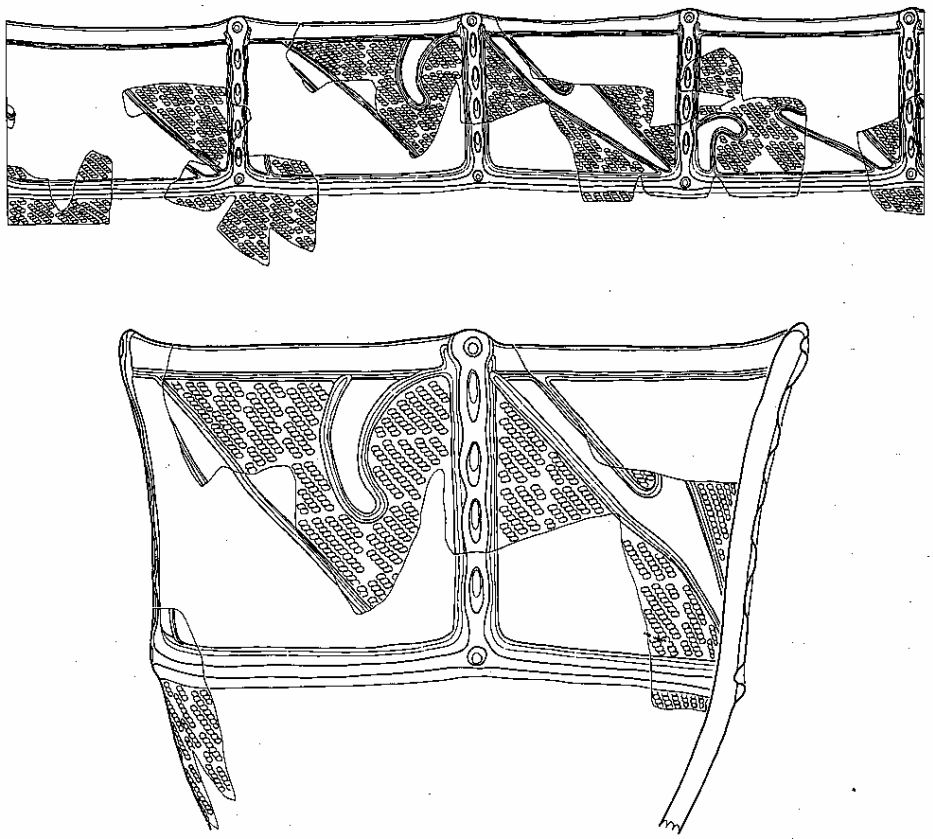
第10図は遮断する隆線をもつものである。隆線は連鎖状の刺突を有し上下端に盲孔がそれぞれ１個施されるもので土器を４分した位置に縦位に貼付されており、各隆線間には斜行する磨消帯および「ノ」や「Ｊ」字状の磨消帯が施されている。

第11図９～12は遮断する隆線をもたないものである。９・10は口縁部無文帯が沈線によって区画されるもので口縁部に盲孔が施され、それを基点として沈線による文様が下方に展開している。６～8 も同様の文様展開をするが、磨消縄文により文様構成されている。なお７では盲孔下に縦位の列点文が配されている。第11図11・12は山形の口縁部突起を有するもので、11は頂部下に円形浮文および盲孔があり、その直下から沈線による文様が展開されている。12は頂部下に沈線による渦巻文があり、それを中心として左右に盲孔が配される。口縁下には体部と境を画す隆線があり、その下には下垂する沈線文が認められる。第11図22は口縁部無文帯の下に横位の沈線で区画する縄文帯を有するもので、区画内には上位の沈線に沿って列点が施されている。この他第11図13～21はいずれも口縁部無文帯を有し、それが隆線（13・14）もしくは沈線（15～22）によって区画されるが、体部文様については不明なものである。

23～26 は口縁部無文帯をもたないものである。いずれも沈線によって文様が描かれている。23 はわずかに「C」字状の磨消帯がみられ、24 は口縁部に沈線で区画された文帯が施されている。

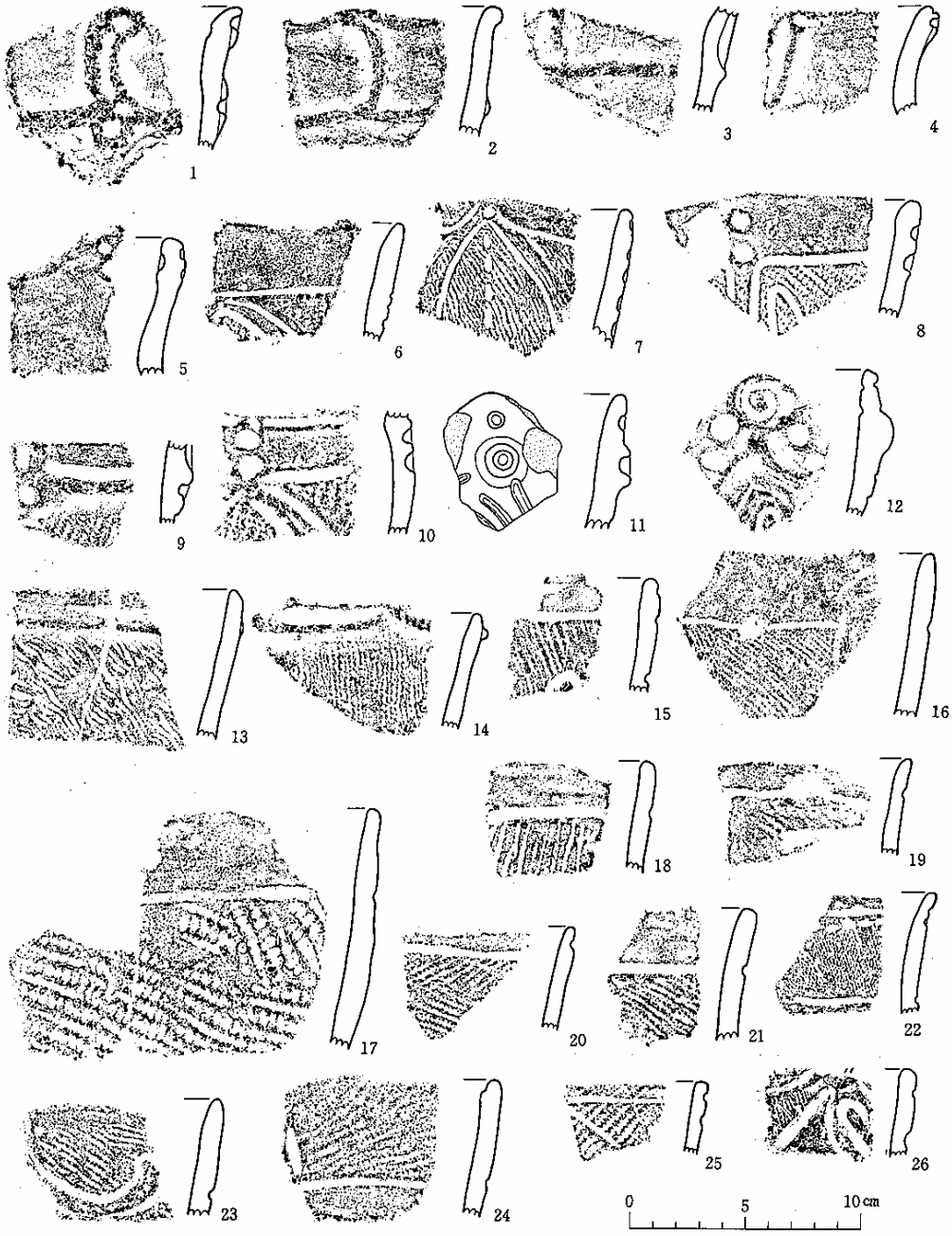
（ハ）口縁部が外反するもの

第11図１、５は口縁部が外反するものである。いずれも口縁部無文帯を有するもので、このうち１～４は口縁部に縦位の棒状貼付文か施され、さらに１・４ではそれに沈線および盲孔が付加されている。５は山形を呈する口縁部突起で、頂部の内外面にそれぞれ盲孔が施されている。



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																		
							7	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	37	14	鉢	DR-61・3層	ミガキ	撚糸文(L)	Ⅰ A1 a イ	171
第9図1	鉢	DR-62・3層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	100	8	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	35	15	鉢	DR-61・2層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	99
〃 2	鉢	DR-61・3層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	119	9	鉢	DR-63・1層	ミガキ	不明	Ⅰ A1 a イ	86	16	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	39
〃 3	鉢	DR-62・1層	ミガキ	不明	Ⅰ A1 a イ	73	10	鉢	DR-63・2層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	115	17	鉢	DR-62・3層	ミガキ	不明		204
〃 4	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	173	11	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	101	18	鉢	DR-62・3層	ミガキ	撚糸文(R)	Ⅰ A1 a ロ	169
〃 5	鉢	DR-62・3層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	120	12	鉢	DR-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1 a イ	57	第10図1	鉢	DR-61・3層	ミガキ	縄文(LR)	Ⅰ A1b イ	205
〃 6	鉢	DR-61・3層	ミガキ	縄文(RL)	Ⅰ A1 a イ	26	13	鉢	X-X・X	ミガキ	不明	Ⅰ A1 a イ	77							

第10図　縄文土器（２）



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号															
第11図1	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	ⅠA2	46	9	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(LR))	ⅠA1bイⅡ	19	18	鉢	DR-62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	ⅠA1	66
2	鉢	DR-61・2層	ミガキ	不明	ⅠA2	67	10	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR))	ⅠA1bイⅡ	5	19	鉢	DL-61・2層	ナデ	縄文(LR)	ⅠA1	164
3	鉢	DR-63・3層	ミガキ	不明	ⅠA2	85	11	鉢	DR-60・1層	ミガキ	不明	ⅠA1bイⅡ	128	20	鉢	DR-62・2層	ミガキ	縄文(RL)	ⅠA1	159
4	鉢	DO-61・1層	ミガキ	不明	ⅠA2	31	12	鉢	DR-60・2層	ミガキ	不明	ⅠA1bイⅡ	113	21	鉢	DL-61・2層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠA1	68
5	鉢	DO-62・1層	ミガキ	不明	ⅠA2	16	13	鉢	DL-61・1層	ミガキ	縄文(L)	ⅠA1イ・	76	22	鉢	DR-62・2層	ミガキ	撚糸文(L)	ⅠA1	60
6	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠA1bイⅡ	15	14	鉢	DO-62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	ⅠA1	12	23	鉢	DR-62・2層	不明	縄文(LR)	ⅠA1bロ	175
7	鉢	DR-61・2層	ミガキ	撚糸文(L)	ⅠA1bイⅡ	84	15	鉢	DO-62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	ⅠA1	17	24	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠA1bロ	104
8	鉢	DR-62・1層	ミガキ	縄文(RL)	ⅠA1bイⅡ	36	16	鉢	DR-61・2層	不明	撚糸文(R)	ⅠA1	178	25	鉢	DR-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠA1bロ	166
							17	鉢	DL-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠA1	80	26	鉢	DR-61・2層	ナデ	撚糸文(R)	ⅠA1bロ	49

第11図　縄文土器（3）

B． 頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が外傾するもの（第12図１～９）

これらには口縁部の内側に段がつくり出されるものとそうでないものの二者がある。

１～４・６・８は段がつくり出されるものである。いずれも口縁部に無文帯を有するもので このうち１～４は無文帯の上部を画するように沈線もしくは隆沈線が施されており、１・２ではさらに沈線の基点となる部分に１～２個の盲孔が配されている。６はラッパ状の突起を有するもので、突起部に２個の貫通孔を伴っており、突起下の外面には円形もしくは楕円形の盲孔が３個配されている。８は山形突起を有するもので、突起部中央に貫通孔が穿たれており、その両脇に盲孔が１個ずつ配されている。

５・７・９は段をもたないものである。このうち５・７は口縁部に無文帯が施されている。５は粘土を貼り付けることによって口縁部の断面が「Y」字状を呈するもので、外側の口縁端部には連続する刻み目が施されている。７は小さな山形突起を２個並列させて一対としているもので、それぞれ突起の中心に貫通孔を伴っており、貫通孔の直下からは列点文が下垂している。９は円筒形の突起を有するもので、突起部には１個の貫通孔を中心に４個の盲孔が配されている。口縁部には沈線による文様が描かれており、文様は口縁部上位にある稜線を境に上は横方向、下は下方にそれぞれ展開している。

C． 体部に強いふくらみをもち、口縁部が外反するもの（第12図10）

10 は体部が強くふくらみ、頸部でしまり、口縁部が外反するものである。頸部には把手が付く。文様をみると、口頸部は隆線によって体部と画され、その部分は無文化されるもので、口縁部および隆線上には連続する刻み目が施されている。体部は一様に刺突が施されており、把手下には沈線および連続する刻み目を伴う渦状の隆線文が貼付されている。把手には馬蹄形をなす隆線文が２個縦位に施されており、隆線文上には連続する刻み目が付加されている。

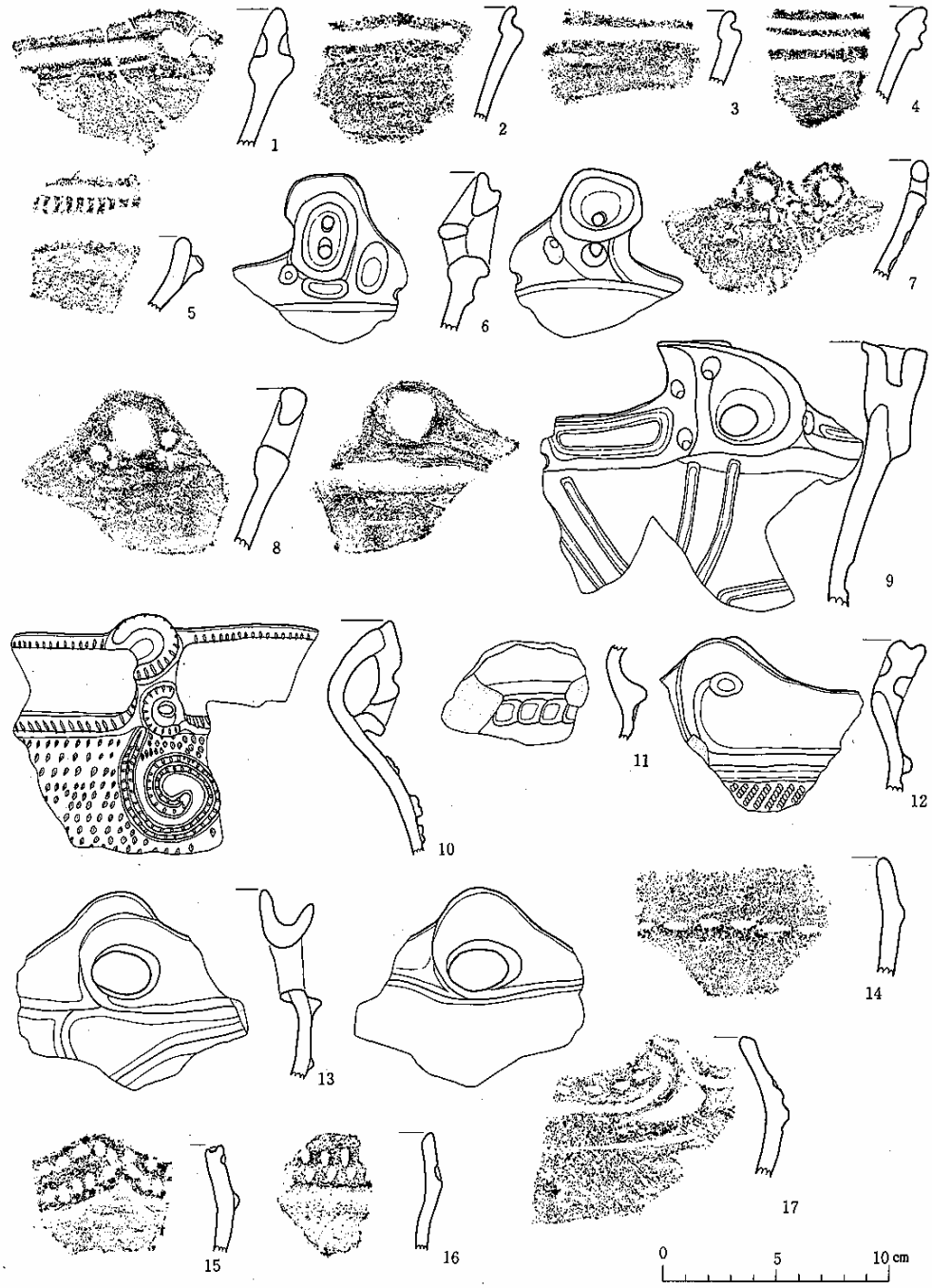
D． 肩部を有し、口縁部が外反するもの（第12図11）

11 は小破片のための不明な点が多いが、体部上位に肩部を有し、頸部で締まり、口縁部が外反すると推定されるものである。口頸部は無文帯になっており、肩部には鱗状の連続刺突が施されている。

E． 口縁部が内弯するもの（第12図12～17、第13図１～７）

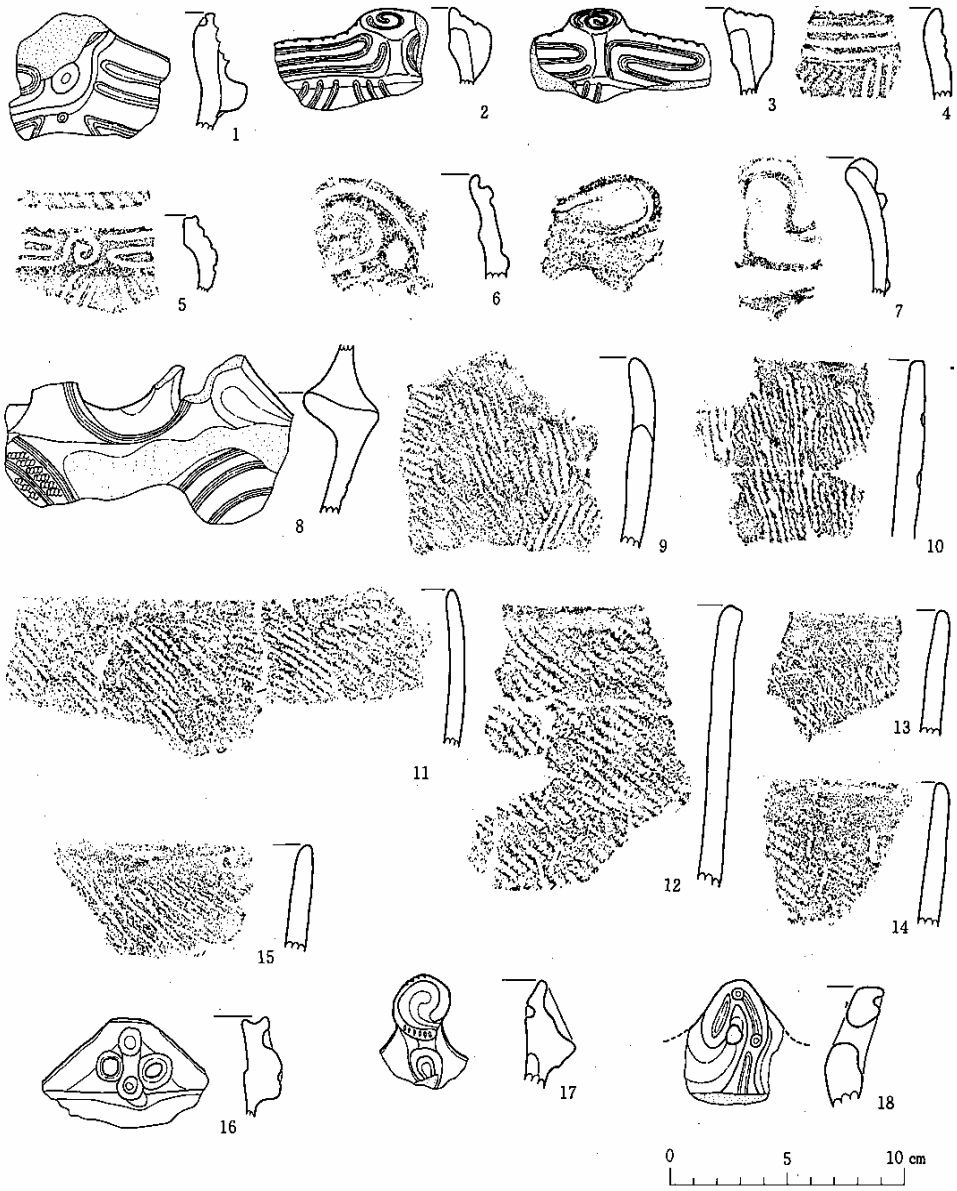
これらはいずれも口縁部が内弯するものである。文様からみると口縁部に無文帯をもつものともたないものの二者に分けることができる。

第12図12～14 は口縁部に無文帯をもつものである。いずれも隆線もしくは隆沈線によって体部と画されており、このうち14では隆線上に連続する刺突が施されている。12・13 は二重の山形突起が付くもので、突起の中心には12では盲孔、13では貫通孔が穿たれている。13 は体部に隆線による文様がみられるが、その構成は明らかでない。



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																	
第12図1	鉢	DO-62・1層	ミガキ	不明	ⅠB1a	41	6	鉢	DR-62・1層	ミガキ	不明	ⅠB1b	127	12	鉢	DR-60・2層	ミガキ	縄文(LR)	ⅠE1	126
2	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	ⅠB1a	203	7	鉢	DR-51・2層	ミガキ	不明	ⅠB2a	65	13	鉢	DR-51・2層	ミガキ	不明	ⅠE1	125
3	鉢	DO-61・1層	ミガキ	不明	ⅠB1a	29	8	鉢	DR-62・1層	ミガキ	不明	ⅠB1b	43	14	鉢	DL-61・2層	ミガキ	不明	ⅠE1	161
4	鉢	DR-61・2層	ミガキ	不明	ⅠB1a	89	9	鉢	DO-61・1層	ミガキ	不明	ⅠB2b	123	15	鉢	X−X・X	ミガキ	不明	ⅠE2a	42
5	鉢	DR-61・1層	ミガキ	不明	ⅠB2a	91	10	鉢	DL-62・1層	ミガキ	不明	ⅠC	121	16	鉢	DR-62・1層	ミガキ	不明	ⅠE2a	63
							11	鉢	DR-63・1層	ミガキ	不明	ⅠD	132	17	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	ⅠE2a	45

第12図　縄文土器（4）



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号	第13図7	鉢	DR−63・2層	ミガキ	不明	IE2c	111	第13図14	鉢	DR−61・1層	不明	縄文(RL)	IIA	158
第13図1	鉢	DL−61・1層	ミガキ	不明	IE2b	124	〃 8	鉢	DR−61・2層	ミガキ	縄文(LR)	IF	212	〃 15	鉢	DR−62・1層	ミガキ	撚糸文(L)	IIA	161
〃 2	鉢	DR−61・2層	ミガキ	不明	IE2b	131	〃 9	鉢	DO−61・1層	ミガキ	縄文(LR)	IIB	24	〃 16	鉢	DL−61・1層	ミガキ	不明		213
〃 3	鉢	DR−63・1層	ミガキ	不明	IE2b	130	〃 10	鉢	DR−61・2層	ミガキ	撚糸文(R)	IIA	58	〃 17	鉢	DR−62・1層	ミガキ	不明		214
〃 4	鉢	DR−61・1層	不明	縄文(LR)	IE2b	170	〃 11	鉢	DR−63・2層	ミガキ	縄文(LR)	IIA	116	〃 18	鉢	DR−63・1層	ミガキ	不明		215
〃 5	鉢	DR−63・1層	ミガキ	不明	IE2b	44	〃 12	鉢	DL−62・1層	ミガキ	縄文(LR)	IIA	82							
〃 6	鉢	DR−60・2層	ミガキ	不明	IE2c	183	〃 13	鉢	DR−62・1層	ミガキ	撚糸文(L)	IIA	110							

第13図　縄文土器（5）

第12図15〜17、第13図１〜７は口縁部に文様が施されるものである。これらはその文様が刺突文を中心とするもの、沈線文を中心とするもの、隆線文を中心とするものの三者がある。

第12図15〜17は口縁部に横位の連続刺突文が施されるものである。17はそれが１列に15・16は２列になっており、いずれも体部との境は隆線もしくは沈線で区画されている。第13図１〜５は沈線による文様が施されるものである。このうち２・３は同一個体と考えられるもので、ともにボタン状の突起を有している。文様は沈線文で構成され、突起を中心として口縁部では横方向、体部では下方に文様が展開している。他に口縁端部には連続する刻み目が施され、突起の頂面には渦状の沈線文が施されている。１・４・５は沈線による文様は同様であるが、１では突起が山形を呈するものであり、４・５は平縁のものである。第12図６・７は隆線もしくは隆沈線による文様が描かれるものであるが、小破片のためその構成は不明である。

Ｆ．体部が外傾し、口縁部が「「」状に屈曲するもの（第12図８）

８は体部がかなり外傾し、口縁部が強く内側に屈曲するもので、平坦化した口縁部外面には上方にのびる突起が付く。突起は上部が欠損しているためその形態は明らかでない。体部には沈線による文様が施されている。

以上の土器のほかに文様をもたない土器がある（第13図９〜15）。

いずれも体部から口縁部にかけておおむね外傾するもので、深鉢形土器と考えられる。これらは平縁のものと波状口縁のものとがある。

10〜15は平縁のもので、口縁部が直線的に外傾するもの（10・12〜15）と内弯ぎみになるもの（11）とがある。地文にはＬＲ縄文（11・12）、ＲＬ縄文＋綾絡文（14）、Ｌ撚糸文（13・15）がある。

９は波状口縁をなすもので、波状口縁部はやや内傾している。地文はＬＲ縄文が施されている。

口縁部突起（第13図16〜18）

口縁部突起には山形を呈するものとボタン状を呈するものとがある。

16・18は山形を呈するものである。このうち16は突起を縦位に二分するような隆線文が貼付されるもので、その上下端に盲孔が１個ずつ配されている。また隆線文の左右には貫通孔が１個ずつ穿たれている。18は突起部から口縁部にかけて逆「Ｊ」字状の隆線文が施されるもので、隆線文上には連鎖状の沈線および２個の盲孔が施されており、さらに突起の中心には貫通孔が穿たれている。17はボタン状の突起が付くものである。突起の上端はやや上方につまみ出されており、その部分に連続する刻み目が施されている。突起の直下には馬蹄形をなす隆線文がみられる。

体部資料（14～17図）

これらはいずれも破片であり、土器の形態、文様構成等については不明な点が多い。したがって以下では文様表現技法を中心に述べてゆくことにする。

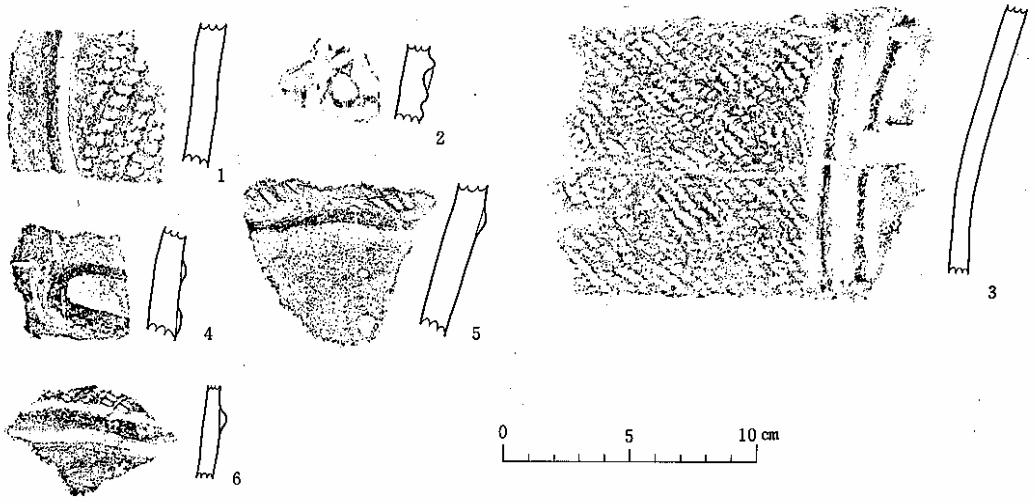
文様表現技法には隆線文、円形貼付文、磨消縄文、沈線文、刺突文、列点文などがあるほか、地文のみのものがある。

第14図１～６は隆線によって文様が描かれるものである。いずれも文様は明らかでないが、１は隆線によって方形に区画される文様をもつものと思われる。５・６は体部に横位の隆線が巡るもので、ともに隆線を境に下部が無文化されている。他に特徴的な技法として、２では隆線上に盲孔および刻み目が施されている。

第15図１～３は円形貼付文が施されるものである。１は隆線や隆沈線が交る部分に円形貼付文が施されるもので、文様は横方向を隆線、縦方向を隆沈線で区画される方形を基調とする。２は磨消縄文帯が交る部分に、３は地文上に円形貼付文が観察されるが、文様は明らかでない。

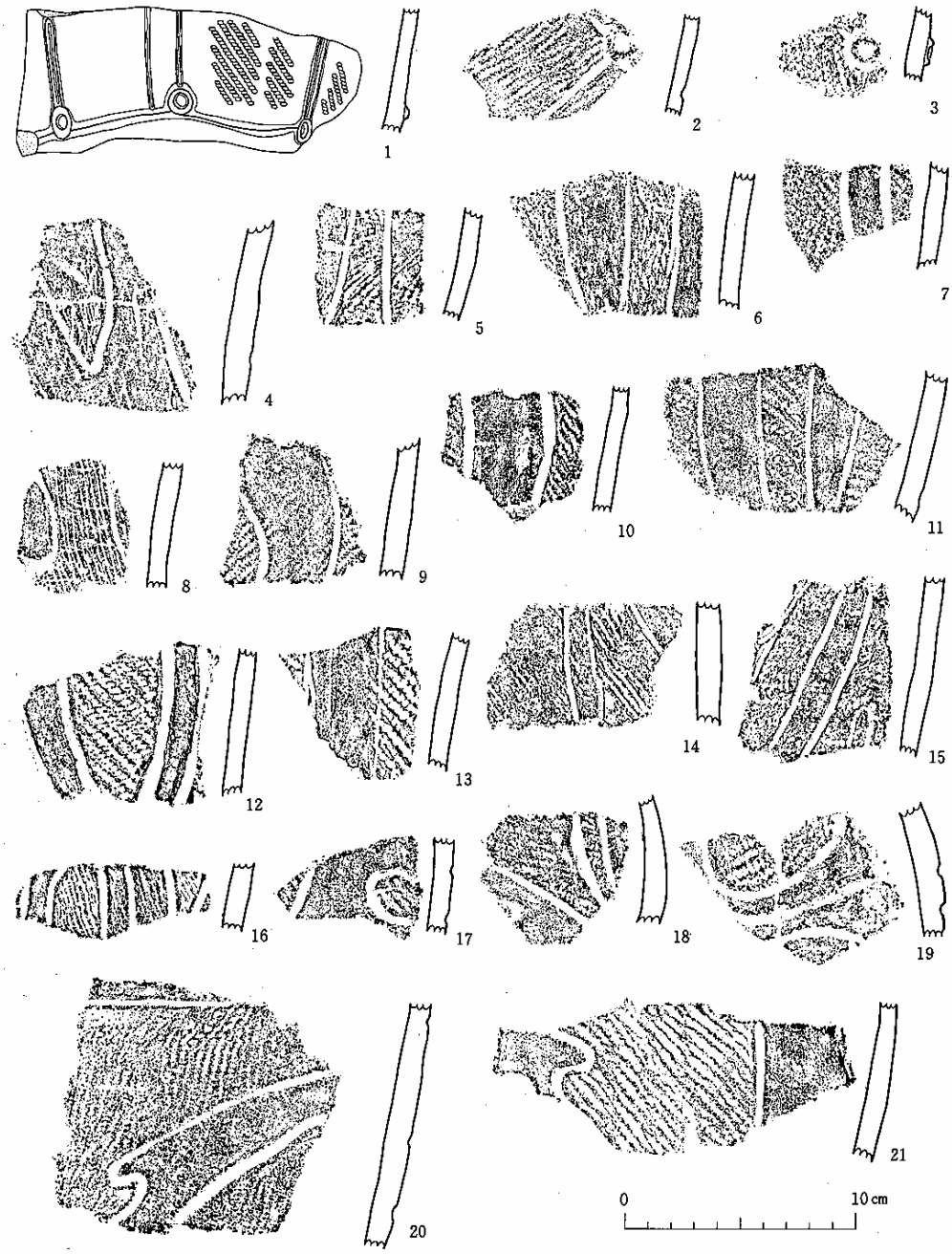
第15図４～21、第16図１～３、第17図１・２は磨消縄文によって文様が描かれるものである。文様は直線的に下方に展開するもの（第15図４～16)、横方向に展開するもの（第16図２・３、第17図２)、方向は明らかでないが強い弧を描くもの（第15図18・19、第17図１）等がある。これらのなかには第17図１・２のように連続する刺突文を伴っているものもある。

第16図10・12・14～23は沈線によって文様が描かれるものである。文様構成は明確でなく、ジグザグ文（10・12・14）や渦巻文（15・16）等がわずかに観察されるのみである。



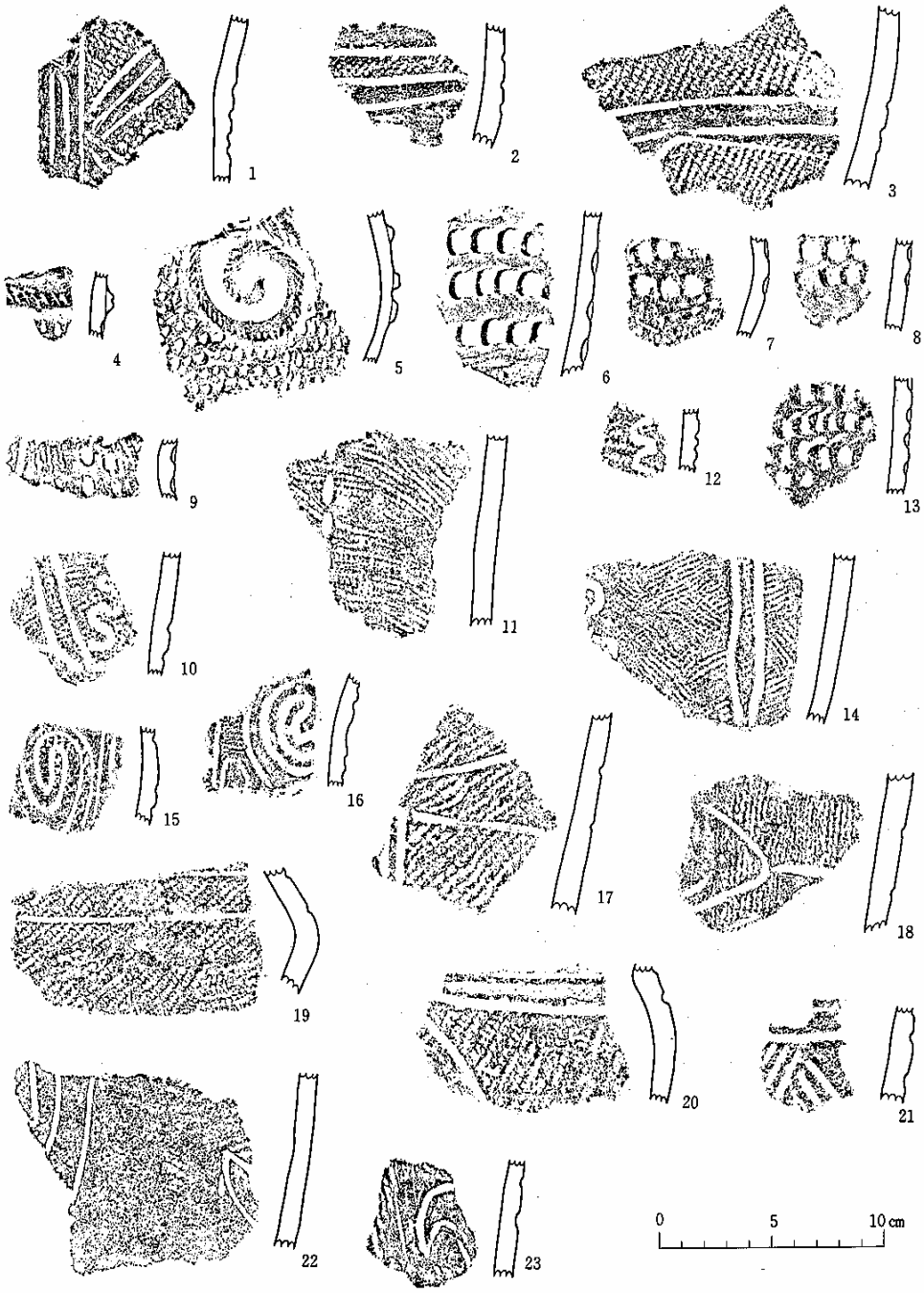
図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号															
							3	鉢	DR-63・2層	ミガキ	縄文(LR)	a	96	6	鉢	DR-61・3層	ミガキ	縄文(RL)	a	177
第14図1	鉢	DR-62・3層	ミガキ	縄文 RLR	a	162	4	鉢	DR-62・3層	ミガキ	不明	a	90							
2	鉢	DR-64・3層	ナデ	縄文(RR)	a	164	5	鉢	DL-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	a	10							

第14図　縄文土器（６）



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																
第15図1	鉢	DR-62・2層	ミガキ	縄文(LR)	b	122	8	鉢	DR-60・2層	ミガキ	撚糸文(R)	c	52	16	鉢	DR-62・3層	ミガキ	撚糸文(R)	c	55
2	鉢	DR-60・2層	ミガキ	縄文(LR)	b	167	9	鉢	DL-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	71	17	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(不明)	c	18
3	鉢	DL-62・1層	ミガキ	縄文(RL)	b	27	10	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	11	18	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	6
4	鉢	DL-61・1層	ミガキ	撚糸文(R)	c	72	11	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	105	19	鉢	DL-62・1層	ミガキ	縄文(RL)	c	7
5	鉢	DL-63・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	70	12	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	4	20	鉢	DR-61・2層	ミガキ	縄文(LR)	c	94
6	鉢	DR-62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	c	50	13	鉢	DR-63・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	106	21	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	22
7	鉢	DR-62・2層	ミガキ	縄文(LR)	c	51	14	鉢	DO-63・1層	ミガキ	撚糸文(L)	c	9							
							15	鉢	DR-62・1層	ミガキ	縄文(不明)	c	95							

第15図　縄文土器（7）



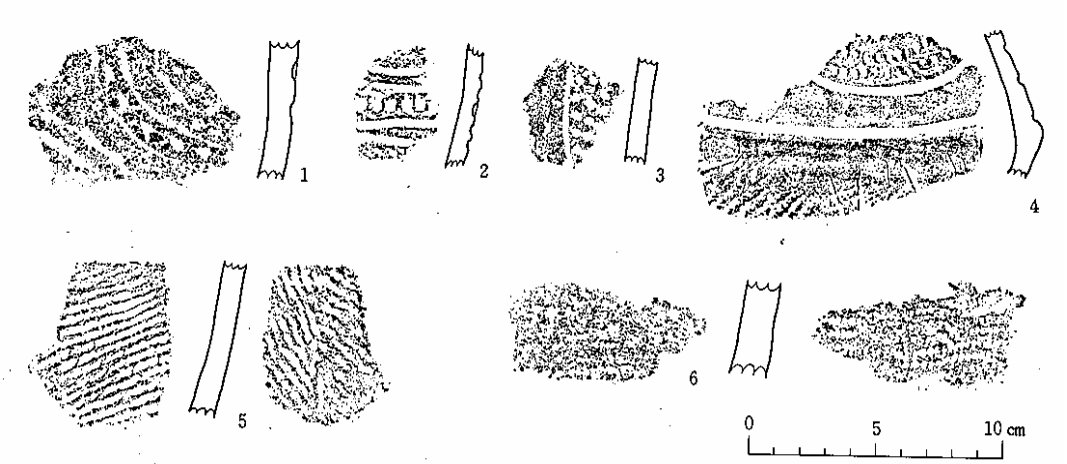
図版番号	器種	地区・層位	内面面	地文	分類記号	登録番号																
第16図1	鉢	DR-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	48	8	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	e	184	16	鉢	DR-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	97
2	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	13	9	鉢	DR-63・1層	ミガキ	撚糸文(L)	f	107	17	鉢	DR-60・2層	ミガキ	縄文(LR)	d	3
3	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	c	1	10	鉢	DR-62・1層	不明	縄文(LR)	d	38	18	鉢	DR-63・1層	不明	撚糸文(R)	d	102
4	鉢	DL-62・1層	ミガキ	不明	e	74	11	鉢	DR-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	f	160	19	鉢	DL-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	83
5	鉢	DL-62・1層	ミガキ	不明	e	75	12	鉢	DR-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	47	20	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	2
6	鉢	DO-63・1層	ミガキ	不明	e	23	13	鉢	DR-63・2層	ミガキ	不明	e	108	21	鉢	DR-60・2層	ミガキ	不明	d	172
7	鉢	DO-62・1層	ミガキ	縄文(RL)	e	32	14	鉢	DR-63・1層	ナデ	撚糸文(R)	d	163	22	鉢	DR-62・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	165
							15	鉢	DO-61・1層	ミガキ	縄文(RL)	d	14	23	鉢	DR-60・1層	ミガキ	縄文(LR)	d	169

第16図　縄文土器（8）

第16図４～８・13、第17図３・４は刺突文を中心とする文様をもつものである。第16図５は器面全体に刺突文が施されるもので、さらに隆線による渦巻文が施されている。この隆線上には連続する刻み目が加えられる。第16図６～８・13は横に連続する鱗状の刺突文が数段にわたって施されている。第17図３・４は沈線によって楕円形に区画されたなかに刺突文が施されるものである。

第16図９・11は縦位の列点文が施されるものである。破片のため文様は明らかでない。

第17図５・６は地文のみのものである。ともに内外両面に施されており、５では撚糸文(Ｒ)、６は縄文（ＬＲ）となっている。



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																		
							3	鉢	DR-62・1層	ミガキ	不　明	e	64	6	鉢	DR-61・1層	縄文(LR	縄文(LR)	g	182
第17図1	鉢	DR-63・2層	不　明	不　明	c	180	4	鉢	DL-61・1層	ミガキ	縄文(LR)	e	78							
2	鉢	DO-63・1層	ミガキ	不　明	c	21	5	鉢	DR-62・1層	縄文(L)	縄文(L)	g	175							

第17図　縄文土器（９）

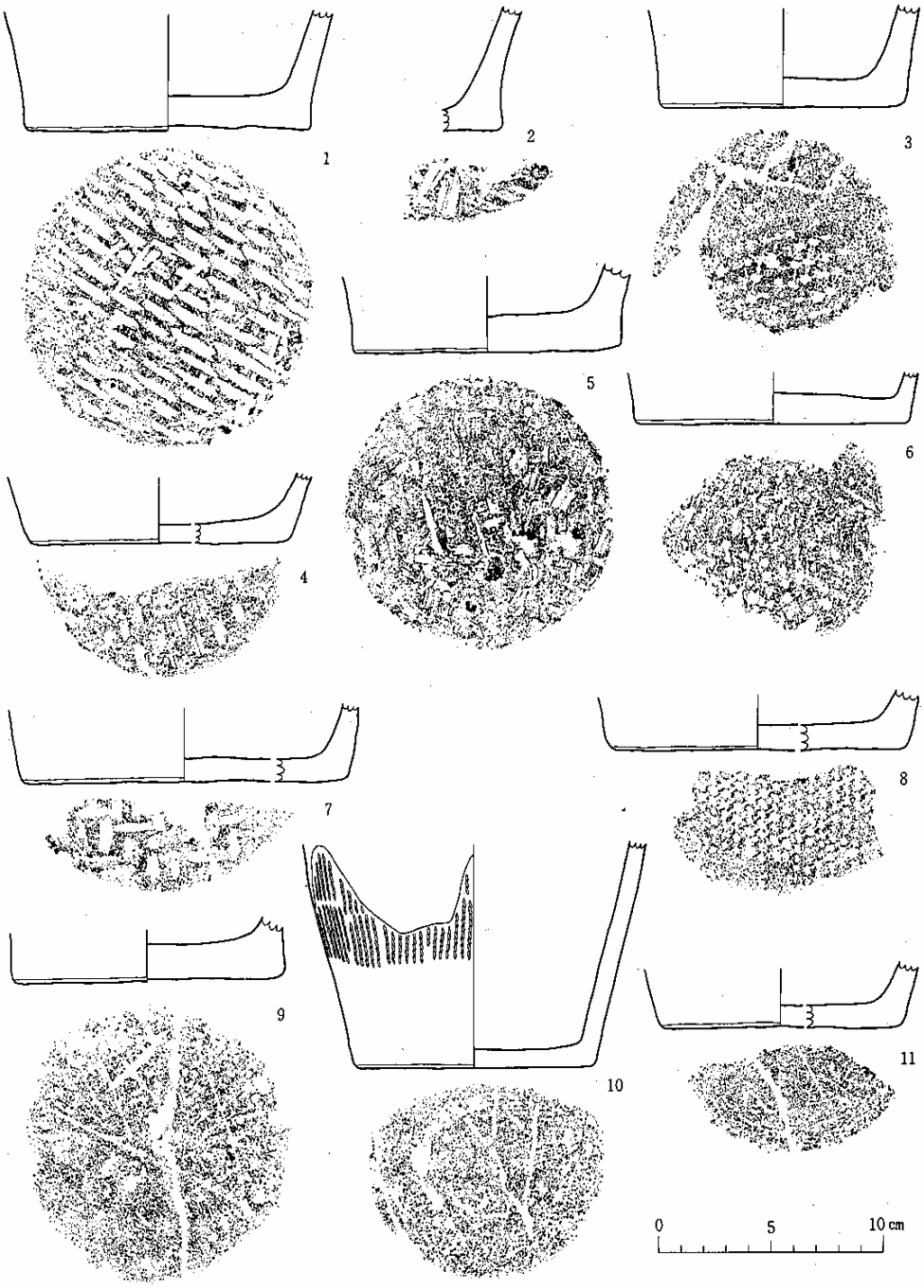
底部資料（第18・19図）

底部はいずれも平底のものである。体部は下端で一旦立ち上ったのち外傾するものと、下端からそのまま外傾するものとがある。底面は網代痕（第18図１～８）、木葉痕（第18図９～11）を残すもののほか、ケズリ（第19図１・２）やミガキ（第19図３・５）の調整が施されているものがある。各々の数量についてはミガキが最も多く、次いで網代痕、ケズリ、木葉痕の順となっている（第３表）。

〈壺形土器〉（第20図１）

口縁部は欠損しているもののほぼ完形に近い土器である。体部は球形を呈し、頸部で外反する。頸部には把手が付くが、欠損しており形態は不明である。

文様は頸部から体部にかけてみられ、強い弧を描く沈線文が施されている。地文は一部にＬ



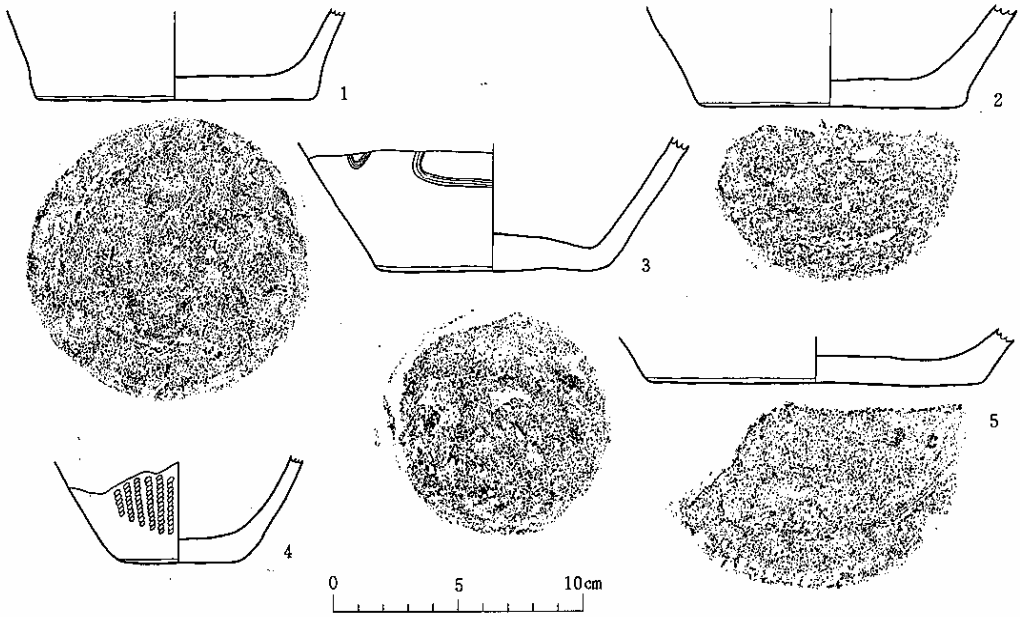
図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																	
第18図1	鉢	DR-63・2層	ミガキ	不明	a	200	4	鉢	DR-61・1層	ナデ	不明	a	189	8	鉢	DR-63・1層	ナデ	不明	a	191
2	鉢	DR-61・1層	ミガキ	不明	a	188	5	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	a	201	9	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	b	199
3	鉢	DR-61・2層	ナデ	不明	a	197	6	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	a	194	10	鉢	DO-62・1層	ミガキ	無文(R)	b	34
							7	鉢	DL-62・1層	ミガキ	不明	a	193	11	鉢	DR-62・2層	ナデ	不明	b	192

第18図　縄文土器（10）

Rの縄文が認められる。

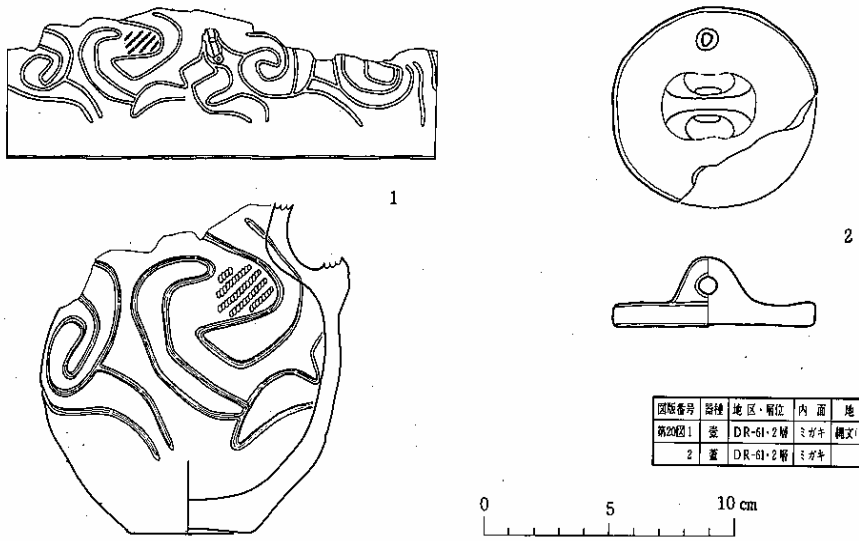
〈蓋〉（第20図２）

径約８㎝の円盤状の蓋である。厚さは0.8～0.9㎝で橋状のつまみを有しており、つまみを中心として両側に貫通孔が１個ずつ穿たれている。



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	分類記号	登録番号																
第19図1	鉢	DR-62・2層	ナデ	不明	c	198	2	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	c	196	4	鉢	DR-63・1層	ナデ	縄文(RL)		190
							3	鉢	DR-62・2層	ミガキ	不明	d	202	5	鉢	DR-61・2層	ナデ	不明	d	195

第19図　縄文土器（11）

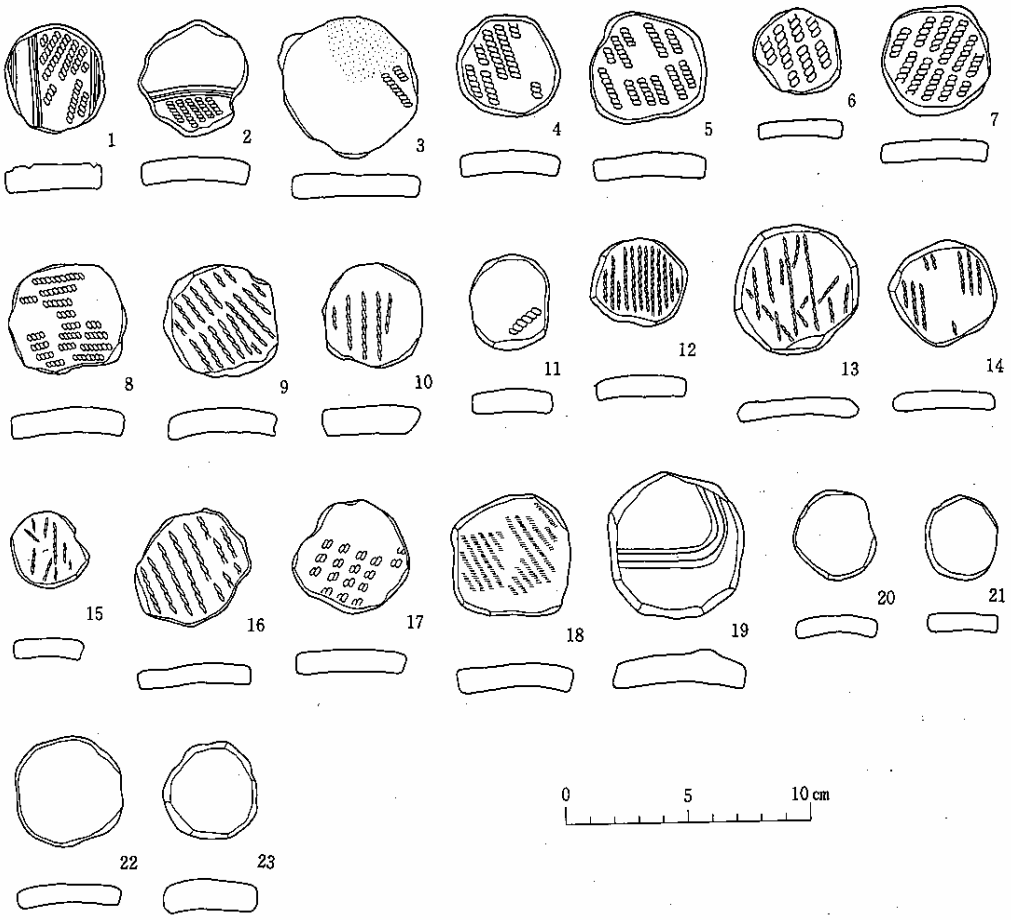


図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	登録番号
第20図1	壺	DR-61・2層	ミガキ	縄文(LR)	210
2	蓋	DR-61・2層	ミガキ		133

第20図　縄文土器（12）

(2) 円盤状土製品（第21図１～23）

円盤状土製品は23点ある。いずれも土器の体部破片を二次加工したもので、平面形は円形や不整円形を呈している。大きさは最大のもので径約６㎝、最小のもので径約３㎝である。調整は13・19などで敲打痕が観察されるが、磨滅のため不明なものが多い。表面にはＬＲの縄文(３～５)、ＲＬの縄文（６～８・11)、ＲＬＲの縄文（17)、Ｌの縄文（18)、Ｒの撚糸文（９・10・12～16）の地文のほか沈線で区画された磨消縄文（１・２）や隆線文（14）などがみられる。



図版番号	器種	地区・層位	内面	地文	登録番号	第21図8	円盤状土製品	DL−61・2層	ミガキ	縄文(RL)	134	第21図16	円盤状土製品	DR−61・2層	ミガキ	撚糸文(R)	145
第21図1	円盤状土製品	DR−61・1層	ミガキ	縄文(LR)	140	〃 9	〃	DR−62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	156	〃 17	〃	DR−61・2層	ミガキ	縄文(RLR)	155
〃 2	〃	DL−61・2層	ミガキ	縄文(LR)	141	〃 10	〃	DR−63・1層	ミガキ	撚糸文(R)	153	〃 18	〃	DL−62・1層	ミガキ	縄文(L)	142
〃 3	〃	DO−61・1層	ミガキ	縄文(LR)	152	〃 11	〃	DR−62・2層	ミガキ	縄文(RL)	135	〃 19	〃	DR−61・1層	ミガキ	不明	151
〃 4	〃	DR−62・2層	ミガキ	縄文(LR)	138	〃 12	〃	DR−62・1層	ミガキ	撚糸文(R)	144	〃 20	〃	DR−63・1層	ミガキ	不明	150
〃 5	〃	DK−62・1層	ミガキ	縄文(LR)	139	〃 13	〃	DR−62・2層	ミガキ	撚糸文(R)	146	〃 21	〃	DL−61・1層	ミガキ	不明	149
〃 6	〃	DL−62・1層	不明	縄文(RL)	137	〃 14	〃	DR−62・2層	ミガキ	撚糸文(R)	143	〃 22	〃	DR−62・1層	ミガキ	不明	147
〃 7	〃	DR−60・1層	ミガキ	縄文(RL)	136	〃 15	〃	DL−62 1層	ミガキ	撚糸文(R)	154	〃 23	〃	DL−61・2層	ミガキ	不明	148

第21図　円盤状土製品

(3) 石器

石器には石鏃、石錐、石匙、不定形石器があり、いずれも剥片を素材とするものである。

〈石鏃〉

石鏃は11点出土している。いずれも無茎であるが、基部形態により凹基、平基のものに二分される。

○凹基のもの（第22図１～６）１・２はともに基部の抉りが深く、全体に薄手である。両面とも入念な二次加工が施されている。２は基部の片方を欠き、両面に自然面の一部を残している。３～６の基部の抉りは１・２より浅い。３の二次加工は全体に粗雑であり、パティナの相違も認められる。４は大形のもので、二次加工が施されているが、両面の一部に素材の面を残している。５・６はともに細長い。６は基部が厚く先端部が急角度に形成されており、石錐の可能性もある。

○平基のもの（第22図７～11）　７は比較的大形であり、先端部側縁はややふくらみ、粗い二次加工が施されている。８・９はともに厚手で入念な二次加工が流されている。８の先端部側縁は若干彎曲する。先端部断面は菱形を呈し、石錐として使用された可能性もある。９は先端部を欠いているが、８とほぼ同形と想定される。10・11は基部が若干ふくらみをもっている。

〈石錐〉

石錐（第22図12・13）は２点出土している。12は両側縁がわずかに彎曲するが、ほゞ逆三角形を呈する。ｂ面に打面、自然面を残し、先端部の作り出しは雑である。13は菱形を呈し、基部には素材面を大きく残している。先端部は細く短い。

〈石匙〉

石匙（第22図14）は１点出土している。縦長の剥片を素材とし、素材の打面側部につまみ部がつくられている。刃部加工はａ面にのみなされている。欠損後、欠損面を打面に更に剥離を加えている。

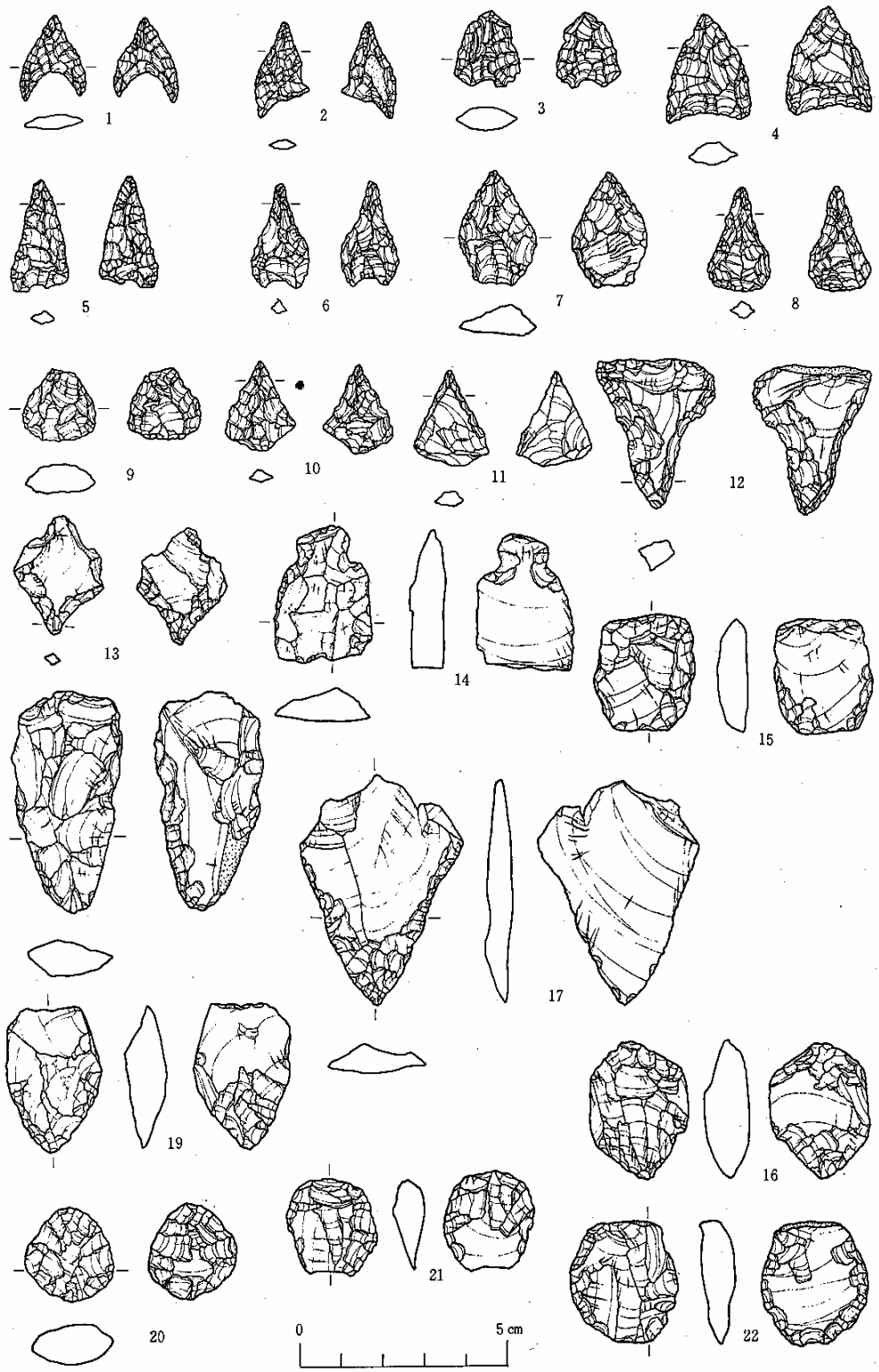
〈不定形石器〉

不定形石器は29点ある。形態・その他により次のように細分される。

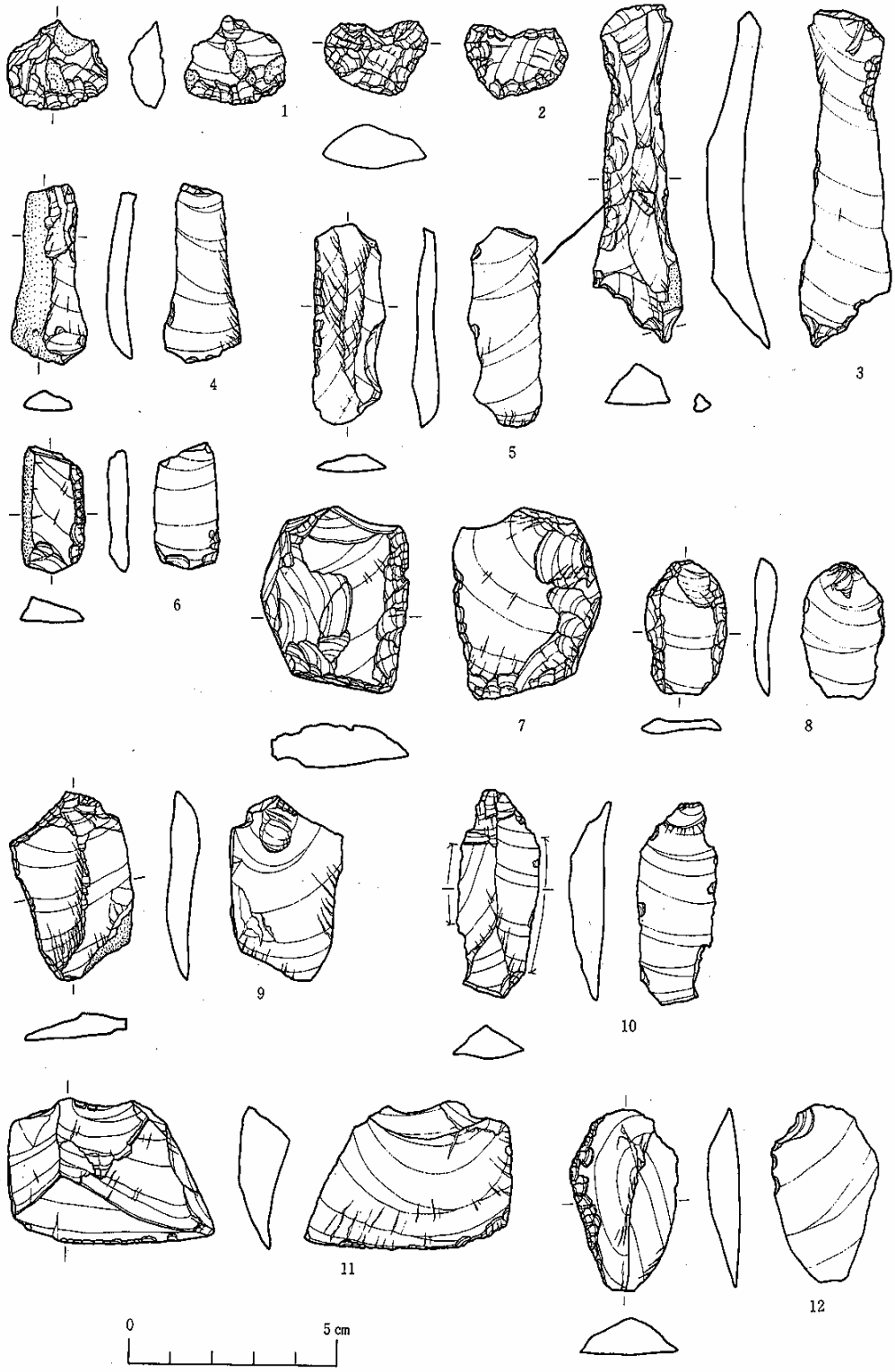
○方形に近いもの（第22図15・16）　15は上下・左右に、16は上下の相対する辺にそれぞれ階段状剥離が認められ、ともに断面は凸レンズ状を呈する。このような特徴から、これらはピエス・エスキーユと呼ばれている石器（岡村：1976）に近似したものと考えられる。

○三角形に近いもの（第22図17～19）　17はａ面の両側縁に入念な二次加工が施されている。18のａ面に粗い剥離による二次加工が、ｂ面には入念な二次加工がそれぞれ施され、一部自然面を残している。19は両面とも主に先端部に加工が施されるが、素材の面を大きく残している。

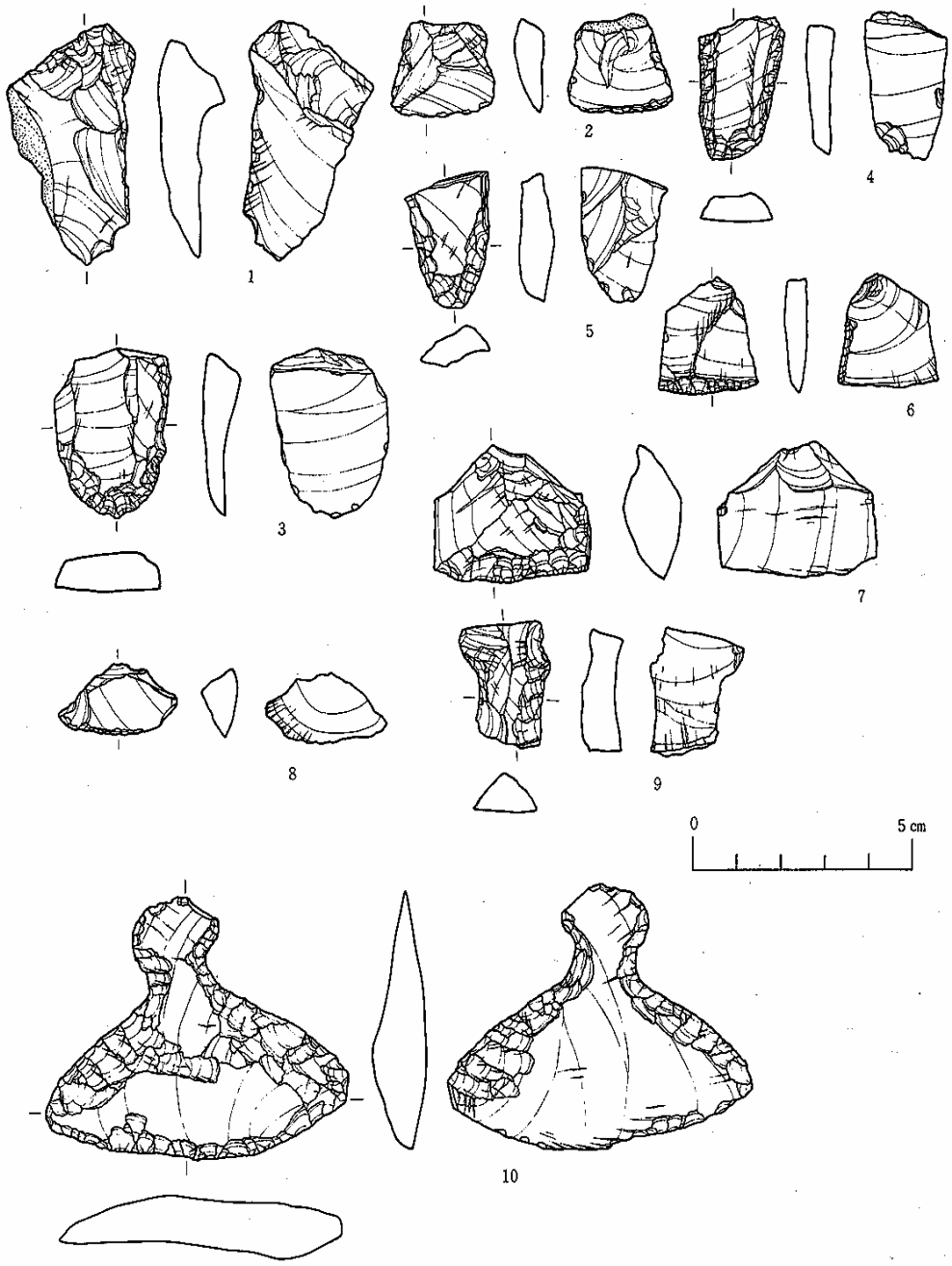
○円形に近いもの（第22図20～22、第23図１・２）第22図20は両面全体に入念な二次加工が施



第22図　石 器（1）



第23図　石 器（2）



※各石器とも左側をａ面、
右側をｂ面とする。

第24図　石 器（3）

され、ほゞ円形を呈する。第22図21・22、第23図１、２は楕円を呈し、周縁には丁寧な二次加工が施されるが、一部に自然面や素材の面を残している。21は一部を欠いており、23図2の両面には火熱によるハジケが認められる。

〇素材の１～２辺に二次加工を施しているもの。これらは、更に、素材の形を大きく残しているもの（第23図３～第24図２）と素材の一部に二次加工が施されているもの（第24図３～９）に分けられる。前者のうち、第23図３～10は縦長の剥片を素材としている。第23図７を除いてはいずれも片面加工である。第23図５の刃部の摩耗が著しい。先端部が両面から粗い加工によって作り出され、石錐として使用された可能性もある。第23図８・９は打面、バルバスカーが認められる。第23図10は微細な剥離が認められるが、二次加工というより使用痕の可能性も考えられる。第23図11～第24図２は横長の剥片を素材とし先端部に二次加工を施し、刃部を形成している。第23図11と第24図２にはバルバスカーが認められる。第24図１は自然面を残している。後者のうち、第24図３、５は縦長の剥片を素材とする片面加工であるが、いずれも摩滅がみられる。第24図３は打面部が切断され、先端部の縁辺に二次加工がなされている。第24図６～９は素材の一部が切断された可能性が強く、先端部の縁辺にそれぞれ二次加工が施されている。第24図９は縦長の剥片を素材とし、丁寧な二次加工は片面のみに施されている。下半部欠損している。

〇警察用地出土石器

剥片石器

石匙（第24図10）は横型で、素材剥片の側縁に近い部分につまみ部が作られている。刃部は３つの縁辺で構成され、その主要刃部とつまみ部軸がほぼ直交する。つまみ部に近い縁辺には大きな調整剥離が、主要刃部には入念な二次加工がそれぞれ施されている。ｂ面には打面及びバルバスカーが認められる。

第2表　石器計測表

図面番号	種　別	出土地点	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	登録番号
第22図1	石　鏃	× × ×	1.94	1.58	0 0.34	0.18	301
2	〃	DR 60 2	2.25	1.3	0 0.34	0.27	302
3	〃	DF 61 3	1.59	1.88	0 0.48	0. 6	303
4	〃	DR 62 2	2.5	2.07	0 0.69	2.32	304
5	〃	DO 61 1	2.56	1.4	0 0.46	0. 6	305
6	〃	DL 63 1	2.4	1.4	0 0.74	1.52	306
7	〃	DL 63 1	2.62	1.89	0 0.63	2.2	307
8	〃	DO 62 1	2.25	1.48	0 0.79	1.7	308
9	〃	DR 61 2	(1.69)	1.75	0 0.67	1.4	309
10	〃	DO 63 1	2.1	1.65	0 0.92	1.9	310
11	〃	DL 61 1	2.24	1.83	0 0.82	1.8	311
12	石　錐	DR 62 1	3.6	2.84	0 0.9	7.15	312
13	〃	DO 63 1	2.7	2.19	0 0.74	3.16	313
14	石　匙	DR 63 1	(3.15)	2.35	0 0.85	5.05	314
15	不定形石器	DR 61 2	5.69	2.35	0 0.8	5.65	315
16	〃	DO 61 1	5.17	2. 4	0 1.08	8.15	316
17	〃	DR 61 1	3.18	3.88	1 0.7	9.3	317
18	〃	DR 62 1	2.13	2.7	0 1.55	15.0	318
19	〃	DR 62 1	3.4	2.29	1 1.0	6.62	319
20	〃	DO 62 1	2.2	2.0	1 0.95	3.6	320
21	〃	DR 61 2	(2.34)	2.1	0 0.71	2.85	321
22	〃	DR 63 1	2.72	2.55	0 0.85	5.2	322
第23図1	〃	DL 63 1	2.5	2.01	0 0.74	2.75	323
2	〃	DR 62 1	1.7	2.44	0 0.87	2.05	324
3	〃	DR 64 2	7.8	2.12	0 0.95	14.4	325
4	〃	DR 62 2	4.1	1.8	0 0.59	2.72	326
5	〃	DF 62 1	4.58	1.73	0 0.6	4.0	327
6	〃	DO 61 1	(2.9)	1.52	0 0.62	2.63	328
7	〃	DO 61 1	4.62	3.89	0 0.98	17.1	329
8	〃	DF 62 1	4.3	2.67	0 6.64	6.1	330
9	〃	DR 62 1	3.2	5.02	6 1.5	13.6	331
10	〃	DR 62 2	(3.1)	2.02	1 0.5	2.2	332
11	〃	DL 61 2	4.79	1.89	0 0.7	5.3	333
12	〃	DR 62 2	4.15	2.59	0 0.77	6.45	334
第24図1	〃	DR 62 1	3.38	4.91	0 1.19	15.5	335
2	〃	DR 61 2	2.02	2.34	1 0.84	2.7	336
3	〃	DL 61 2	3.63	2.62	0 0.9	8.85	337
4	〃	DL 61 1	3.9	1.94	0 0.69	4.3	338
5	〃	DO 61 1	2.9	1.94	0 0.8	3.8	339
6	〃	DR 61 1	2.48	2.28	1 5.9	2.4	340
7	〃	DR 61 2	2.97	3.6	0 1.39	11.87	341
8	〃	DR 65 2－3	1.51	2.7	0 0.77	1.5	342
9	〃	DL 63 1	(2.67)	2.15	0 1.0	4.45	343
第24図10	石　匙	警察地区	5.54	6.9	1.22	30.9	344

第 3 表

	綱代	木葉	ケズリ	ミガキ	不明	計
Ⅰ 層	21	2	13	39	29	104
Ⅱ 層	10	6	6	18	18	58
Ⅲ 層	2	1		1	1	5
計	33	9	19	58	48	167

Ⅳ 考　　察

１．土器の分類

本遺跡出土の土器はその大半が鉢形土器と考えられるもので、他に壺形土器、蓋がそれぞれ１点ある。

〈鉢形土器〉

口縁部資料

これらは文様の有無から、文様が施されるもの（Ⅰ）と文様が施されないもの（Ⅱ）に大きく分類することができる。

Ⅰ類　文様が施されるもの

Ⅰ類はその形態からＡ～Ｆの６類に分類することができる。

○ＩＡ類　体部から口縁部にかけておおむね外傾するもので、これは細部の形態から口縁部がそのまま外傾するもの(1)と外反ぎみになるもの(2)とに分類することができ、さらに１は文様構成からａ・ｂの二者に分類される。

ＩＡＩａ類　口縁部がそのまま外傾するもので、隆線もしくは沈線によって方形に画される文様が描かれるものである。これらは文様がいずれも横に展開するものと思われるが、一方でその文様を遮断するような縦位の隆線を有するものがあり、文様上細分が可能である（イ・ロ)。

ＩＡＩｂ類　口縁部がそのまま外傾するもので、斜行もしくは下降する沈線等によって文様が描かれるものである。これらは口縁部に無文帯を有するもの(ｲ)と有しないもの(ﾛ)とがあり、前者はさらに文様を遮断するような連鎖状の隆線を有するもの(ⅰ)と有しないもの(ⅱ)とに細分される。

ＩＡ２類　口縁部が外反ぎみになるものである。口縁部はいずれも無文化されており、なかに棒状貼付文を有するものが多くみられる。破片のため体部文様は明らかでない。

○ＩＢ類　頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が外傾するもので、これはさらに口縁部内面に段を有するもの(1)と段を有しないもの(2)とに分類することができる。

ＩＢ１類　頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が外傾するもので、口縁部内面に段を有している。これらはいずれも口縁部が無文化されるものであるが、口縁端部に沈線もしくは隆沈線を有するもの（ａ）と有しないもの（ｂ）に細分される。ともに口縁端部に突起部などに盲孔や貫通孔が施されている。

ＩＢ２類　頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が外傾するもので、口縁部内面には段がみられない。これらは口縁部に無文帯を有するもの（ａ）と有しないもの（ｂ）とに細分される。このうちｂは口縁部から頸部にかけて沈線による文様が描かれている。

土器の分類（鉢形土器）

Ⅰ．文様を有するもの

A．体部から口縁部にかけて外傾
- 1．口縁部が外傾
  - a．方形に区画される文様が横に展開
    - イ．文様がそのまま横方向に展開
    - ロ．文様を遮断する縦位の隆線を有する
  - b．下降もしくは斜行する流線的な沈線文
    - イ．口縁部無文帯を有する
      - Ⅰ．文様を遮断する縦位の隆線を有する
      - Ⅱ．〃　有しない
    - ロ．〃　有しない
- 2．口縁部が外反

B．頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部が外反
- 1．口縁部内面に段を有する
  - a．口縁端部に沈線もしくは隆沈線を有する
  - b．〃　有しない
- 2．〃　有しない
  - a．口縁部無文帯を有する
  - b．〃　有しない

C．体部に強いふくらみをもち口縁部が外反

D．体部上位が肩張り口縁部が外反

E．体部上位から口縁部にかけて内弯
- 1．口縁部無文帯を有する
- 2．〃　有しない
  - a．刺突文
  - b．沈線文
  - c．隆線文

F．体部が外傾し、口縁部が内側に屈曲

Ⅱ．文様をもたないもの

A．平　縁

B．波状口縁

○ＩＣ類　体部が強くふくらみ、頸部でしまり、口縁部が外反するもので、頸部には把手が付く。これは１点のみ出土している。文様は口縁部に無文帯を有し、体部は一面に刺突が施され、把手下の部分には渦状の隆線文が貼付されている。

○ＩＤ類　体部上位が肩張り、頸部でしまり、口縁部が外反するもので、１点のみ出土している。文様は口縁部が無文帯となっており、肩部には鱗状の連続刺突文が横位に施されている。

○ＩＥ類　口縁部が内弯するもので、これは口縁部に無文帯を有するもの(1)と有しないものとに分類することができる。さらに２は口縁部文様からａ・ｂ・ｃの３者に細分される。

ＩＥ１類　口縁部が内弯し、口縁部に無文帯を有するものである。いずれも隆線もしくは隆沈線によって体部と画されており、隆線上に連続する刺突文が施されるものもある。

ＩＥ２ａ類　口縁部が内弯するもので、口縁部に横位の連続刺突文が施されるものである。いずれも体部との境は隆線もしくは沈線で画されている。

ＩＥ２ｂ類　口縁部が内弯するもので、口縁部に沈線文が施されるものである。

ＩＥ２ｃ類　口縁部が内弯するもので、口縁部に隆線文が施されるものである。

○ＩＦ類　体部が外傾し、口縁部が強く内側に屈曲するもので、１点のみ出土している。口縁部突起を有するもので、体部には沈線文が施されている。

Ⅱ類　文様が施されないもの

Ⅱ類は文様が施されないもので、体部から口縁部にかけておおむね外傾する。これらは口縁

部の形態からＡ・Ｂの２者に分類される。
○ⅡＡ類　口縁部が平縁のものである。多くは直線的に外傾するが、内弯気味になるものもみられる。
○ⅡＢ類　口縁部が波状をなすものである。波状部はやや内傾する。

口縁部突起

山形を呈するものとボタン状を呈するものとがある。前者は突起部に隆線文や盲孔、貫通孔が施され、後者は連続する刻み目が施されるのが特徴である。

体部資料

これらは文様表現技法からａ～ｇの７類に分類することができる。
○ａ類　隆線によって文様が描かれるものである。口縁部資料ではＩＡ１ａ類にみられる文様になるものと思われる。
○ｂ類　円形貼付文が施されるものである。
○ｃ類　磨消縄文によって文様が描かれるものである。文様は下方や横方向に展開しており、前者が多くを占める。
○ｄ類　沈線によって文様が描かれるものである。ジグザグ文や渦巻文などがみられる。
○ｅ類　刺突文が施されるものである。なかに鱗状の連続刺突文が施されるのがある。
○ｆ類　縦位の列点文が施されるものである。
○ｇ類　地文のみのものである。内面にも縄文が施されている。

底部資料

いずれも平底のものである。底面の痕跡として網代痕（ａ）、木葉痕（ｂ）、ケズリ（ｃ）、ミガキ（ｄ）がある。

〈壺形土器〉

体部が球形で頸部から口縁部にかけて外反する。頸部には把手が付く。体部から頸にかけて強い弧を描く沈線文が施されている。

〈蓋〉

円盤状の蓋である。橋状のつまみを有しておりつまみを中心に左右に貫通孔が穿たれている。

２．土器の年代と問題点

縄文土器はその器形、文様から前項のように分類された。各類の出土状況を示したのが第４表である。これらの土器は出土状況や文様上の特徴から大きく二つの群に分けることができる。以下ではこの２群についての年代および問題点を述べることにする。

第１群土器

第III層において主体をなす土器群で、鉢形土器の口縁部ＩＡ１ａ（イ・ロ）類および体部ａ類がこれに含まれる。これらは体部から口縁部にかけて外傾する器形で、隆線もしくは沈線によって方形に区画された文様が横方向に展開している。分類では縦位の隆線の有無から２類に細分が可能である（イ・ロ)。このような特徴をもつものは菅生田遺跡（丹羽他：1973)、中沢遺跡（後藤他：1972)、青島貝塚（後藤他：1975）等に類例がみられ、縄文時代中期後葉の大木10式に位置づけられている。

大木10式土器については近年その出土例が増加するなかで、いくつかの段階に分けて類型化する研究が試みられている（丹羽：1981)。これに本群の土器を比較した場合、わずかに方形区画の文様という点において最も新しい段階とされる土器群の一部に類似性がうかがわれるが、かなり相違点も多くこれらに比定することはやや無理がある。したがって本群に類似したものでまとまった資料の報告がまだなされていない現時点では第１群土器について大木10式でも新しい時期に属する可能性を指摘するにとどめ、その明確な位置づけについては今後の類例の増加を待って検討することにしたい。

第２群土器

口縁部Ｉ類のなかで第１群土器を除いたもの、口縁部突起、体部ｂ～ｆ類、壺形土器、蓋がこれに属する。ただし口縁部ＩＡ１類とした体部文様の不明なものは含まない。これらは本遺跡において中心的に出土した土器群で、第Ｉ、II層から主に出土するが、第III層からも若干出土している。その年代は形態および文様の特徴から縄文時代後期前葉の南境式に比定されるものである（宮城県：1957)。

本群は鉢形土器が主体を占めており、他に壺形土器、蓋がそれぞれ１点ある。このうち鉢形土器については口縁部資料を対象として器形的にＩＡ～ＩＦの６類に分類され、さらにＩＡ、ＩＢ、ＩＥ類では文様からいくつかに細分された。これを概括的にまとめると、器形では体部から口縁部にかけて単純に外傾するもの（ＩＡ)、頸部で屈曲もしくは弯曲し口縁部が外反するもの（ＩＢ、ＩＣ、ＩＤ)、体部が外傾し口縁部が内弯するもの（ＩＥ、ＩＦ）に大きく分けることができ、文様では流線的な沈線文が主体となっている他、文様表現技法として磨消縄文、棒状貼付文、刺突文、貫通孔、盲孔等が認められる。また壺形土器は球形を呈し把手が付くもので、文様として強い弧を描く流線的な沈線文が施される。蓋は橋状のつまみを有する円盤状

のものである。以上のような土器のあり方は二屋敷遺跡（林・藤沼他：1971)、青島貝塚（加藤・後藤：1975)、金取遺跡（小野寺：1980)、六反田遺跡（田中：1981）等に類例がみられ、いわゆる縄文時代後期前葉とされる土器群と大筋において一致する。

縄文時代後期前葉の土器については南境式とされる一方で袖窪式（林：1965）や宮戸１ｂ式（後藤：19　・1970）などの諸型式が新たに設定され、細分の可能性が指摘されている。こうしたなかで本群はどのような位置づけがなされるのか、以下若干の検討を行ってみたい。

まず第Ⅰ・Ⅱ層出土の土器についてみると、第４表に示すとおりＩＡ１ｂイ**i**類を除く各類が出土している。これらは第１群土器が混入しているものの、後期前葉を降る遺物は全く出土しておらず一応後期前葉というまとまった時期のなかにおさまるものと考えることができる。また第Ⅲ層出土の土器についてはＩＡ１bイ**i**類とＩＡ２類があり、このうちＩＡ１bイ**i**類は後期初頭とされる袖窪式に類似している。このようにみてくると後期初頭に限定しうるＩＡ１bイ**i**類のみに注目すれば本群は層位的に二分されそうである。しかしながら第Ⅰ・Ⅱ層出土の土器を内容的にみると、例えばＩＤ類のように六反田遺跡には出土例があるが、金取遺跡や青島貝塚では出土していないものや、ＩＣ類のようにまだ他に類例のないもの等があることから、それ自体において上限や下限等にみる存在期間の問題や地域性の問題を有している。これらについては本遺跡の資料では明らかにできなかったが、いずれ類例の蓄積を待って検討しなければならない問題である。

以上のことからここでは本群を大きく後期前葉の土器として把握し、一部にＩＡ１bイ**i**類のように後期初頭まで遡る可能性のある土器も存在することを確認するにとどめるのが妥当と考えられる。

上記の２群の土器ほかに時期を限定できないものとしてＩＡ１類・ⅡＡ類・ⅡＢ類がある。このうちＩＡ１類は文様が明らかでないもの、ⅡＡ類、ⅡＢ類は文様が施されないものである。これらは本遺跡の土器の有り方からいずれかの群に伴うものと考えられる。

口縁部

	1群	2群																		
	ⅠA1aイ	ⅠA1aロ	ⅠA1bイⅠ	ⅠA1bイⅡ	ⅠA1bロ	ⅠA2	ⅠB1a	ⅠB1b	ⅠB2a	ⅠB2b	ⅠC	ⅠD	ⅠE1	ⅠE2a	ⅠE2b	ⅠE2c	ⅠF	ⅠA1	ⅡA	ⅡB
Ⅰ層	8			5	2	2	2	2	1	1	1	1		1	4			5	4	1
Ⅱ層	2			2	2	2	2		1				3	1	1	2	1	5	2	
Ⅲ層	5	1	1			1								1						
不明	1																			

体部

	1群	2群					
	a	b	c	d	e	f	g
Ⅰ層	1	1	18	10	6	2	2
Ⅱ層	1	2	5	2	2		
Ⅲ層	4						

底部

	a	b	c	d
Ⅰ層	4	1		
Ⅱ層	4	2	2	2

Ⅴ．まとめ

本遺跡は宮城町下愛子にある広瀬川右岸の河岸段丘上に立地する。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡１軒、土壙２基、埋設土器遺構７基のほか奈良～平安時代の竪穴住居跡１軒が発見され、縄文土器、円盤状土製品、石器が出土した。各遺構のうち精査の対象としたのは第１～３の埋設土器遺構３基である。

埋設土器遺構は一部に掘り方の痕跡が認められるものの、いずれも明確な形での掘り方は確認されていない。また埋設土器は第１や第３のように底部が取り除かれたり、穿孔されたりするなど二次加工の痕跡が観察される。これらの年代は明確ではないが、本遺跡の土器のあり方から縄文時代中期後葉にかけての頃のものと考えられる。

出土遺物のなかで縄文土器は二つの群に分かれ、このうち第１群土器は縄文時代中期後葉大木10式に、第２群土器は後期前葉南境式にそれぞれ比定される。他に円盤状土製品、石器が出土しており、これらの年代については限定できないが、第１群土器もしくは第２群土器のいずれかに伴うものと考えられる。

本遺跡の範囲については縄文時代の遺構を中心としてみた場合、第４図に示したように発掘区中央を東西に走る沢状地形を南の境とし、北は段丘崖によって画された比較的狭い地域にまとめられるようである。このような有り方は一般に広い範囲を有するとみられる同時代の遺跡と比較した場合やや対象的な例といえるもので、今後集落跡の形態を考える上で注目される点である。

引用・参考文献

伊東信雄（1957）:「古代史」宮城県史第１巻

大内　定（1973）:「広瀬川の河岸段丘の変位」東北地理25

小野寺祥一郎（1980）:「金取遺跡」　宮城県文化財調査報告書第70集

加藤孝・後藤勝彦（1975）:「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書」南方町史資料編

黒川利司（1981）:「東北自動車道遺跡調査報告書Ｖ－東足立遺跡」　宮城県文化財調査報告書第81集

後藤勝彦・斎藤良治（1967）:「西ノ浜貝塚緊急調査概報」　宮城県文化財調査報告書第13集

後藤勝彦（1957）:「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」　塩釜市教育委員会教育論文第２集

後藤勝彦（1962）:「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」　考古学雑誌第48巻第１号

後藤勝彦（1974）:「縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味」　東北の考古・歴史論集

後藤勝彦他（1968）:「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報－南境貝塚」　宮城県文化財調査報告書第15集

後藤勝彦他（1972）:「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発掘調査報告」　川崎町史資料編

佐々木慶一（1957）:「中世史」　宮城県史第１巻

志間泰治（1973）:「宮城県想海塚発掘報告」　宮城町文化財調査報告書第１集

芹沢長介（1979）:「聖山」　東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊２

岡村道雄（1976）:「ピエス・エスキーユについて」　東北考古学の諸問題

田山利三郎（1933）:「仙台付近の河岸段丘」　斎藤報恩会学術報告 *No.*17

田中則和（1981）:「六反田遺跡」　仙台市文化財調査報告書第34集

中村嘉男（1967）:「愛子盆地における段丘面解析の様式」　東北地理19

丹羽　茂（1981）:「大木式土器」　縄文文化の研究４

丹羽茂・三浦圭介・加藤貞子（1973）:「菅生田遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第29集

原河英二（1981）:「御殿館跡」　宮城町文化財調査報告書第３集

林　謙作（1965）:「縄文文化の発展と地域性－東北」　日本の考古学Ⅱ

林謙作・藤沼邦彦他（1971）:「東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）一二屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集

宮城県（1981）:「宮城県史－史料集Ｖ」第34巻

宮城県教育委員会（1981）:「遺跡地名表」　宮城県文化財調査報告書第73集

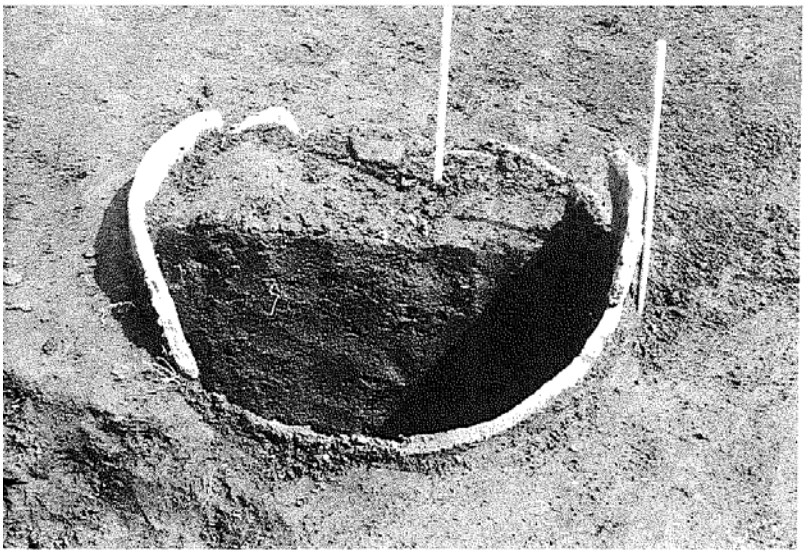
宮城町（1969）:「宮城町誌－本編」

安田喜憲（1973）:「阿武隈川流域における縄文時代の自然環境の変遷と人類」東北地理25

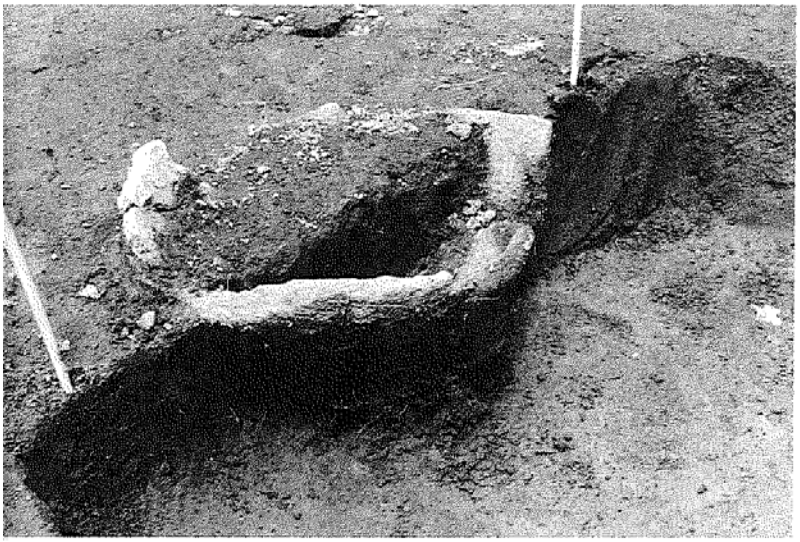
遊佐五郎（1980）:「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－権現森遺跡」　宮城県文化財調査報告書第52集

山内清男（1937）:「縄文土器型式の細別と大別」　先史考古学　第１巻１号

図版１　遺跡全景（上：南より、下：東より）



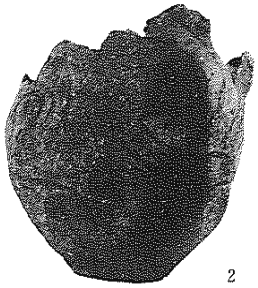
1．第１埋設土器遺構

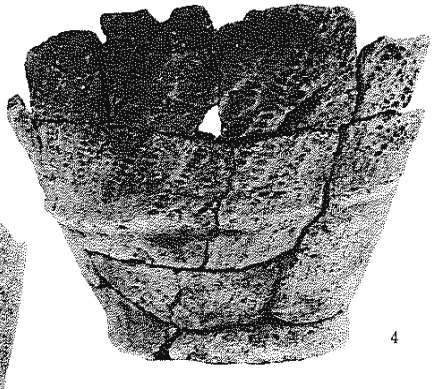


2．第２埋設土器遺構

3．第３埋設土器遺構

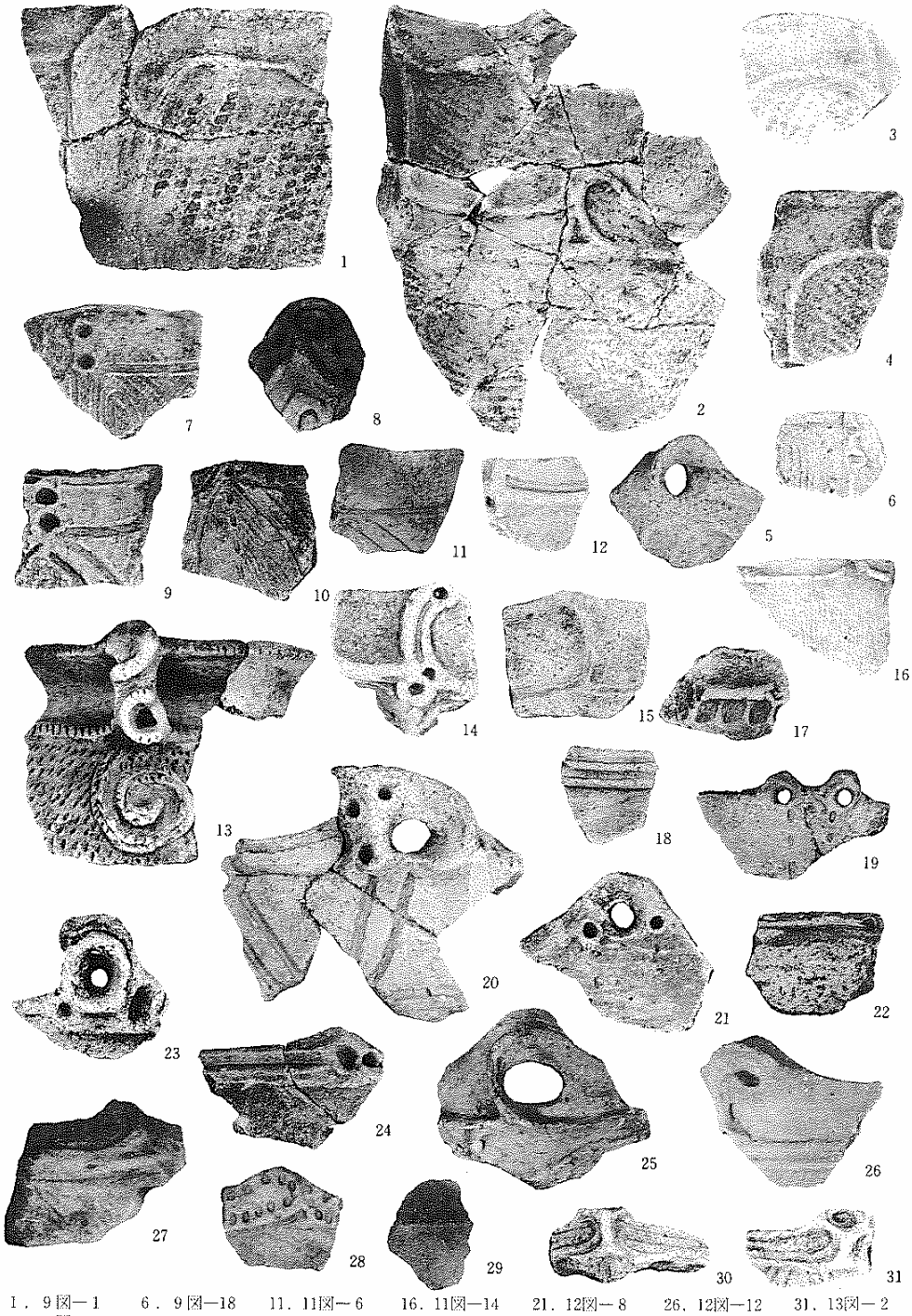
図版２





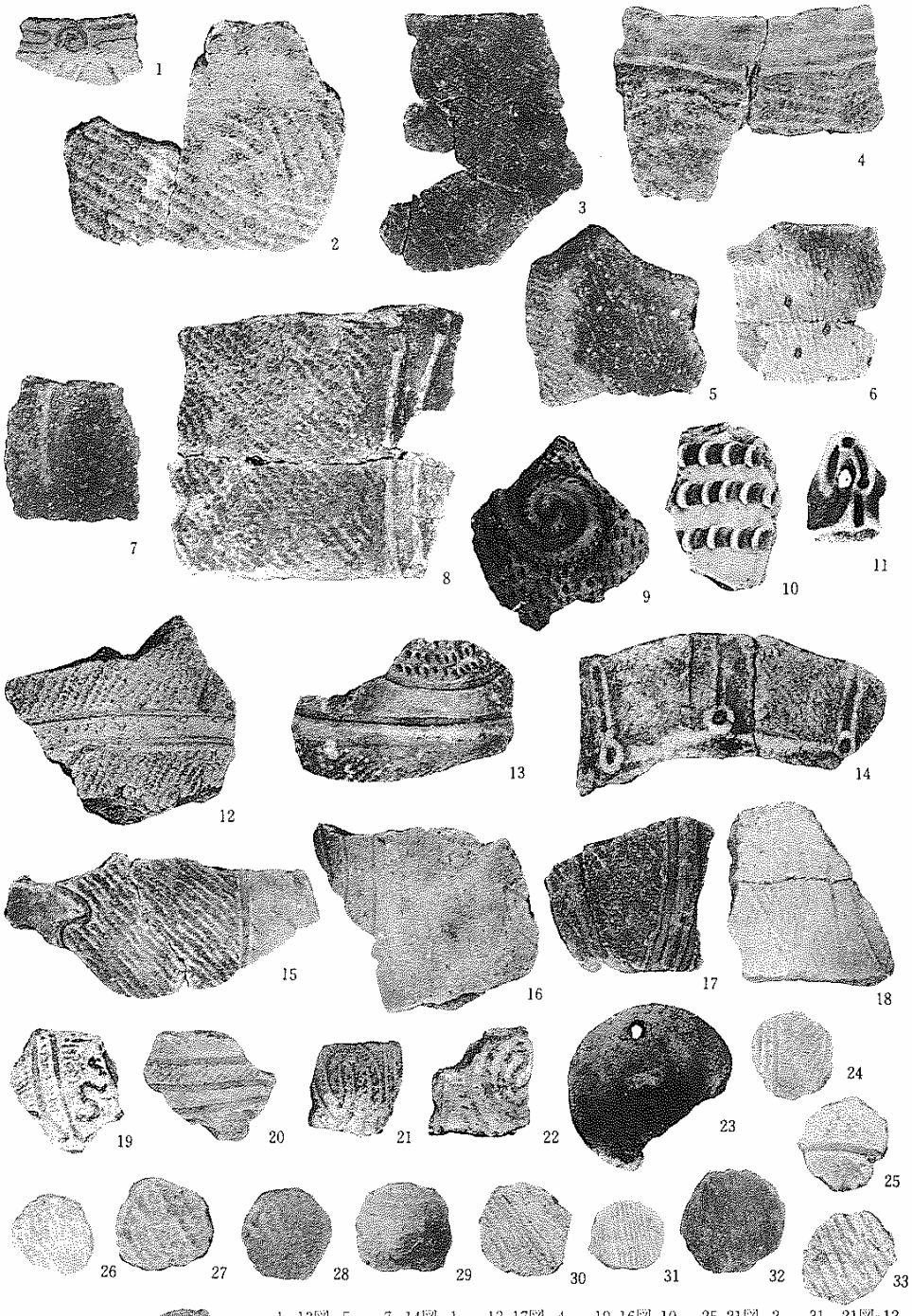
1．10図　　4．8図－2
2．20図－1　　5．8図－1
3．7図

図版3　縄文土器（1）



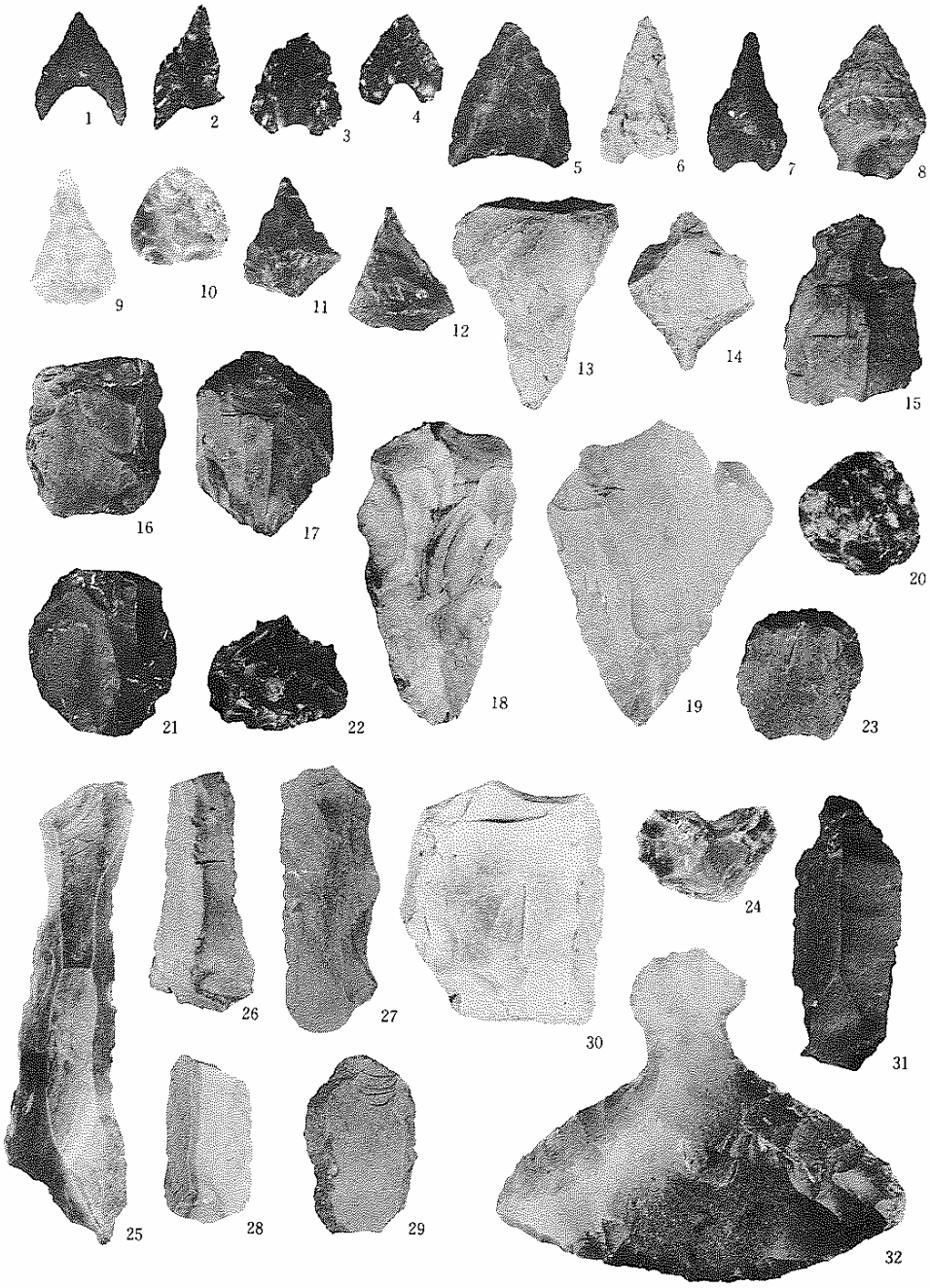
1．9図—1　6．9図—18　11．11図—6　16．11図—14　21．12図—8　26．12図—12　31．13図—2
2．9図—5　7．11図—8　12．11図—9　17．12図—11　22．12図—3　27．12図—17
3．9図—11　8．11図—12　13．12図—10　18．12図—4　23．12図—6　28．12図—15
4．9図—12　9．11図—10　14．11図—1　19．12図—7　24．12図—1　29．12図—16
5．9図—16　10．11図—7　15．11図—2　20．12図—9　25．12図—13　30．13図—3

図版4　縄文土器（2）



1 .13図- 5	7 .14図- 1	13.17図- 4	19.16図-10	25.21図- 2	31. 21図-12
2 .11図-17	8 .14図- 3	14.15図- 1	20.16図- 2	26.21図- 4	32. 21図-13
3 .13図-12	9 .16図- 5	15.15図-21	21.16図-15	27.21図- 5	33. 21図-16
4 . 9図-15	10.16図- 6	16.16図-22	22.16図-16	28.21図- 7	34. 21図-17
5 .13図- 9	11.13図-18	17.15図-12	23.20図- 2	29.21図- 8	35. 21図-18
6 .13図-10	12 16図- 3	18.15図- 4	24.21図- 1	30.21図- 9	

図版５　縄文土器（３）



1．22図—1　6．22図—5　11．22図—10　16．22図—15　21．22図—22　26．23図—26　31．23図—32
2．22図—2　7．22図—6　12．22図—11　17．22図—16　22．23図—23　27．23図—27　32．24図—44
3．22図—3　8．22図—7　13．22図—12　18．22図—18　23．22図—21　28．23図—28
4．22図—　9．22図—8　14．22図—13　19．22図—17　24．23図—24　29．23図—31
5．22図—4　10．22図—9　15．22図—14　20．22図—20　25．23図—25　30．23図—29

図版6　剥片石器

Ⅲ 御堂平（みどうだいら）遺跡

調査要項

遺跡所在地：仙台市鈎取字御堂平

調査主体者：社会教育課文化財係

調査担当者：宮城県教育委員会文化財保護課

調査員：平沢英二郎・斎藤　吉弘・真山　　悟
手塚　　均・太田　昭夫

調査期間：昭和56年7月13日～8月26日

調査対象面積：30,000㎡

発掘面積：7,060㎡

登録番号：ＧＲ（仙台Ｃ－239）

調査協力機関：仙台市教育委員会
宮城県農業短期大学

１．遺跡の位置と環境

本遺跡は仙台市の南西部、長町駅から西へ4.5㎞の仙台市鈎取字御堂平に所在する。

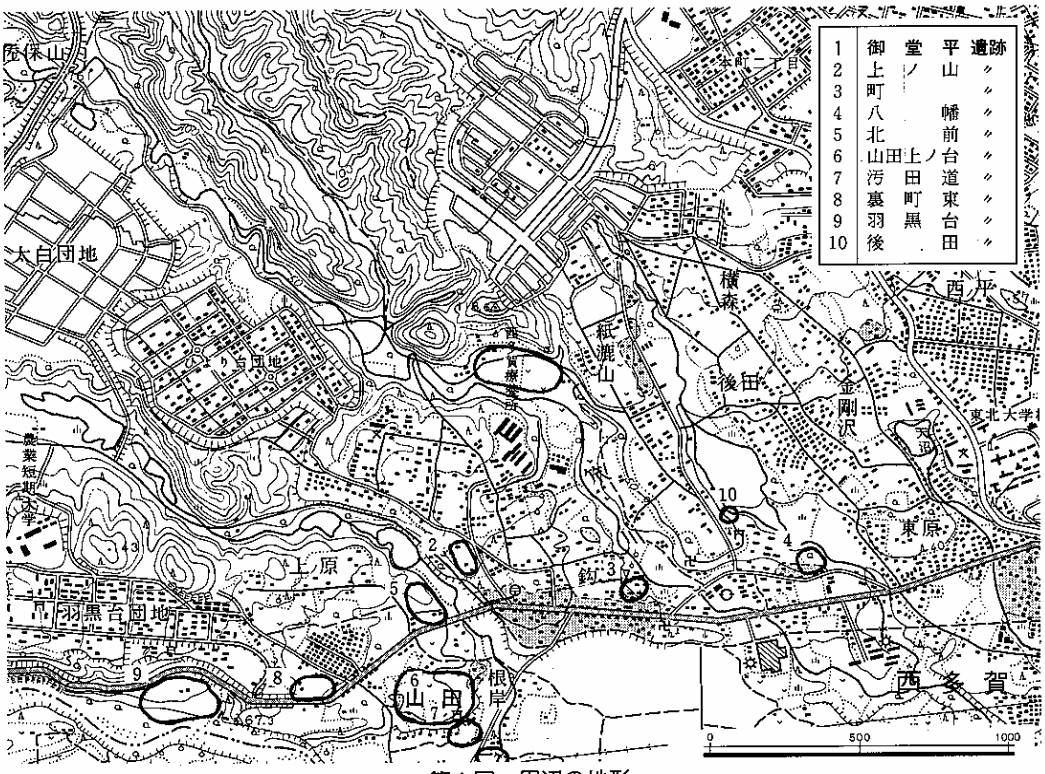
仙台市南西部の地域は西から東へのびてくる青葉山丘陵の東側に位置する。その地形を概観してみると、青葉山丘陵の東端には東と南にのびる樹枝状の丘陵が発達している。この丘陵群の東側にはさらに段丘（中町・下町段丘)、沖積平野が広がっている。これらの丘陵群、段丘、沖積平野を開析して名取川の支流である笊川などの小河川が東流している。

前述した樹枝状にのびる丘陵群の中で佐保山から紙漉山地区にのびる丘陵と太白山から紅堂をへて千本杉地区にのびる丘陵がある。この２つの丘陵は紅堂地区と紙漉地区付近で北と南に張り出して丘陵間が狭くなり狭隘部を形成する。この２つの丘陵の間を笊川が東流し、この狭隘部付近から上流には谷底平地、下流には河岸段丘がみられる。

御堂平と称する地域はこの狭隘部の上流約１㎞、幅 0.6㎞ の範囲である。遺跡は御堂平地区のほぼ中央に位置し、紙漉地区にのびる丘陵の南斜面とそれに続く笊川左岸の段丘面に立地する。

遺跡のある地域は宮城県農業短期大学の実習地となっており、斜面及び段丘面に盛土が行なわれ果樹園、畑、水田として使用されている。

周辺には山田上ノ台遺跡・北前遺跡・羽黒台遺跡などの旧石器時代から平安時代までの数多くの遺跡が分布している。これらの多くは丘陵群の南東側にみられる段丘面に立地している。



第１図　周辺の地形

２．調査の経過

遺跡の範囲は丘陵斜面、河岸段丘面の約30,000㎡である。今回の確認調査は実習地の一部、民地、国管理地、道路をのぞいた校舎（丘陵斜面）とグランド（河岸段丘面）の建設予定地など合せて15,000㎡を対象(注)とした。

調査は7月13日に開始した。始めにグランド予定地にトレンチを設定し調査を行なった。その結果、土壙・焼土遺構などの遺構を地山面で確認した。本地区の遺構を確認した部分は盛土が厚く現地表面から遺構確認面までは比較的深かった。その後、校舎予定地にトレンチを設定して調査した結果、地山面で竪穴遺構を確認した。

トレンチによる遺構確認の結果、校舎建設予定地については斜面が全体的に削平されるために斜面全体の遺構確認を行なうこととした。グランド予定地については盛土工法により遺構が保存されるためトレンチ調査だけとした。

８月に入り丘陵部分の調査に入った。その結果、斜面の旧地形は中央に南からの浅い沢が入り込んでおり、沢の東と西側は傾斜しながら段丘面に続く斜面であった。この斜面で確認した遺構は西側で竪穴住居跡１軒、東側で礎石をもつ建物跡１棟、方形の竪穴遺構１基、掘立柱穴跡などであり、いずれも地山面で確認した。調査は実習地、民地、国管理地部分の調査を残して8月25日に終了した。

３．発見された遺構と遺物

遺跡全体の地形についてみると、遺跡のほぼ中央に南東方向から浅い沢が入り、沢の東と西は南に傾斜しながら河岸段丘面に続いていく斜面となっている。段丘面は沢の東側部分の調査であるが、丘陵から段丘面にかわる部分に東西方向の浅い窪地がみられ、他は南にやや傾斜する平坦面である。

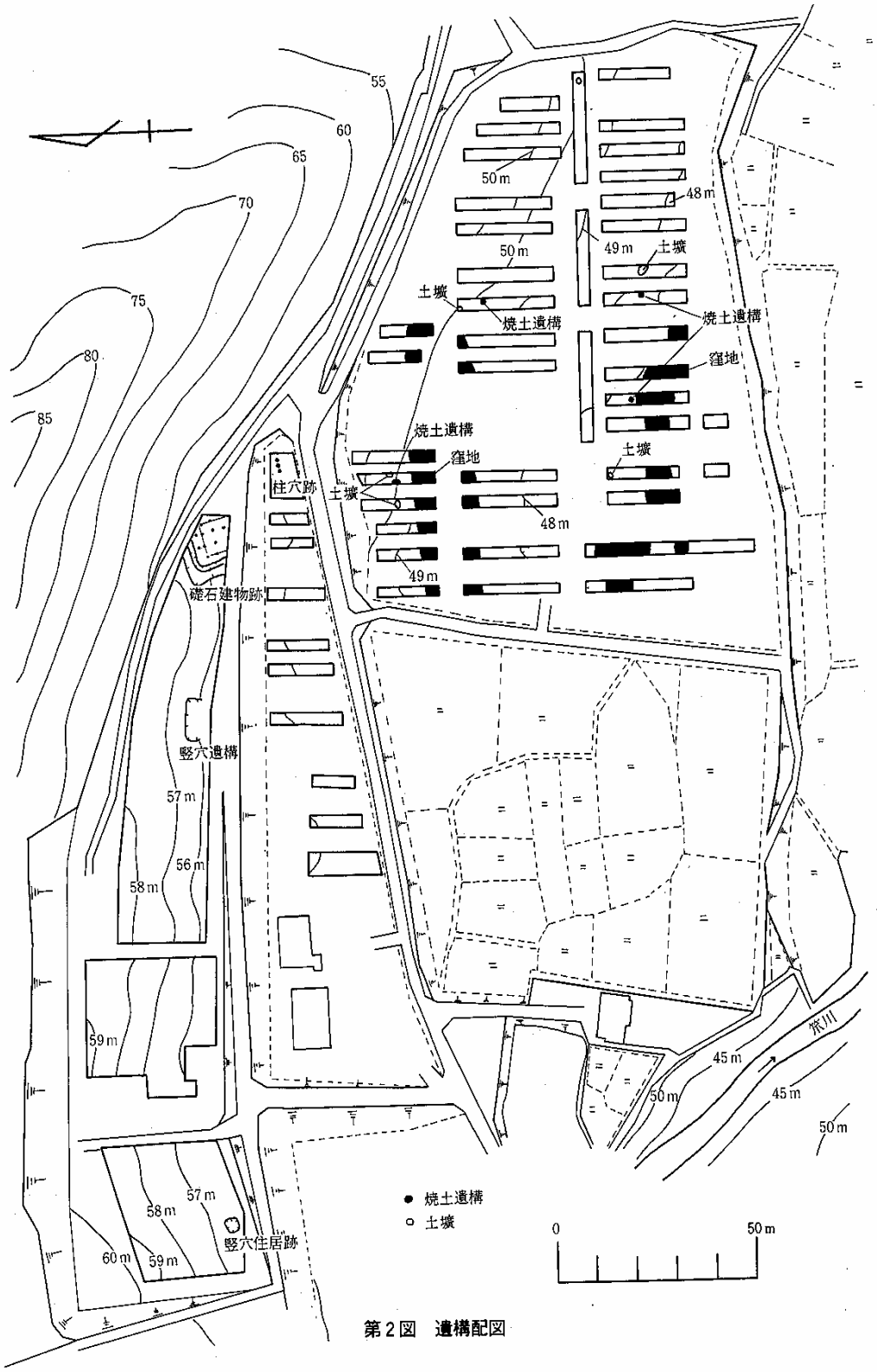
今回の調査で確認した遺構は

丘陵斜面	西側	竪穴住居跡	1	河岸段丘面	土　壙　7
		土　壙	1		焼土遺構　5
	東側	礎石をもつ建物跡	1		
		竪穴遺構	1		
		掘立柱柱穴（３）			

などである。これらの遺構の概略について次にのべる。

（竪穴住居跡）

平面形はほぼ正方形で大きさは長軸3.4m×短軸3.2mである。堆積土は明黄褐色土、黒褐色土などであり、現存する壁の高さは25㎝である。住居内には南西隅にカマドが付設され、北、東、西辺に周溝が認められた。床面は貼床と地山の部分の違いが認められた。なお柱穴などは確認できなかった。遺物はカマド、床面などから土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。土


55
60
65
70
75
80
85
50m
48m
50m
49m
土壙
土壙
焼土遺構
焼土遺構
窪地
焼土遺構
窪地
土壙
柱穴跡
土壙
48m
49m
礎石建物跡
竪穴遺構
57m
56m
58m
59m
常川
45m
50m
45m
50m
57m
58m
竪穴住居跡
60m
59m
焼土遺構
土壙
0
50m

第2図　遺構配図

師器は製作にロクロを使用しているものである。このことから住居跡の年代は平安時代と考えられる。なお、貼床の下から住居跡より古い土壙が確認されたが時期は不明である。

（礎石のある建物）

斜面を削平し積土を行なった平担面に楚石を据え、礎石の周囲に溝が伴なう建物跡である。確認できた建物は東西棟で規模は桁行３間×梁間２間である。礎石は３個だけ確認でき、他は栗石で検出した。礎石列の北と西辺に沿って幅２mの溝が確認された。遺物は溝から土師器坏、須恵器・灯明皿・釘などが出土している。建物の年代は土師器、須恵器などの特徴から平安時代の後半と考えられる。

（竪穴遺構）

南半分は削平されて全体の平面形は不明である。規模は北壁で６mであるが東西壁の残存長は約２mである。堆積土は黒褐色土で壁沿いに残っており、壁の高さは約30㎝である。床面は北壁沿いに残り、凸凹のある地山面を床としている。床面から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器が出土している。遺物から平安時代のものと考えられる。

（河岸段丘面の遺構と遺物）

河岸段丘面では土壙７基・焼土遺構５基を確認した。土壙・焼土遺構とも平面形は長方形や楕円形をしている。

遺物の殆んどは東西方向の浅い窪地の堆積土から出土している。窪地の遺物は２層(黒色土)から土師器・須恵器片が出土し、３層（暗褐色土）からは縄文土器が出土している。

４．まとめ

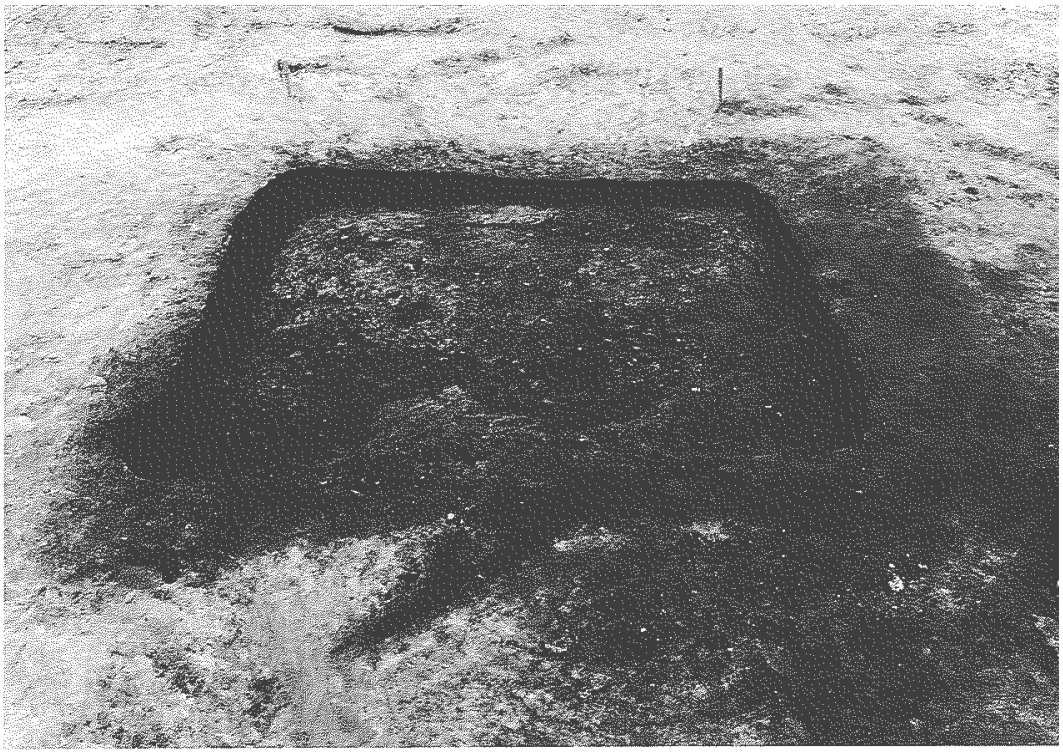
① 御堂平遺跡は丘陵斜面から河岸段丘面にかけて立地する。

② 遺構は丘陵斜面と河岸段丘面のいずれでも確認できた。丘陵部分では竪穴住居跡、礎石をもつ建物跡、竪穴遺構が確認された。河岸段丘面では土壙・焼土遺構が確認された。

③ 遺物は丘陵斜面の遺構から、土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕）・赤焼土器・灯明皿などの平安時代の遺物、河岸段丘面からは縄文土器片・石匙のほか土師器・須恵器などが出土している。

注、昭和57年3月2日～3月12日にかけて、国管理地・実習田の確認調査が行われた。その結果、礎石をもつ建物跡の規模は桁行3間×梁間3間であることがわかった。また、丘陵斜面西側の1号住居の東側では縄文時代中期後半の埋設土器と平安時代はじめの住居跡4軒が確認されている。

この調査の結果、丘陵の南西斜面にも遺構の存在が考えられ、遺跡の範囲はさらに広がるものと思われる。



住居跡

図版１　礎石の建物